

# 渋川廃寺

第2次調査  
第3次調査

2004年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## 正誤表 (財)八尾市文化財調査研究会報告79

頁	行	誤	正
2		3 (747九	(747)
3		17 阿刀氏にって	阿刀氏によって
29		17・ (32)	・ 墓 (32)
117		16 IV	VI
121	6	厚さはcm	厚さは2.3cm
121	22	上弦幅cm	上弦幅約25cm
121	22	弧深cm	弧深4.0cm
124	23	IV	VI
148	渋川麻寺の地点	1・2	38・39

# 渋川廃寺

第2次調査  
第3次調査

2004年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



創建瓦出土狀況



基壇（南から）



基壇近景（西から）

## はしがき

6世紀の巾頃、我国に仏教が伝えられ、推古四年（596）には伽藍を備えた初めての寺院である飛鳥寺が完成し、次いで尼寺となる農浦寺が建立されました。河内においては南河内の新堂廃寺、船橋廃寺、衣縊廃寺、中河内の渋川廃寺、北河内の九頭神廃寺が初期寺院として知られています。

八尾市西部に所在する渋川廃寺は、これまでに見つかっている瓦から7世紀前半に建てられた中河内最古の寺院のひとつと考えられます。またすでに移動されていますが、塔心礎の存在が大正時代以前から知られていました。平成2年には渋川天神社東側で第1次調査が行われ、寺院の主要建物に葺かれる鶴尾が出土したことから、金堂あるいは講堂の存在が明らかになり、整った伽藍をもつ寺院であることも判明しています。

平成13・14年度に実施した第2次・第3次調査では、初めて渋川廃寺の中心付近を調査することになりました。調査では再建塔基壇の確認、文字瓦の出土といった多くの成果が得られました。

今回、この両調査の整理が完了し、報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

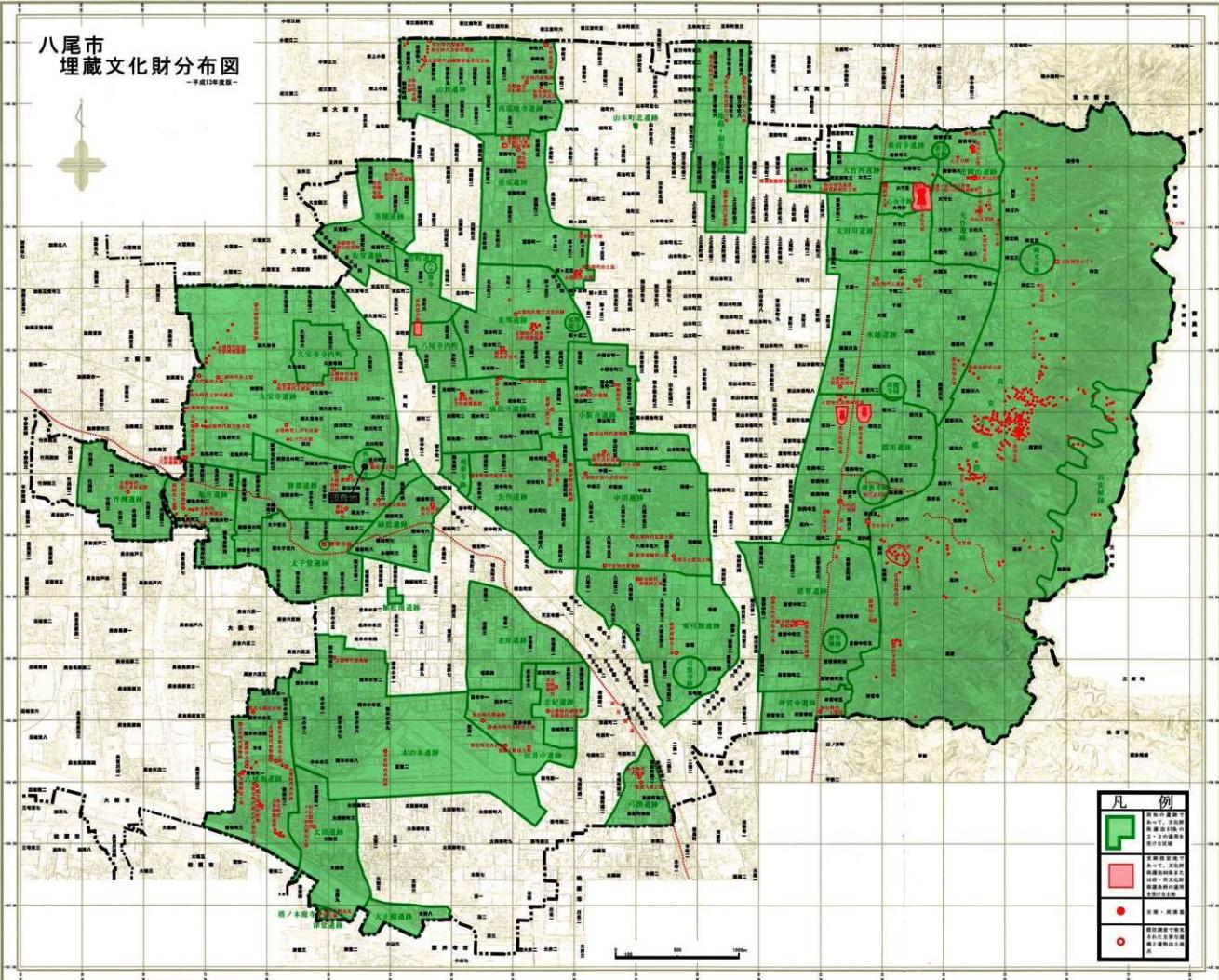
平成16年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成13年度版



## 例　　言

- 本書は、大阪府八尾市に所在する渋川庵寺で実施した第2次調査（S K T2001-2）・第3次調査（S K T2002-3）の発掘調査報告書である。
- 調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が実施したものである。
- 第2次調査は当調査研究会　坪田真一・金親満夫が、第3次調査は坪田が担当した。
- 各調査の要項は下記のとおりである。

第2次調査（S K T2001-2）		第3次調査（S K T2002-3）
指示書番号	八教生文第271号 平成13年10月26日	八教生文第131号 平成14年7月12日
調査地	大阪府八尾市春日町1丁目地内	大阪府八尾市春日町1丁目地内、渋川町5丁目地内
調査原因	都市計画道路築造	市道電車第16号線道路築造
調査委託者	八尾市	八尾市
調査期間	平成14年1月10日～6月28日	平成14年11月18日～平成15年1月31日
調査日数	100日	40日
調査面積	約1970m <sup>2</sup>	約460m <sup>2</sup>

- 現地調査・内業整理には、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・曾龍・竹田貴子・田島宣子・中村百合・永井律子・村井俊子・村田知子・山内千恵子・吉川一栄・若林久美子の参加を得た。
- 内業整理は平成15年度に実施し、遺物実測—伊藤・岩沢・加藤・北原・竹田・田島・中村・永井・村井・村田・山内・吉川・若林・岡面トレース—伊藤・北原・村井・山内・遺物写真撮影—垣内・坪田が行った。
- 本書の執筆は、第1章～第6章が坪田、第7章・附章が金親で、全体の編集は坪田が行った。
- 現地調査・内業整理に際しては以下の方々から有益な御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。（調査時所属機関の五十音順、敬称略）  
森岡秀人（芦屋市教育委員会）、村川行弘（大阪経済法科大学）、柴原永遠男（大阪市立大学）、竹本晃（河内長野市立郷土資料館）、和田萃（京都教育大学）、上原真人（京都大学）、大脇潔（近畿大学）、奥村茂輝・南條直子・西村歩（財団法人大阪府文化財センター）、近藤康司・野田芳正（堺市立埋蔵文化財センター）、吉村通孝（溢川神社）、攝河泉古代寺院研究会の皆さん、森郁夫（帝塚山大学）、井藤徹（日本民家集落博物館）、林満幹彦・上田睦（藤井寺市教育委員会）。
- 航空写真測量・撮影は、第2次調査が株式会社アコード、第3次調査が大阪測量株式会社に委託した。
- 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図（平成8年7月発行）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）を使用した。これ以外の地図を使用する場合は適宜明示した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.値（東京湾標準潮位）である。
1. 本書で用いた方位は国土座標第VI系（日本測地系）の座標北を示している。真北を示す場合は明示した。
1. 遺構の一部は下記の略号で示した。

掘立柱建物-S B	井戸-S E	土坑-S K	溝-S D	ピット-S P
落ち込み-S O	瓦集積-S W	河川-N R		
1. 遺物実測図の縮尺については、土器類が1/4、石類が1/2及び1/5、柱根が1/5である。瓦類については瓦当が遺存する軒瓦、及び文字瓦は1/4とし、それ以外を1/5とした。
1. 遺物実測図の断面は須恵器・陶磁器を黒、瓦類・石・木を斜線とし、他は白とした。
1. 土色については小山正忠・竹原秀雄 1997「新版標準土色帖 1998年版」日本色研事業株式会社を使用した。
1. 註・参考文献は各章末に記した。ただし第3・4章については第4章末にまとめている。

# 本文目次

はしがき	
八尾市埋蔵文化財分布図	
例言	
凡例	
第1章はじめに	1
第2章調査の方法と経過	5
第3章第2次調査	7
第1節基本層序	7
第2節検出遺構と出土遺物	8
第4章第3次調査	97
第1節基本層序	97
第2節検出遺構と出土遺物	97
第5章瓦について	118
第1節型式設定と分類	118
第2節考察	128
第6章まとめ	135
第7章考察	137
第1節瀧川郡龍華村大字瀧川と大字植松(川向)の小字調べ	137
第2節塔心礎はどこですか?	139
第3節寺域と伽藍配置	142
第4節奈良時代における渋川廃寺周辺地域の様相	143
附章渋川廃寺第1次調査の出土遺物	153

# 挿図目次

<第2章>	
第1図 調査位置図	1
第2図 地区割図	5
<第3章>	
第4図 1~3区南壁断面図	9・10
第5図 第1・2面平面図	11・12
第6図 第1面遺構出土遺物	13
第7図 烟突101出土遺物	15
第8図 SK105出土遺物	17
第9図 第2面遺構出土遺物	19
第10図 SE202出土遺物	20
第11図 第2面1区北西部遺構平面・断面図	21
第12図 第3・4面平面図	23・24
第13図 第3面2~3区南平面図	25
第3図 調査区段定図	6
第14図 水田301出土遺物	26
第15図 SB301平面・断面図	27
第16図 第3面土坑平面・断面図	28
第17図 SK306平面・断面図	29
第18図 SK306出土遺物	30
第19図 SK310平面・断面図	31
第20図 SK310H上遺物	32
第21図 SK314・他平面・断面図	34
第22図 SK314・315出土遺物	34
第23図 SK315・317・318・321平面・断面図	35

第24図	S K 316～318・320出土遺物	36
第25図	S D 303・304出土遺物	38
第26図	S D 306・307平面・断面図	39
第27図	S D 306・307出土遺物	39
第28図	S D 319・325・328出土遺物	40
第29図	S D 333・334出土遺物	41
第30図	S D 331・332出土遺物	42
第31図	S D 335・336出土遺物	43
第32図	S D 343平面・断面図	44
第33図	S D 343出土遺物	45
第34図	第3面ピット出土遺物	46
第35図	S W 301・302出土遺物	49
第36図	S W 301出土軒瓦	50
第37図	S W 301出土丸瓦・面戸瓦	51
第38図	S W 301出土平瓦①	52
第39図	S W 301出土平瓦②	53
第40図	S W 302出土軒瓦	54
第41図	S W 302出土軒丸瓦・丸瓦	55
第42図	S W 302出土軒平瓦・平瓦	56
第43図	S W 303出土丸瓦①	57
第44図	S W 303出土丸瓦②	58
第45図	S W 303出土平瓦①	59
第46図	S W 303出土平瓦②	60
第47図	S W 303出土平瓦③	61
第48図	S W 303出土平瓦④	62
第49図	S W 303出土平瓦⑤	63
第50図	S W 304出土瓦	64
第51図	基壇版築層出土土産物	65
第52図	基壇版築層出土軒丸瓦	65
第53図	基壇部分平面図	66
第54図	基壇部分断面図	67・68
第55図	S P 306～312断面図	69
<第4章>		
第87図	水田103・S D 101出土遺物	98
第88図	南壁断面図	99・100
第89図	平面図	101・102
第90図	水田201出土遺物	103
第91図	S D 207出土遺物	104
第92図	S E 301平面・断面図	106
第93図	S E 301出土遺物	107
第94図	S K 301・S D 321平面・断面図	108
第95図	S K 301出土遺物	109
第96図	S D 301・303・304・306・307断面図	109
<第5章>		
第106図	採集軒平瓦	118
第107図	軒瓦分類図	120
第108図	丸瓦分類図	123
<第7章>		
第112図	鷹川郡龍華村大字鷹川の小字分布図	138
第113図	鷹川郡龍華村大字植松(川向)の小字分布図	138
第114図	調査地周辺の地籍図	141
第115図	推定寺域と伽藍配置	142
第116図	奈良時代における氷川庵寺周辺地域	145
<附章>		
第117図	第1次調査平面図	153
第118図	土器群	154
第56図	基壇版築層出土丸瓦①	70
第57図	基壇版築層出土丸瓦②	71
第58図	基壇版築層出土平瓦	72
第59図	整地2出土遺物	74
第60図	整地2山土軒丸瓦	75
第61図	整地2出土丸瓦①	76
第62図	整地2出土丸瓦②	77
第63図	整地2出土平瓦①	78
第64図	整地2出土平瓦②	79
第65図	整地2出土平瓦③	80
第66図	整地2出土平瓦④	81
第67図	整地2出土平瓦⑤	82
第68図	整地2出土石材	83
第69図	N R 301出土遺物	83
第70図	N R 302出土遺物	84
第71図	S K 401・402出土遺物	84
第72図	S K 401・402平面・断面図	85
第73図	S K 403平面	85
第74図	S K 403出土遺物	86
第75図	S K 404平面・断面図	87
第76図	S K 404出土軒平瓦	88
第77図	S K 404出土丸瓦	88
第78図	S K 404出土平瓦①	89
第79図	S K 404出土平瓦②	90
第80図	S K 404出土平瓦③	91
第81図	S P 408出土遺物	91
第82図	S P 403・405～408平面・断面図	92
第83図	包含層出土軒瓦	93
第84図	包含層出土遺物	94
第85図	包含層出土平瓦	95
第86図	側溝出土遺物	95
第97図	S D 306・321・323出土遺物	109
第98図	S K 401出土遺物	110
第99図	S K 401～403平面・断面図	111
第100図	S K 404出土遺物	112
第101図	S D 404出土遺物①	113
第102図	S D 401出土遺物②	114
第103図	S D 401出土遺物③	115
第104図	S D 403出土遺物	116
第105図	包含層出土遺物	116
第109図	平丸分類図①	125
第110図	平丸分類図②	126
第111図	軒瓦分布図	130
第119図	鷲尾	155

## 表 目 次

表1 調査地一覧表	5
表2 第1面土坑（S K 101～104・106）法量表	17
表3 第2面ピット（S P 201～210）法量表	22
表4 第3面溝（S D 301～343）法量表	45～46
表5 第3面ピット（S P 301～3129）法量表	47～49
表6 第4面ピット（S P 401～408）法量表	92
表7 第2面溝（S D 201～220）法量表	105
表8 第3面溝（S D 301～320）法量表	110
表9 主要遺構別の瓦出土状況	128
表10 淀川庵寺周辺地域における奈良・平安時代検出遺構一覧	147～151

## 写 真 目 次

写真1 塔心礎	2
写真2 調査前の状況(西から)	3
写真3 現地説明会(平成14年6月22日)	4
写真4 S E 101(南から)	16
写真5 S D 335・336遺物出土状況(西から)	43
写真6 S P 356(南東から)	47
写真7 S P 360(北東から)	47
写真8 N R 301出土動物遺体(西から)	84
写真9 S K 301遺物出土状況(北から)	107
写真10 S D 401遺物出土状況(西から)	112
写真11 土器群出土状況(北東から)	154
写真12 第1次調査全景(南東から)	156

## 卷頭図版目次

卷頭図版1 創建瓦出土状況

卷頭図版2 基壇(南から)  
基壇近景(西から)

## 図 版 目 次

〈第2次調査航空写真〉

図版1 東方牛跡山を望む  
調査地全景(上が北)

〈第2次調査第1面〉

図版2 1区全景(上が北)  
3区西部(西から)

図版3 4区全景(東から)  
1区西部(東から) 1区西部(北東から)  
3区西部(北東から) 3区東部(南西から)

〈第2次調査第2面〉

図版4 全景 1区 2区 3区(左が北)  
図版5 1区全景(西から)  
2区全景(西から)

図版6 3区全景(西から) 1区西部(北西から)  
水田203軒丸瓦(19)検出状況(西から)  
水田205(北西から) 3区西部(南東から)

〈第2次調査第3面〉

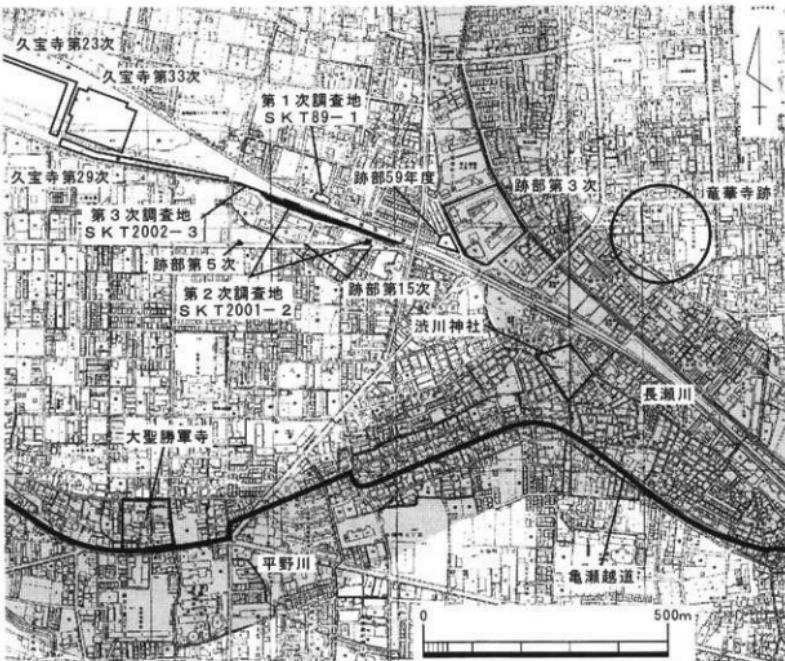
図版7 全景 1区 2区 3区(左が北)  
図版8 1区全景(西から)  
2区全景(東から)  
図版9 3区全景(西から)  
4区全景(東から)  
図版10 1区全景(東から)  
S B 301(南東から)  
図版11 2区東部(東から)  
S K 310(北東から)

図版12 3区西部(南西から)  
S K 317周辺(南東から)  
S K 316(南から)  
S D 331・332、S K 314(南から)  
水田303(南西から)  
S D 338～340(南から)  
図版13 S K 306(上が南)  
同上(北から) 同上(上が南)

- 図版14 1区西部(南西から)  
 SW301(北西から)  
 SW302(東北から)  
 SW302平瓦(278)検出状況(南西から)  
 SW303(南西から)  
 SW304(南東から)
- 図版15 基壇(南から)  
 同上(西から)
- 図版16 整地2内遺物出土状況(南から)  
 整地2内軒丸瓦(392)出土状況(南から)  
 整地2内軒丸瓦(390)出土状況(東から)  
 基壇版築層内丸瓦(337)出土状況(北から)  
 基壇版築層内瓦敷き(南から)  
 基壇版築層内瓦敷き(北から)
- 図版17 整地2内遺物出土状況(南西から)  
 基壇断割り3南壁中央  
 基壇断割り2南壁中央  
 基壇断割り1東壁中央
- 〈第2次調査第4面〉
- 図版18 1区西部(南から)  
 S K 403(南から) S K 404瓦検出状況(北西から) S P 404(西から) S P 408(東から)
- 〈第3次調査〉
- 図版19 第1面全景(西から)  
 第2面全景(西から)
- 図版20 第1面東部(東から)  
 S D 207(南から)  
 S D 207文字瓦(558)検出状況(東から)
- 図版21 S E 301南壁  
 同上全景(北から)  
 同上断割り(北から)
- 図版22 第3面全景(上が北東)  
 第3面全景(西から)  
 第3面東部(東から)  
 S K 301・S D 321(北西から)
- 図版23 第4面全景(上が北東)  
 第4面全景(西から)  
 S D 401遺物検出状況(南西から)  
 S D 403(北から)
- 〈第2次調査出土遺物〉
- 図版24 水田105、鳥糞101・106・107、  
 溝群201、水田301、S K 306
- 図版25 S K 310・314~317
- 図版26 S K 320、  
 S D 304・306・307・325・331・333・334
- 図版27 S D 332・335・343、  
 S P 330・332・336・337、S W 301・302
- 図版28 S W 301
- 図版29 S W 301
- 図版30 S W 301・302
- 図版31 S W 302
- 図版32 S W 303
- 図版33 S W 303
- 図版34 S W 303・304
- 図版35 基壇
- 図版36 基壇
- 図版37 基壇・整地2
- 図版38 整地2
- 図版39 整地2
- 図版40 整地2
- 図版41 整地2
- 図版42 整地2
- 図版43 整地2
- 図版44 N R 301・302、S K 403
- 図版45 S K 403・404
- 図版46 S K 404
- 図版47 S K 404、S P 408
- 〈第2・3次調査出土遺物〉
- 図版48 包含層、側溝、S D 207、S E 301
- 〈第3次調査出土遺物〉
- 図版49 S E 301、S K 301、S D 321、S K 404
- 図版50 S D 401
- 図版51 S D 401、包含層
- 〈軒瓦〉
- 図版52 軒丸瓦I型式
- 図版53 軒丸瓦II型式
- 図版54 軒丸瓦III型式
- 図版55 軒丸瓦V型式
- 図版56 軒丸瓦II・IV型式、文字瓦
- 図版57 軒平瓦I・II・V型式
- 図版58 軒平瓦III・IV型式
- 〈第1次調査〉
- 図版59 土器群(北東から)  
 土器群出土土器
- 図版60 騙尾

# 第1章 はじめに

渋川廃寺は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では、渋川町5丁目、春日町1丁目を中心とした範囲、また遺跡分布図では北側の久宝寺遺跡、南側の跡部遺跡にまたがった範囲にあたる。旧国郡名では河内國渋川郡に位置する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸に位置する。現在の大和川は八尾市の南を東から西に流れているが、これは江戸時代の中期、1704年に付け替えられたものである。それ以前は柏原市付近で分岐した長瀬川と玉串川を主流として南から北に流れていた。そしてこの主流から派生する中・小規模な河川も數多く流れていたことが発掘調査で確認されており、また現在の地図の地割り等からも読み取ることができる。八尾市西部においては、JR八尾駅付近で長瀬川から枝分かれして西流する平野川があり、渋川廃寺はこの両河川の間に発達した安定した土地に位置している。この平野川～長瀬川岸には古代より大和と難波を結ぶ主要ルートであった「亀瀬越道」<sup>1</sup>、「続日本紀天平勝宝八年」に見える「渋河路」<sup>2</sup>、「日本書紀雄略天皇十四年条」に見える「磯齒津路」<sup>3</sup>が通っており、歴史的に見ても当地は重要な地域であったといえる。



第1図 調査地位置図

奈良時代初頭、聖龜2年(716)を中心とする資料である『長屋王木簡』に「渋川御田侍奴末麻呂食指」と記されたものがあり、長屋王家の経営する御田が渋川郡に存在したことがわかる。また天平19年(747)に勘録された『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』には河内国で志貴郡(藤井寺市・柏原市・八尾市)、渋川郡(八尾市・東大阪市・大阪市)、更浦郡(寝屋川市・大東市・四條畷市)、和泉郡(和泉市・岸和田市・泉大津市・貝塚市・他)、日根郡(泉佐野市・泉南市・熊取町・他)、大縣郡(柏原市・八尾市)に寺領を所有していたことが記載されており、渋川郡には水田四十六町二段余、齒地六町、庄一処があったことがわかる。中世にはこの一帯は「橘島」と称され、莊園が置かれていたことが『石清水文書』・『真觀寺文書』・『慈願寺文書』に記されている。

ちなみに渋川(渋河)の名称は『日本書紀崇峻天皇即位前七月(587)』にある「俱率<sup>スル</sup>軍兵、徒志紀郡、到<sup>スル</sup>瀧河家」が初見である。蘇我・物部の争いの際、物部守屋の瀧河の家が攻められるという記事である。また渋川郡の名称は『日本書紀持統天皇三年七月(689)』にある「流<sup>スル</sup>僞兵衛河内國瀧川郡人柏原廣山于土左國」が初見である。河内国渋川郡の柏原広山が土佐に流されるという記事である。

渋川寺という名前の初出は文安5年(1448)の訓海による『太子傳玉林抄』で、「瀧河寺 河州 推古天皇御願 在彼神妙涼東北六七町」とある。これが唯一の史料であり、以降渋川寺の名称は文献に現れることはなかった。明治後期以降、調査地付近に残っていた塔心礎に関する文献が登場する。明治36年の『大阪府誌』には、「大塔の石礎。竜華村大字瀧川の西南、關西鐵道八尾驛の西半町許の田畠の間に存せり。」とある。のことから寺院の存在は当時すでに認識されていたものと思われるが、勝軍寺の項に記されており、南方に位置する聖徳太子建立と伝える勝軍寺の寺域として捉えられている。大正11年の『大阪府全志』でも大字太子堂の項には同様の記述がある。大正13年の『中河内郡廃寺』では「寶積寺 瀧川 八尾驛を距る西約一町の田中に、近年迄大礎石一個存せしが、今は植松の林八郎氏の庭内に運ばれたり。これ實に當寺の遺址なりき。…」と記されている。ここでは塔心礎が掘り出されたことが分かり、周辺の字名から初めて「寶積寺」の寺名が用いられている。これ以降、昭和初期までにこの塔心礎に関する数編の論考がみられるが、いずれもこの寺名を引用している。そして昭和19年、田中重久氏が『聖徳太子御聖蹟の研究』において、『太子傳玉林抄』にある瀧河寺こそが、寶積寺として伝えられている寺院であろうと論じた。以後、寶積寺=渋川寺と考えられるようになる。



写真1 塔心礎

瓦についての報告は、昭和8年の明山大華氏による「河内廢寶積寺塔心礎に就いて」が最初であろう。先述した林八郎氏が野井戸を掘った際に採集した丸瓦を実見したことが記されている。昭和9年の由井喜太郎氏による「龍華寺と寶積寺」では、塔心礎周辺からは無数に古瓦が出土すると記され、忍冬唐草文軒平瓦の小片の拓本が紹介されている。さらに由井氏はこの忍冬唐草文軒平瓦の良好な資料を見つけるに至り、昭和11年、藤澤一夫氏が「考古学」に写真を載せて紹介した。法隆寺最古のものより新しい形式で、白鳳時代末葉に比定されている。またここでは白鳳初期の向原寺式單弁八葉蓮華文軒丸瓦(創建瓦)と、奈良後期の唐草文軒平瓦の出土も合わせて

報告されている。藤澤氏は昭和16年、「摂河泉出土古瓦の研究」でこの創建瓦と忍冬唐草文軒平瓦を取り上げており、創建瓦をもって「瀧川寺式」を設定している。<sup>註14</sup>

発掘調査としては、今回の調査地と線路を隔てた北側、渋川天神社の東側で実施した渋川庵寺第1次調査(S K T 89-1)が唯一である。飛鳥～奈良時代では地鎮遺物を包蔵する土里状遺構や掘立柱建物群の他、大溝からは多量の瓦類が検出され、鷦尾や渋川庵寺の創建軒丸瓦が出土している。これらの成果から、渋川庵寺は中河内最古の寺院で、見つかっている軒瓦から飛鳥時代前期(7世紀前半)に建立されたと考えられている。

渋川庵寺についての研究はそれほど多くはない。列挙すると、由井喜太郎氏は先述の「瀧河の家」を賣積寺としたと仮定した上で、「日本書紀敏達天皇十二年(583)」に見える「阿斗桑市館」や、「日本書紀用明天皇二年四月(587)」の「阿都別業」・「阿都の家」を賣積寺付近に推定している。<sup>註15</sup>「阿斗」・「阿都」については、渋川郡跡部郷、跡部神社等に名を残しており、物部氏と同祖関係で郷名氏族である阿刀氏に関連している。安井良三氏は同じく「瀧河の家」を渋川庵寺の前身とし、瓦葺寺院となるまでの草堂的な建物の存在を想定し、建立者を物部守屋<sup>註16</sup>としている。田中重久氏は、渋川の地が物部氏の所領であったことから、天平時代に物部氏の菩提を弔うために建立されたと考えた。<sup>註17</sup>渋川庵寺についての総合的な研究は山本 昭氏<sup>註18</sup>に依るところが大で、「河内竜華寺と渋川寺」・「河内国渋川寺について」<sup>註19</sup>がある。山本氏は創建瓦の年代や渋川寺の立地から、物部氏滅亡後に聖德太子が行った計画的造寺の一つであると推測し、太子没後、阿刀氏によって維持されたとしている。また「続日本紀神護景雲三年十月(769)」に見える称徳天皇が参詣した竜華寺と同一の寺であるとの論を展開している。そして今回の発掘調査成果を受け、これら先学の論考を踏まえた上で、酒 章氏<sup>註20</sup>・金親満夫氏は渋川庵寺の建立者やその位置付けについて論考を発表している。

今回の2件の調査は、西方で実施されている旧国鉄竜華操車場跡地再開発の一貫である都市計画道路築造に伴うものである。この再開発にあたっては、平成7年度以降、財団法人大阪府文化財調査研究センター(現、財団法人大阪府文化財センター)・八尾市教育委員会・当調査研究会による調査(久宝寺遺跡)が実施され、縄文時代～近世にわたる多大な成果が得られている。今回の調査地近辺では久宝寺遺跡第29次調査(K H 99-29)が実施されており、弥生時代中期末の土器埋納遺構、弥生時代後期末の土器集積、古墳時代前期布留式期の水田、奈良時代の井戸等の他、東端部では古墳時代中期頃に埋没する大規模な河川が検出されている。また奈良時代の河川から出土した墨書き筒には「役所」の存在を想定させる内容が記されていた。その北側の久宝寺遺跡第33次調査(K H 2000-33)では奈良～平安時代の溝から出土した奈良三彩が特筆される。さらに周辺での調査成果を概観すると、南西約100mの跡部遺跡第5次調査(A T 89-5)では、弥生時代末に埋納された銅鏹<sup>註21</sup>が、また調査地南側道路上での跡部遺跡第15次調査(A T 93-15)では古墳時代前期(布留式古相)<sup>註22</sup>の土坑が検出されている。東部約100mの市教委昭和59年度調査では古墳時代後期の土坑が検出され、<sup>註23</sup>



写真2 調査前の状況（西から）

その東側の跡部遺跡第3次調査（A T87-3）では、大和川付け替え以前の長瀬川の旧流路や左岸堤防、近世の井戸・水路が検出されている。<sup>1125</sup>

註

- 註1 橋橋利光・他 1989『奈良街道』大阪府教育委員会  
註2 下中邦彦 1986『大阪府の地名』株式会社平凡社  
註3 寺崎保広・森公章・他 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良県教育委員会  
註4 高田良信・森 郁夫 1996『法隆寺文化のひろがり』法隆寺  
註5 山本 昭 1983「河内竜華寺と浜川寺」「藤澤一夫先生古稀記念 古代文化論叢」藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会  
註6 田中周二 1903(1970復刻)『大阪府誌 第五編』株式会社思文閣  
註7 井上正雄 1922(第3編第2章第2節第35項 龍華村)『大阪府全志 卷之四』  
註8 片岡英宗 1924『寶積寺 藤川』『中河内郡廢寺』  
註9 田中重久 1944(第3編 聖德太子建立四十六院の研究)『聖德太子御聖蹟の研究』田中秀吉  
註10 明山大華 1933(河内廢寶積寺塔心礎に就いて)『考古學雑誌 第二十三卷 第五號』考古學會  
註11 由井喜太郎 1934(龍華寺と寶積寺)『上方 第四十八號』上方郷土研究會  
註12 藤澤一夫 1936(學界近事)『考古學 第七卷 第十號』東京考古學會  
註13 藤澤一夫 1941(攝河泉出土古瓦の研究一編年的様式分類の一試企一)『佛教考古學論叢』東京考古學會  
註14 青木鶴時 1990/23. 浜川廃寺(第1次調査)『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』財團法人八尾市文化財調査研究会  
註15 前掲註11  
註16 安井良三 1968『物部氏と仏教』『日本書紀研究 第三冊』塙書房  
註17 前掲註9  
註18 前掲註5  
註19 山本 昭 1986『河内国浜川寺について』『帝塚山考古学 No 6』帝塚山考古学研究所  
註20 坪田真一・沼 斎・金親満夫 2003『浜川廃寺とその背景』『河内どんこうNo69』やお文化協会  
金親満夫 2003(河内浜川廃寺異聞)『続文化財論叢』文化財論集刊行会  
註21 原田昌則 2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』財團法人八尾市文化財調査研究会報告74』財團法人八尾市文化財調査研究会  
註22 成海佳子・樋口 薫・金親満夫 2001(4. 久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33))『平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財團法人八尾市文化財調査研究会  
註23 安井良三・成海佳子 1991『跡部遺跡発掘調査報告書』大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸一』財團法人八尾市文化財調査研究会  
註24 岡田清一 1997(3. 跡部遺跡(第15次調査))『財團法人八尾市文化財調査研究会報告58』財團法人八尾市文化財調査研究会  
註25 鳴村友子 1985(1. 跡部遺跡の調査)『八尾市文化財調査報告11』八尾市教育委員会  
註26 成海佳子 1988(19. 跡部遺跡(第3次調査))『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』財團法人八尾市文化財調査研究会



写真3 現地説明会（平成14年6月22日）

## 第2章 調査の方法と経過

第2次・第3次調査地は連続しており、東西方向に細長く総延長約346mにわたる。第2次調査地は連続する1～3区(西から)、及び3区南側に位置する平面不整方形の4区に分かれる。各調査区の規模等は下記の表にまとめた。第2次調査は4・3・1・2区の順に調査を開始し、4区と3区、1区と2区は並行して調査を実施した。また1区の調査中、建物基壇と考えられる遺構が検出され、この部分については調査区を北側に拡張して調査を実施した。

地区割については、渋川廃寺推定地全域を含む東西500m・南北300mの範囲において、国土座標第VI系を基準として設定した。地区名は、100m方眼の大区画(1～15)と10m方眼の小区画(1A～10J)により「8～5J区」という様に呼称する。

掘削については現地表面(標高T.P.+9.8～10.2m)から約0.6～2.2mを機械により掘削し、以下の約0.6m(標高T.P.+8.0～8.5mまで)を人力掘削により調査を実施した。

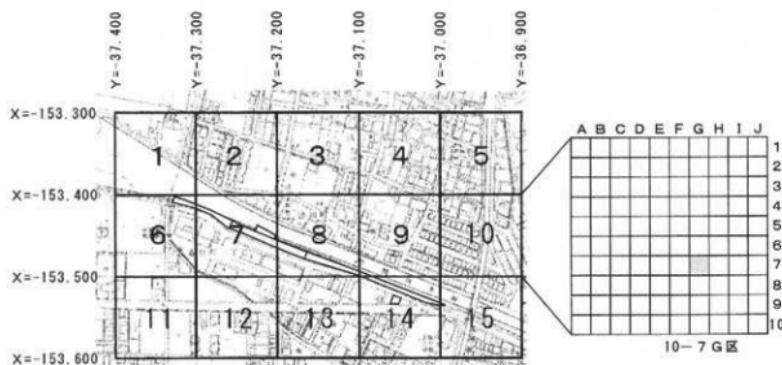
平面実測では航空写真測量を実施した。第2次調査が8回、第3次調査が2回である。

なお第2次調査中、平成14年6月22日(土)に、1区西部を対象として現地説明会を実施し、市内・外より106名の見学者があった。

第2次調査で検出した基壇については保存の必要性が認められ、八尾市都市整備部龍華地区都市拠点整備室、八尾市教育委員会文化財課との協議の結果、この部分は設計深度までの調査は行わず、真砂土により埋め戻し保存することとなった。

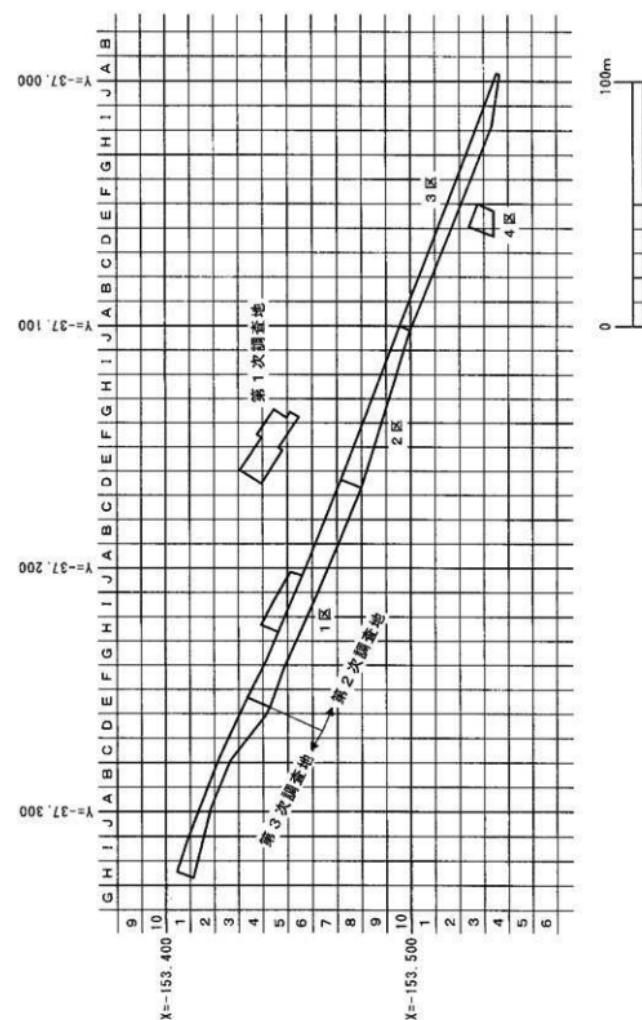
表1 調査地一覧表

	規 模			調査期間
	東西	南北	面積	
第2次調査	1区 95.6m	9.4～16.4m	約1970m <sup>2</sup>	平成14年1月28日～6月28日
	2区 70.6m	4.6～9.6m		平成14年3月13日～5月2日
	3区 109.4m	1.4～5.6m		平成14年1月15日～3月1日
	4区 10.0m	7.4～11.0m		平成14年1月10日～2月1日
第3次調査	76.0m	4.5～9.1m	約460m <sup>2</sup>	平成14年11月25日～15年2月14日



第2図 地区割図

第3図 調査区範囲図



## 第3章 第2次調査

### 第1節 基本層序

- 0層：操車場造成時の盛土。層厚0.6～1.4mを測る。現地表面の標高は調査地西端で約T.P.+9.7m、東端で約10.2mである。
- 1層：旧耕土に当りグライ化が著しい。調査地全域に見られる。上面の標高はT.P.+9.3～8.9mを測る。層厚は最大約0.3mで、最大で4層に細分できる。
- 2層：近世～近代の水田作土、及び島畑盛土を包括して2層とした。調査地全域に見られる。水田作土はグライ化し、島畑盛土はよく締まった攪拌層でマンガン斑・斑鉄を多く含む層相である。上面が第1面。
- 3層：10YR5/1褐色～10YR6/2灰黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト。砂粒は東部ほど粗粒化し、細礫となる。マンガン斑・斑鉄を多く含む土壤化層で、1区西部に見られる。
- 4層：10YR6/1褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。1区中央の島畑104下部に見られ、北から南に下がる堆積である。下層部にブロック状を呈する部分が認められ、島畑104構築の際の整地に伴う盛土層と考えられる。
- 5層：2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～細礫混シルト。鉄分を多く含み固く締まる。4層の東側に、東に下がる状況で堆積しており、4層と同様、整地に伴う盛土層と考えられる。
- 6層：7.5YR6/1褐色粘土混シルト～極粗粒砂。1区東部に見られる。主体となる砂層は下位の砂層(10B層)が巻き上げられたものである。汚れた土壤化層で、鉄分を多く含み固く締まる。
- 7層：2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト。2区東半部～3区西部に見られる。上部は土壤化し、マンガン斑を特に上部に多く含み、西部では炭を含む。
- 8層：10YR6/2灰黄褐色細粒砂～細粒砂混粘土。3区東部に見られる。マンガン斑・斑鉄を多く含む土壤化層である。調査時には湧水が著しかった。
- 3～7層上面が第2面である。
- 9層：10YR6/1褐色～10YR6/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。砂粒は主に上部に含んでおり、マンガン斑・斑鉄を含む土壤化層である。1区西部に見られ、ここではこの上面が第3面である。
- 10層は水成層で、上部はマンガン斑・斑鉄を含み土壤化する。この上面までが調査対象である。上面の標高はT.P.+8.2～8.7mとかなりの起伏が認められ、2区西部～1区東部が最も高く、ここに南東～北西方向の自然堤防が形成されており、東・西に下がって行く状況である。層相から10A層～10D層の4層に分かれる。9層が存在する1区西部を除いて、10層上面が第3面である。
- 10A層：7.5YR6/1褐色シルト～シルト混粗粒砂の互層。層位的に10B層より上層に当る。1区西半部に見られ、ここではこの上面が第4面に当る。
- 10B層：10YR5/1褐色～10YR5/2灰黄褐色シルト混粗粒砂～中礫。鉄分含む。1区東半～2区西半に見られる。
- 10C層：10YR6/1褐色～2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土。層位的に10B・D層より上層に当る。上部はマンガン斑・斑鉄を含み固く締まる。2区東半部～3区東部に見られる。

10D層：2.5Y6/1黃灰色シルト～極粗粒砂の互層。下部に中疊を含み、上方細粒化が認められる。

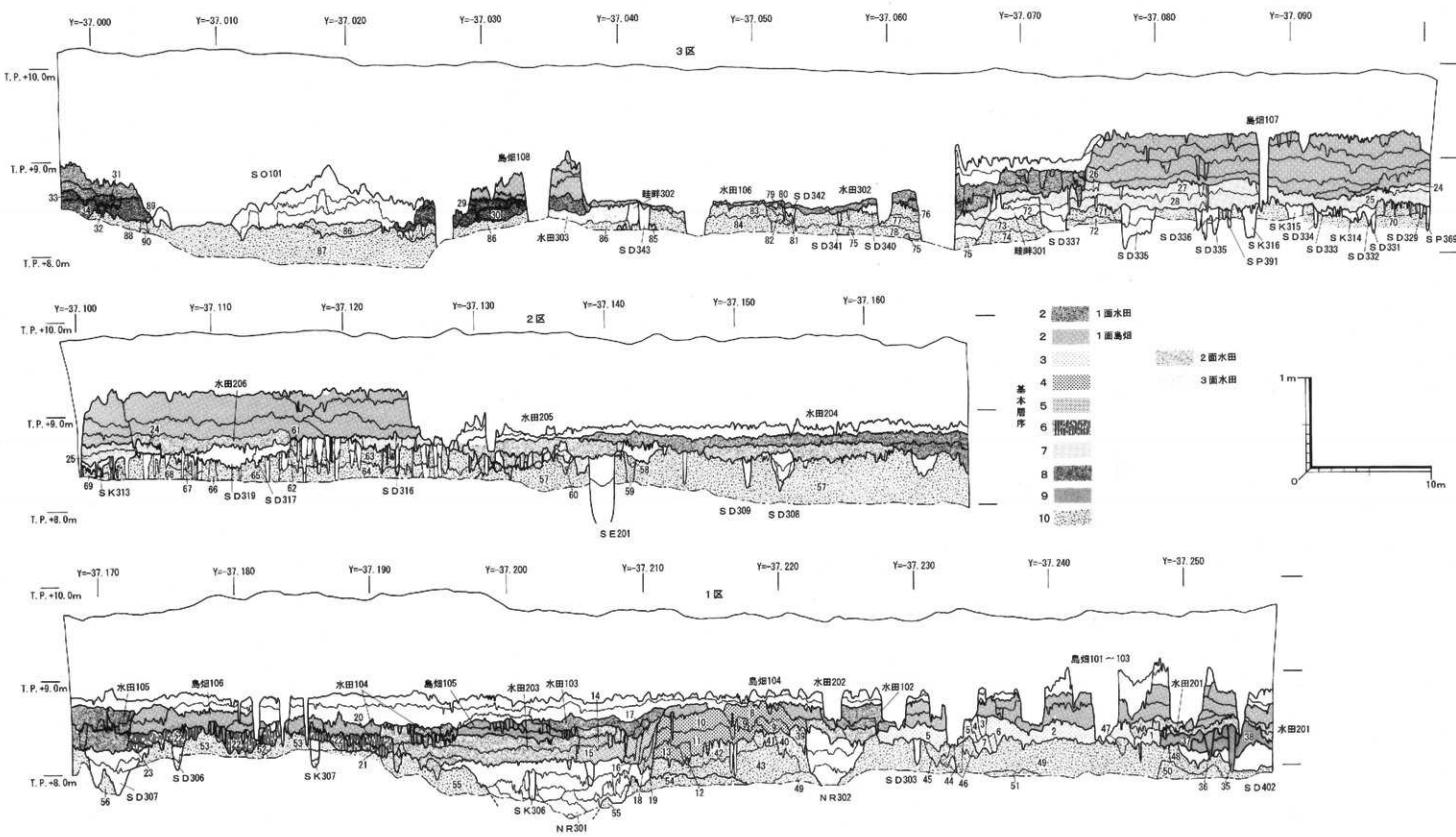
3区東端に見られる。

基本層番号	層名	基本層番号	層名
3	1 10YR7/2にぶい黃褐色細粒砂～極粗粒砂混粘土	46 10YR5/1褐色細粒砂～中粒砂混粘土	
	2 10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂混シルト	47 2.5Y5/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト	
	3 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	48 10YR5/1褐色細粒砂ブロック混粘土質シルト	
	4 10YR6/2灰黃褐色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	49 7.5YR6/1褐灰色シルト混極細粒砂～粗粒砂	
	5 10YR6/1褐灰色中粒砂多混シルト質粘土	50 2.5Y6/1黃灰色シルト混中粒砂～細疊	
	6 10YR5/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土	51 7.5YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂	
	7 10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土	52 10YR5/1褐色細粒土混細粒砂～粗粒砂	
	8 10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	53 10YR5/1褐色細疊～中疊	
	9 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土	54 2.5Y4/2暗黃色シルト少混疊	
	10 10YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	55 2.5Y5/2暗黃色シルト～極細粒砂混粗粒砂～細疊	
4	11 10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト	56 2.5Y6/1黃灰色細粒砂～中疊互層	
	12 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混粘土	57 2.5Y4/1黃灰色シルト混中粒砂～細疊	
	13 10YR6/1褐灰色粘土質シルト混細粒砂～細粒砂	58 10YR6/2灰黃褐色粘土混中粒砂～細疊	
	14 2.5Y5/2暗黃色シルト～細疊少混粗粒砂～中粒砂	59 10YR5/2灰黃褐色粗粒砂～細疊混粘土質シルト	
	15 2.5Y5/2暗黃色細粒砂～粗粒砂中粒砂	60 10YR5/1褐色細粒シルト質粘土混中粒砂～細疊	
	16 2.5Y4/2暗黃色細粒砂混粗粒砂質シルト	61 10YR5/1褐色細粒砂混シルト質粘土	
	17 2.5Y5/2暗黃色シルト～極細粒砂混粗粒砂	62 2.5Y5/1黃灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	
	18 5YS/1オリーブ灰色細粒少疊シルト質粗粒砂	63 10YR6/1褐灰色極細粒砂混シルト	
	19 5YS/1灰色極粗粒砂混細粒砂～中粒砂質シルト	64 10YR5/1褐色極粗粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	
	20 2.5Y5/2暗黃色細粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂	65 5YS/1灰色シルト質粘土	
5	21 2.5Y5/3黃褐色シルト～極細粒砂	66 10YR5/2灰黃褐色極細粒砂混粘土質シルト	
	22 7.5YR6/1褐灰色シルト～粗粒砂	67 2.5Y6/2灰黃褐色粗粒砂～中粒砂混シルト質粘土	
	23 7.5YR6/1褐灰色粗粒砂～粗粒砂混粘土	68 2.5Y5/1黃灰色シルト質粘土	
	24 10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	69 2.5Y5/2暗黃色シルト質粘土	
	25 10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト	70 2.5Y6/1黃灰色中粒砂混粘土質シルト	
	26 2.5Y6/1黃灰色細粒砂～細疊混シルト	71 2.5Y6/1黃灰色細粒砂少混粘土質シルト	
	27 10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	72 10YR6/1褐色細粒土質シルト	
	28 10YR5/1褐灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト	73 10YR7/2にぶい黃褐色シルト質粘土	
	29 10YR7/2にぶい黃褐色細粒砂～細粒砂混シルト質粘土	74 5Y6/1灰色シルト質粘土	
	30 10YR6/2灰黃褐色極細粒砂～細粒砂混粘土	75 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土	
6	31 5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	76 2.5Y5/1黃灰色シルト質粘土	
	32 10YR8/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土 ブロック状	77 5YS/1灰色粘土質シルト	
	33 10YR6/2灰黃褐色細粒砂混シルト	78 5YS/1灰色シルト質粘土	
	34 2.5Y6/1黃灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	79 10YR7/2にぶい黃褐色シルト～極細粒砂	
	35 2.5Y6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	80 2.5Y6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混粘土	
	36 10YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	81 7.5Y5/1灰色シルト混粘土質シルト	
	37 10YR6/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土	82 2.5Y6/1黃灰色シルト混粘土質シルト～極細粒砂	
	38 10YR6/1褐灰色シルト質粘土	83 10YR6/2灰黃褐色細粒砂少混シルト質粘土	
	39 10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土	84 10YR6/1褐色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土	
	40 10YR7/2にぶい黃褐色細粒砂混シルト	85 7.5YR6/1褐灰色シルト混中粒砂～粗粒砂	
7A	41 10YR7/2にぶい黃褐色中粒砂～粗粒砂多混シルト	86 5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土	
	42 2.5Y6/1黃褐色細粒砂多混シルト質粘土	87 2.5Y6/1黃灰色シルト～極粗粒砂	
	43 2.5Y6/2灰黃褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土	88 10YR6/1褐色細粒砂～細粒砂混粘土質シルト	
	44 10YR5/2灰黃褐色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土	89 10YR6/1褐灰色シルト～細粒砂	
	45 10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土	90 10YR6/1褐灰色中粒砂～粗粒砂	
10C			
10D			

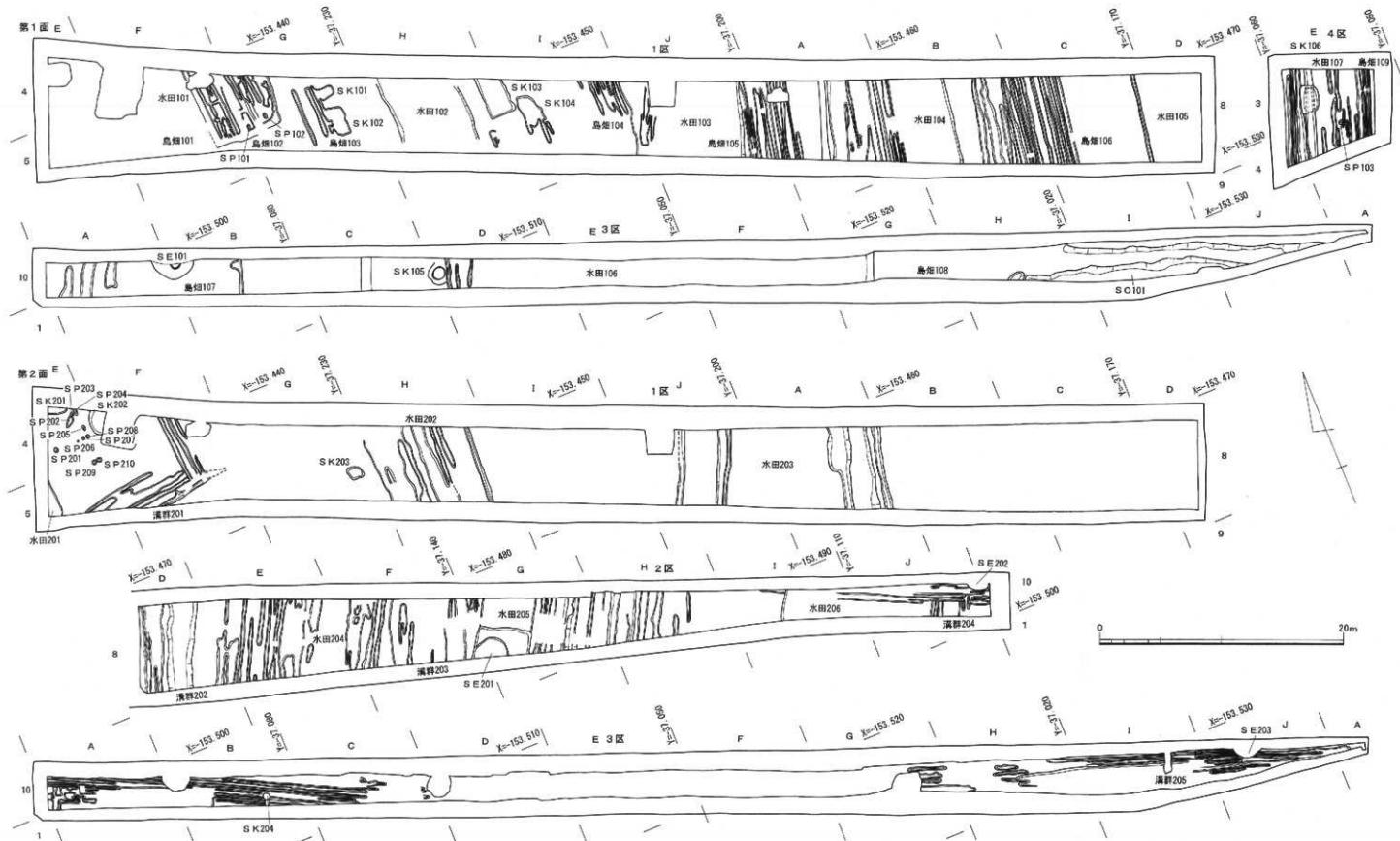
## 第2節 検出構造と出土遺物

調査では、盛土部分及び旧耕土・床土を機械掘削により除去し、以下第4面までの調査を実施した。第1面・第2面では中世～現代にわたる鳥糞・水田・溝といった生産関連の構造を主に検出した。第3面は飛鳥～鎌倉時代の構造面で、奈良時代には大規模な整地が行われている。第4面は1区西部で飛鳥～奈良時代の土坑・溝・ピットを検出した。

調査により出土した遺物はコンテナ100箱を数えるが、その内1区出土の瓦類が多くを占める。これらの瓦の分類等については第5章第1節にまとめた。



第4図 1～3区南壁断面図



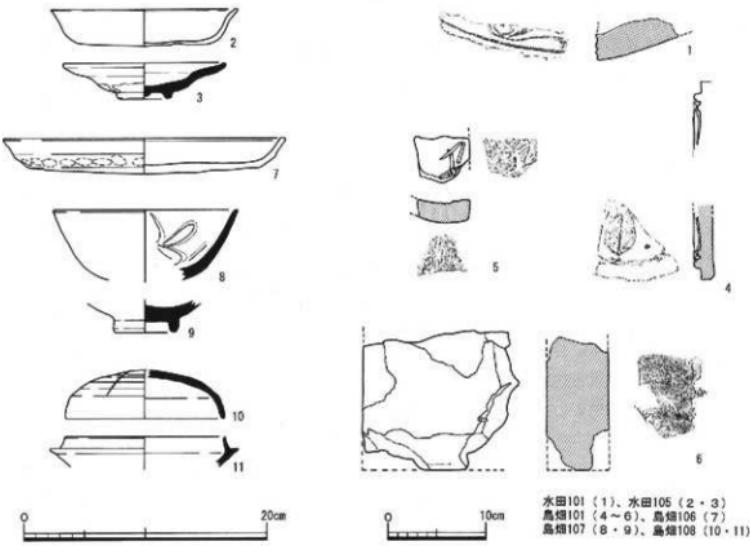
第5図 第1・2面平面図

### 〈第1面〉

1・3・4区で調査を実施した。近代の耕作面にあたり、基本的には水田と島畠が交互に連なる状況である。上面の標高はT.P.+9.2~8.5mを測り西が高い。検出遺構は水田7筆(水田101~107)、島畠9基(島畠101~109)、井戸1基(S E 101)、土坑6基(S K 101~106)、ピット3個(S P 101~103)、落ち込み1基(S O 101)である。概ね水田作土はグライ化した灰色~黄灰色系の砂混じり粘土質シルト、島畠盛土は褐灰色系の砂混じりシルトである。島畠は第2面をベースとして盛土により構築されている。土坑・ピットの多くは、水田内や島畠上面で検出されたもので、耕作に伴うものであろう。また、遺構名は冠しなかったが、水田・島畠部では耕作に伴う溝84条を検出している。1区では水田103を境として東・西で耕作溝の方向がやや異なっている。

#### 水田101

7-4・5F・G区に位置する。西を島畠101、南を島畠102、東を島畠103で区画され、北は調査区外に続いている。規模は南北7.0m以上、東西約6.2mを測る。作土は5Y6/1灰色細粒砂~中粒砂混シルト(斑鉄)である。作土下面ではピット2個(S P 101・102)、水田を周回する溝1条、南北方向の溝9条、東西方向の溝2条を検出した。S P 101は長辺40cm・短辺27cm・深さ5cm、S P 102は長辺47cm・短辺28cm・深さ7cmを測る。これらの遺構埋土は10YR6/1褐灰色細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト(斑鉄多)である。作土や上部の埋土からは土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器が少量の他、大量の瓦片が出土した。ほとんどが細片であるが約1600点を数える。整地の際に投棄されたのである。軒平瓦(1)を図化した。1は軒平瓦I型式である。瓦当の左部分下半部に当たる破片で、上面は接合部分である。色調は灰色を呈する。



第6図 第1面遺構出土遺物

水田101(1)、水田105(2・3)  
島畠101(4~6)、島畠106(7)  
島畠107(8・9)、島畠108(10・11)

### 水田102

7-5・6 H区に位置する。西を島畠103、東を島畠104で区画され、北・南は調査区外に続いている。規模は南北6.7m以上、東西約6.0mを測る。位置は第2面水田202を踏襲している。作土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト（斑鉄、ブロック状）である。作土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器、石材（芝山石1点：西方の久宝寺遺跡七ツ門古墳では石室石材として使用されている）が出土している。

### 水田103

7-6・7 I・J区に位置する。西を島畠104、東を島畠105で区画され、北・南は調査区外に続いている。規模は南北6.1m以上、東西約9.8mを測る。作土は2.5Y6/2灰黄色中粒砂～粗粒砂混シルト（鉄分、グライ化）である。作土下面で北東-南西方向の溝2条を検出した。埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト（鉄分、グライ化）である。作土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。

### 水田104

8-7・8 A・B区に位置する。西を島畠105、東を島畠106で区画され、北・南は調査区外に続いている。規模は南北7.2m以上、東西約10.5mを測る。作土は10YR5/1褐色中粒砂～細礫混シルト（鉄分多、マンガン斑）である。作土下面で南北方向の溝8条を検出した。埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト（鉄分多）である。作土からは土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。

### 水田105

8-7・8 C・D区に位置する。島畠106の東に広がり、規模は南北7.4m以上、東西約5.8m以上を測る。作土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト（斑鉄）である。西端の作土下面で溝1条が検出され、これにより水田106と区画される。埋土は10YR7/2にぶい黄橙色中粒砂混粘土質シルト（斑鉄）である。作土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器片が出土している。土師器杯（2）・唐津皿（3）を図化した。2は平城杯Aにあたり、口縁部の巻き込みは小さく、底部の凹凸が著しい。口縁部に芯痕が1箇所認められる。表面の剥離が著しく調整等は不明である。口径15.4cm・器高3.0cmを測る。3は折縁皿で、灰色の釉が内面から外面上半部に掛かり、見込み・高台端部に3箇所の砂目を有する。底部は兜巾を有する三日月高台である。

### 水田106

14-1～3 C～G区に位置する。西を島畠107、東を島畠108で区画され、北・南は調査区外に続いている。規模は南北2.8m以上、東西約40.5mを測る。作土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト（斑鉄）である。作土下面で土坑1基（S K 105）、南北方向の溝3条を検出した。溝埋土は10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂～極粗粒砂である。作土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、近世陶磁器が出土している。

### 水田107

4区西半部の14-3・4 D・E区で検出した水田である。規模は南北8.0m以上、東西5.9m以上を測る。作土は5Y4/1灰色粗粒砂～細礫混シルト質極細粒砂～細粒砂（管鉄、斑鉄）である。作土下面でピット1個（S P 103）、南北方向の溝12条を検出した。S P 103は長辺30cm・短辺29cm・深さ5cmを測り、埋土は2.5Y5/1黄灰色細礫少混細粒砂質シルト（ベース層のブロックを含

む)である。溝埋土は水田107作土と同層の他、2.5Y4/1黄灰色細礫混細～中粒砂質シルト(斑鉄)、2.5Y5/1黄灰色細礫少混細粒砂質シルト(ベース層ブロック混)がある。

#### 島畠101

調査地西端の7-4・5E・F区に位置する島畠で、規模は南北9.5m以上、東西約13.3m以上を測る。盛土は10YR4/2灰黄褐色～10YR5/4にぶい黄褐色の細粒砂～中粒砂混粘土質シルト(マンガン斑)である。盛土の堆積状況から、南、東に順次拡張していることが確認できた。盛土からは土師器、須恵器、縦軸陶器、瓦器、瓦類、輸入陶磁器、国産陶磁器が出土しており、瓦類は破片数1300点以上を数える。軒丸瓦(4)・平瓦(5)・埠(6)を図化した。他に北側溝掘削の際に出土した車輪石(12)も盛土中に含まれていたものであろう。4は軒丸瓦Ia型式で、瓦下半部の破片である。5は平瓦Via類である。凹面にナデを加える。文字瓦で、凹面の縁部に文字がヘラ書きされている。文字は不明である。6は厚さ6.3cmを測る埠の角部の破片である。淡褐色を呈し、胎土帯で2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好である。平面にわずかに布目が認められるが、全体にナデ調整である。12は細片で全体の形状・法量等は明確ではないが、形状はおそらく外形卵形になると思われる。法量は環体幅2.7cm・環体高1.0cmを測る。斜面彫刻は無刻の凹帶で、環体断面は平底に近い。材質は緑色凝灰岩である。4世紀後葉～5世紀初頭に比定される。

#### 島畠102

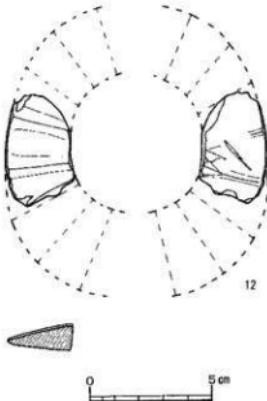
7-5 F・G区に位置し、島畠101・103を繋ぐ状況で、規模は南北2.7m以上、東西約5.7mを測る。盛土は2.5Y6/2灰黄色粗粒砂～細礫混シルト(斑鉄、マンガン斑)である。盛土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。

#### 島畠103

7-5・6 G・H区、水田101・102間の島畠で、規模は南北6.5m以上、東西約8.3mを測る。盛土は5Y6/1灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト(鉄分、ブロック状)である。盛土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。上面で土坑2基(SK101・102)、南北方向の溝3条を検出した。これらの埋土は5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂混シルト(斑鉄、グライト化)である。

#### 島畠104

7-5～7 H・I区、水田102・103間の島畠で、後述する第3面基壇部分を第4層により整地した部分にあたる。規模は南北6.7m以上、東西約12.2mを測る。作土は5Y6/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト(鉄分、マンガン斑)である。上面で土坑2基(SK103・104)、南北方向の溝12条を検出した。土坑埋土はSK103-5Y6/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト(ややグライト化)、SK104-2.5Y6/1黄灰色極粗粒砂混極細粒砂(ブロック状、マンガン斑)である。溝埋土は西部溝が土坑埋土と同層、東部溝は2.5Y7/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト(鉄分多)である。島畠作土



第7図 島畠101出土遺物

からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。

#### 島畠105

7-6・7J、8-6・7A区に位置する水田103・104間の島畠で、規模は南北6.1m以上、東西約6.5mを測る。盛土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト(鉄分多)である。上面で南北方向の溝10条を検出した。埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細礫少混粘土質シルトである。島畠盛土からは土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。

#### 島畠106

8-7・8B・C区の水田104・105間の島畠で、規模は南北7.5m以上、東西約15.0mを測る。盛土は5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。作土下面で南北方向の溝12条を検出した。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト(鉄分、ブロック状)である。島畠盛土からは土師器、須恵器が出土している。土師器皿(7)を圓化した。平城皿Aに当たり、底部外面凹凸が著しい。内面の暗文の有無は不明である。口径23.0cm・器高3.0cmを測る。

#### 島畠107

水田106西側の島畠で、8-10J、9-10A、14-1A～Cに位置する。規模は南北2.9m以上、東西28.8m以上を測る。盛土は10YR5/2灰黄褐色中粒砂～細礫混シルト(固く縮まる)である。上面で井戸1基(S E 101)、南北方向の溝4条を検出した。溝埋土は10YR6/3にぶい黄橙色粗粒砂～中礫混シルト(斑鉄)である。島畠盛土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、輸入陶磁器、国産陶磁器が出土している。龍泉窯系青磁碗(8・9)を圓化した。8は内面に片切彫りによる蓮華文を描く。9は外側の蓮弁文がわずかに確認でき、焼成不良で釉の発色は黄味を帯びる。高台内露胎である。8は12世紀中葉以降、9は13世紀以降に出現するとされる。

#### 島畠108

14-3・4G～J、15-4A区に位置する水田106東側の島畠で、規模は南北3.2m以上、東西40.0m以上を測る。盛土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト(斑鉄多)である。盛土からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。須恵器杯蓋・杯身(10・11)を圓化した。10は天井部に直線のヘラ記号を有する。いずれも焼成がやや不良である。6世紀末に比定される。

#### 島畠109

4区の14-3・4E区水田107東側の島畠で、規模は南北5.8m以上、東西1.1m以上を測る。盛土は10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混シルト(固く縮まる、マンガン斑)で、上部は土壤化が著しい。上面で南北方向の溝4条、東西方向の溝1条を検出した。埋土は7.5Y5/1灰色細礫混極細粒砂質シルト(グライ化、マンガン斑)である。

#### S E 101

14-1A・B区で検出した井戸で、北部は調査区外に至る。掘方は円形を呈すると思われ、検出部分からみて直径3.5m程度に復元できる。井戸枠は検出面から約0.9mで検出された。上部は1段のみ残存する井戸瓦枠である。下部は桶枠を使用しているが、底までは確認していないため段数は不明である。井戸瓦は高さ29.5cm・幅25.8cm・厚さ2.8～3.4cmを測



写真4 S E 101 (南から)

る。掘方埋土は10YR7/2にぶい黄橙色～10YR6/2灰黄褐色の粗粒砂～中疊多混シルト、枠内埋土は埋め戻しの際の細粒砂～中疊混シルト（ブロック状）が堆積する。埋土からは土師器、瓦器、瓦、国産陶磁器が出土している。

#### S K101～104・106

島畑103・104上面、水田107内で検出した土坑である。平面はおおむね方形・長方形を呈し、周囲で検出される耕作に伴う溝と同様に、島畑・水田の方向性に沿ったもので、同じ性格の遺構であろう。詳細は表2にまとめた。

表2 第1面土坑（S K101～104・106）法量表

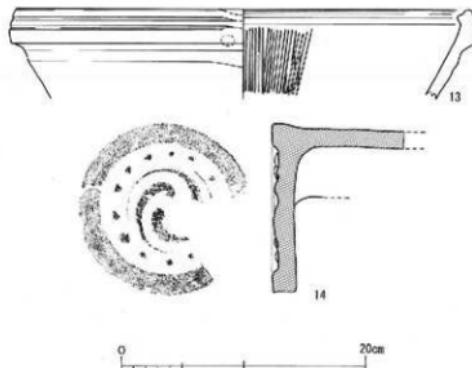
遺構名	地区	長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (cm)	出 土 遺 物
S K101	7-5G	1.7	0.9	9	
S K102	*	2.5	1.2	6	
S K103	7-5・6H・I	3.6	2.1	29	土師器・須恵器・瓦器・丸瓦・平瓦・国産陶磁器・輸入青磁
S K104	7-6I	2.8	1.6	10	
S K106	14-3E	2.1	1.4	17	土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器

#### S K105

14-1・2C・D区で検出した。直径約1.9m、深さ約60cmを測る円形の掘方内に、直径約1.0mの桶を据え付けたもので、肥溜めと思われる。掘方は断面逆台形を呈し、埋土はおおむね上部が10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混シルト（斑鉄多）、下部が2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト（斑鉄多、マンガン斑多）である。桶内埋土からは土師器、瓦、国産陶磁器、掘方埋土から土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器が出土している。13は備前系播鉢で、胎土には砂粒を多く含む。播目単位は11本/2.8cmである。17～18世紀に比定される。14は三つ巴文軒丸瓦である。瓦当面に離れ砂が付着している。巴の尾は短く、珠文（おそらく14個）の間隔は広い。外縁は幅広で低い。これらの特徴からみて16世紀以降のものである。

#### S O101

3区東部の14-3・4H～J区で検出した。検出長41.2m、幅1.5m以上、深さは最大約0.5mを測る。埋土は上部が5B6/1青灰色粘土～細粒砂（グライ化、ブロック状）、下部が10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土（斑鉄多、マンガン斑多）である。南に落ち込む溜池のような性格が考えられ、操車場造成の際にはゴミ捨て場となったようで、ブロック・レンガ等が廃棄されている。



第8図 S K105出土遺物

## 〈第2面〉

1～3区で検出した。概ね第1面の島畑盛土・水田作土を除去した段階で捉えた遺構面で、約T.P.+8.5～8.6mの、主に第3～8層をベースとする。中世～近世の耕作面にあたる。1区西部では上坑やピットが検出されたが、これらは第3面の2区～3区間で検出した平安～鎌倉時代の遺構群に対応する可能性が高い。水田6筆(水田201～206)の他、井戸3基(S E 201～203)、土坑4基(S K 201～204)、溝群5箇所(溝群201～205)、ピット10個(S P 201～210)を検出した。水田内では耕作に伴う平行する溝が検出されるが、第1面と同様、遺構名は冠していない。また水田範囲外においても平行する溝がみられ、これらについても耕作に伴う溝群として捉え、個々の溝には遺構名は冠していない。溝は計94条を数える。1区と2区で耕作溝の方向がやや異なり、また2区東部～3区は東西方向の耕作溝が主体となる。2区では第1面の調査を実施しておらず、2区第2面検出遺構には本来第1面と捉えられる遺構が含まれている。

### 水田201

1区南西隅の7～5E区で一部分を検出したにすぎず、詳細は不明である。第3次調査の水田に統く。作土は2.5Y7/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト(ブロック状、斑駁多)である。

### 水田202

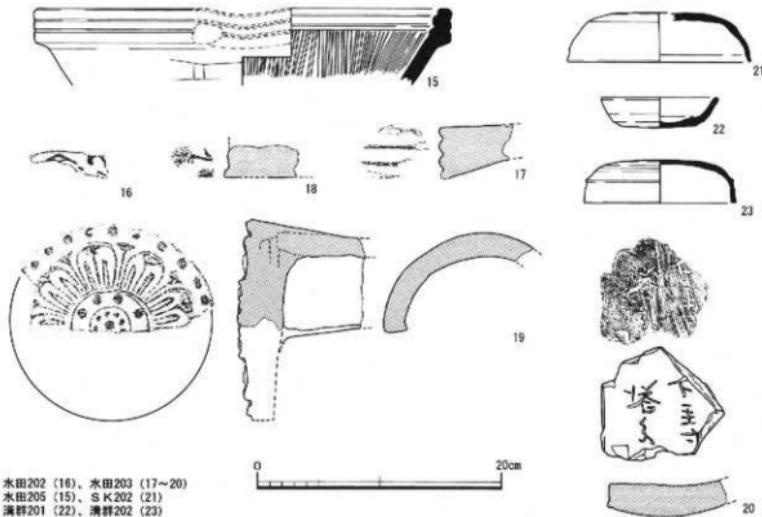
7～5・6H区で検出した。規模は南北6.5m以上、東西約8.6mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は10YR6/1褐灰色細粒砂～中疊混粘土質シルト(鉄分、マンガン斑、ブロック状)である。作土下面では南北方向の溝7条を検出した。規模は幅33～142cm、深さ3～19cmを測り、埋土は作土と同様である。作土・溝からは土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。16は軒平瓦I型式である。瓦当の中心部分上部の破片である。色調は灰色を呈する。

### 水田203

7～6・7J、8～6・7A区で検出した。規模は南北6.8m以上、東西約17.9mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は2.5Y4/1黄灰色細粒混細粒砂～中粒砂質シルト(やや粘性、鉄分)である。作土下面で南北方向の溝4条を検出した。規模は幅36～195cm、深さ9～21cmを測り、埋土は5Y4/1灰色細粒混粘土質シルト(グライ化)である。作土・溝からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶器、国産陶器、砥石、石材(芝山石2点)の他、破片数800点近い大量の瓦類が出土した。瓦4点(17～20)を図化した。17は重弧文軒平瓦で、軒平瓦II型式に分類した。渋川廢寺では当資料1点のみが確認されている。18は軒平瓦IV型式の瓦当左端部の小片である。19は軒丸瓦III型式で、瓦当上半部が遺存する。水田内東端の溝から出土した。他に瓦当が欠損した軒平瓦I型式が出土している。20は平瓦I類で、凸面暗灰色、凹面灰白色を呈する。胎土密で焼成良好。凸面はナデ。凹面はタテナデ、側端部ケズリを加え、布目はかすかに残る程度である。側端面はケズリ。凹面にヘラ描きにより文字を書いた文字瓦である。文面は右が「ド主寸」、左が「塔分」である。

### 水田204

8～8・9D～F区で検出した。規模は南北6.8m以上、東西約14.6mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は5Y6/1灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)である。作土下面では南北方向の溝17条を検出した。規模は幅23～86cm、深さ3～12cmを測り、埋土は水田作土と同様である。作土からは土師器、須恵器、瓦、国産陶磁器が出土している。



第9図 第2面遺構出土遺物

#### 水田205

8-9F-H、10H区で検出した。規模は南北4.9m以上、東西約10.9mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂混シルト（ブロック状、鉄分、マンガン斑）である。作土下面で井戸1基（S E 201）、南北方向の溝11条を検出した。溝の規模は幅27～100cm、深さ5～14cmを測り、埋土は5Y5/1灰色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト（管鉄）である。作土からは土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、輸入陶磁器、国産陶磁器、土人形、サヌカイト片が出土している。15は備前系擂鉢で、擂目単位は9本/2.8cmである。18世紀代に比定される。

#### 水田206

8-10I-J区で検出した。規模は南北2.7m以上、東西約12.3mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～細礫混シルトである。作土からは土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器が出土している。

#### S E 201

水田205内の西辺に接する位置で北半部を検出した。検出面から0.8mまでの掘削しかしておらず底には達していない。また井戸枠は検出していないが、掘方や埋土の状況から井戸とした。掘方は直径約2.8mを測る円形を呈すると考えられる。埋土は上層が2.5Y5/2暗灰黄色シルト混粗粒砂～細礫、下部が2.5Y4/1黄灰色粗粒砂～細礫混粘土（グライ化）である。埋土からは古墳時代前期・中期、平安時代の土師器が少量出土している。

#### S E 202

2区東端で南部を検出した。北壁際で壁崩壊の恐れがあり十分な調査はしていない。掘方の規模等は不明で、枠は上部に井戸瓦枠2段以上、下部に桶枠を使用している。埋土からは土師器片

が出土している。井戸瓦(24)は高さ27.0cm・幅26.2cm・厚さ2.9cmを測る。淡灰褐色を呈し焼成やや不良である。

#### S K 203

3区東部で南側の一部を検出した井戸で。掘方は円形を呈するものと考えられ、枠は上部に井戸瓦枠、下部に桶枠を使用している。埋土からは土師器、国産陶磁器が出土している。

#### S K 201

1区北西角、7-4E区で一部を検出した。規模は南北0.55m以上、東西1.56m以上、深さ約8cmを測り、北・西は調査区外に続いている。埋土は10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混シルト質粘土(鉄分)である。

#### S K 202

7-4E・F区で検出した土坑で、北は調査区外に続き、東は試掘坑に削平されている。規模は南北1.93m以上、東西1.3m以上、深さ約20cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト(斑鐵、マンガン斑)である。須恵器、瓦器椀、丸瓦、平瓦が出土している。須恵器杯蓋(21)を岡化した。形態から6世紀中葉に比定される。

#### S K 203

7-5G区で検出した。規模は南北0.96m、東西1.25m、深さ約13cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト(斑鐵)である。土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土している。

#### S K 204

14-1B区で検出した平面円形の土坑である。規模は南北0.6m、東西0.55m、深さ約19cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂混シルト(ブロック状)である。

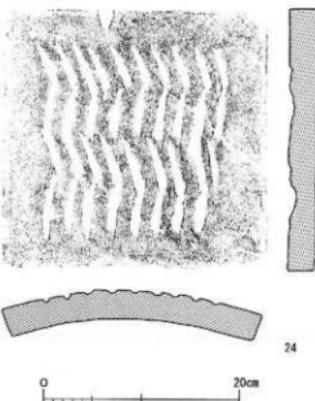
#### 溝群201

7-4F、5E・F区で検出した。東西方向に平行する溝5条、南北方向に平行する溝3条からなる。幅25～76cm、深さ5～10cmを測り、埋土は前者が2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト(鉄分)、後者が10YR6/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト(鉄分)である。埋土から土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、瓦器、中国製青磁が出土している。22は須恵器杯身で、口径9.7cm・器高2.6cmを測る。底部ヘラ切り未調整で、飛鳥時代のものである。

#### 溝群202

8-8D区で検出した北東～南西方向の溝5条からなる。西の4条は埋土の状況からみて本来は1条の溝であったと考えられる。規模は幅35～55cm・深さ4～17cmを測り、埋土は5Y6/1灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)である。遺物は出土していない。

東の1条は他の溝に比して規模が大きく、耕作溝ではなく区画溝・水路等の性格が考えられる。幅約2.3m・深さ26cmを測り、埋土は10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト(鉄分、



第10図 S E 202出土遺物

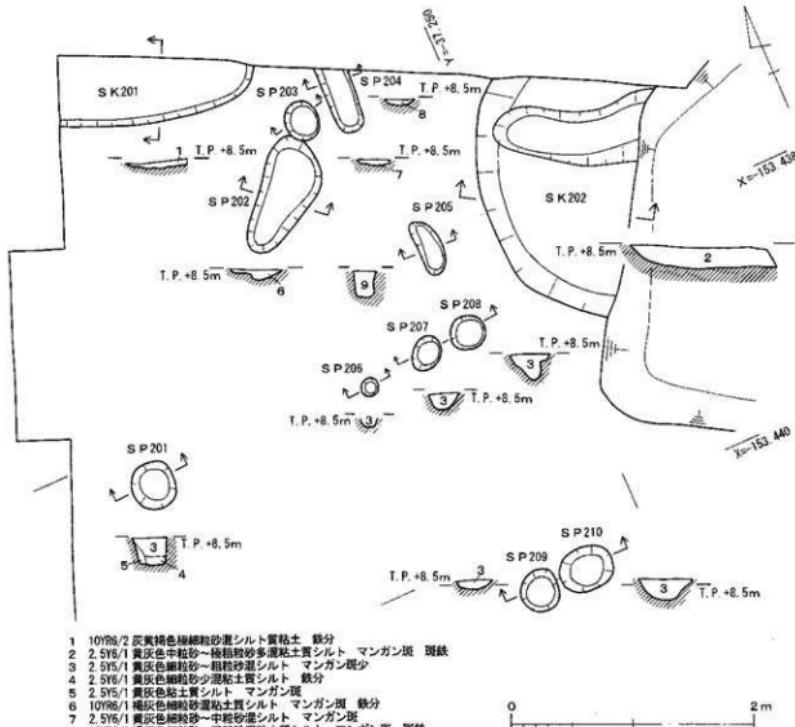
マンガン斑多)である。土師器、須恵器、瓦器、丸瓦、平瓦が出土している。23は須恵器杯蓋で、口径12.6cm・器高3.5cmを測る。5世紀中葉のものである。なおこの西側では、下位の第3面においても、集落の区画溝である可能性がある大規模な溝(SD307)が検出されており、当溝も同様の性格が考えられる。当溝を境に西・東で溝の方向が異なることも示唆的である。

#### 溝群203

8-9F・G区、水田204・205間で検出した北東-南西方向の溝8条からなる。規模は幅18~115cm・深さ2~10cmを測り、埋土は2.5Y6/1黄灰色中粒砂~粗粒砂混シルト(鉄分)である。遺物は出土していない。

#### 溝群204

2区東部~3区西部の8-10I・J、9-10A、14-1・2A~C区で検出した溝群である。北西-南東方向の溝18条と、これに直交する溝7条がある。規模は幅10~46cm・深さ1~19cmを測り、埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒混粘土質シルト(斑鉄多)である。埋土からは5世紀代以降の土



第11図 第2面1区北西部遺構平面・断面図

師器、須恵器や、瓦器、丸瓦、平瓦、中国製青磁、青化、近世陶磁器が出土している。

#### 溝群205

3区東部の14-3・4 G-J、15-4 A区で検出した北西-南東方向の溝9条からなる。検出面は北から南に下がって行く状況である。規模は幅21~45cm・深さ4~13cmを測り、埋土はおおまかに5Y6/1灰色~2.5Y6/1黄灰色の細粒砂ブロック混シルト-シルト質粘土(斑鉄)である。埋土からは5世紀代以降の土師器、須恵器や、瓦器、平瓦、近世磁器が出土している。

#### S P 201~210

1区西部に集中する。方位に沿った配置が認められ、建物の柱穴の可能性がある。S P 203・204、S P 207・208、S P 209・210が、それぞれ東西に隣接し、これらは約2.2m間隔で南北方向に並ぶ。S P 201・202・205の掘削に当たっては、下部のSW301の瓦片に至って止まっている。出土遺物は細片のみで、時期等が明確にできるものは無い。法量等の詳細は表3にまとめた。

表3 第2面ピット(S P 201~210) 法量表

遺構名	地区	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	断面形状	出土遺物
S P 201	7-4 E	40	35	24	逆台形	須恵器・平瓦・丸瓦
S P 202	〃	99	47	8	皿形	土師器・須恵器・平瓦・丸瓦・瓦器輪
S P 203	〃	32	31	5	逆台形	
S P 204	〃	99	47	5	楕形	土師器・須恵器・平瓦
S P 205	〃	32	28	26	逆台形	土師器・平瓦
S P 206	〃	57	15	8	楕形	
S P 207	〃	47	20	14	逆台形	土師器
S P 208	〃	15	14	21	〃	土師器・須恵器
S P 209	7-5 E	28	25	9	楕形	
S P 210	〃	28	30	17	逆台形	土師器・平瓦・丸瓦

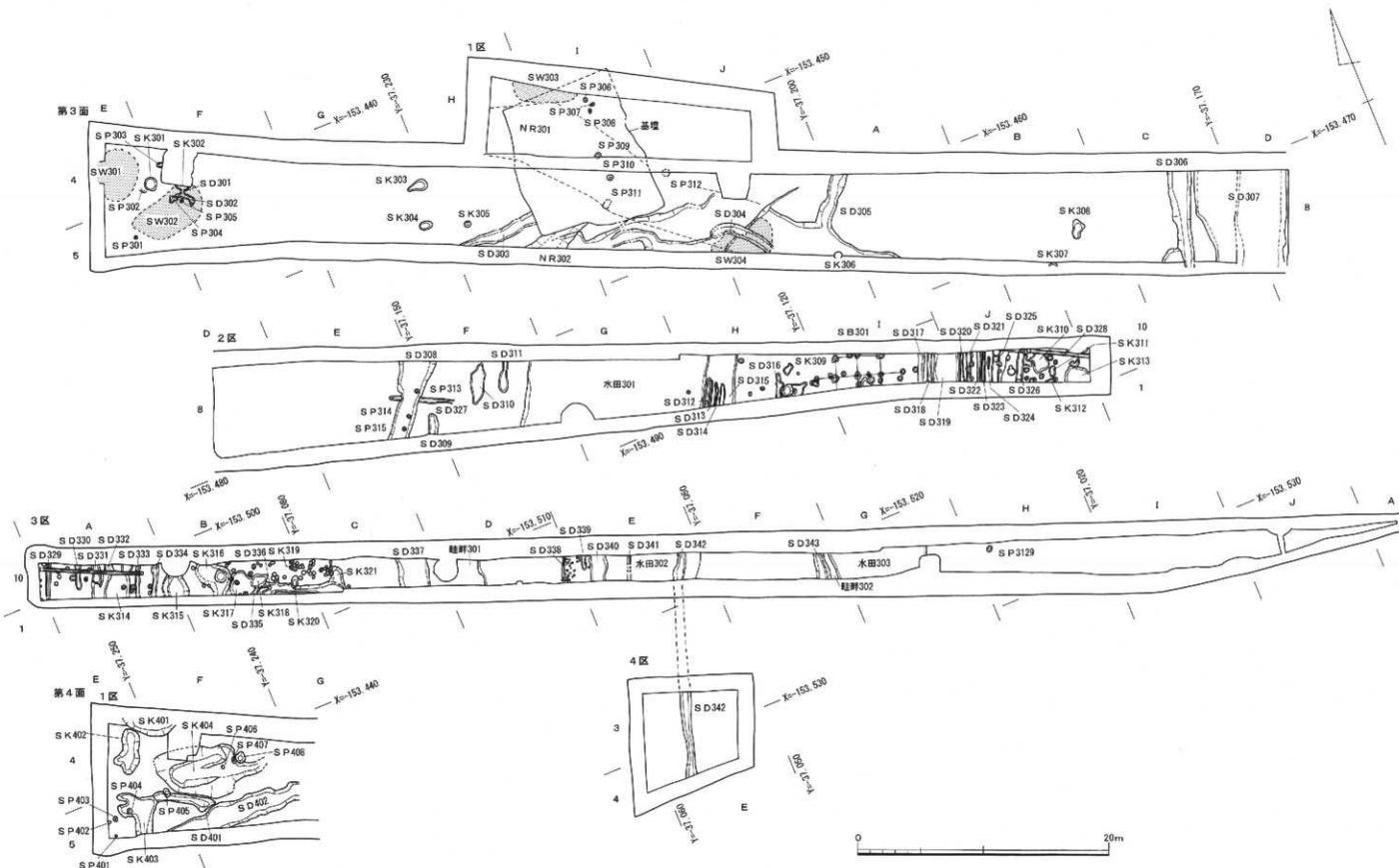
#### 〈第3面〉

2区東部~3区西部ではT.P.+8.5~8.7mで、土壤化した細粒砂~中粒砂混シルト質粘土(10C層)をベースとして平安時代後期~鎌倉時代の居住域(S B 301、S K 309~321、S P 317~3128)が広がる。掘立柱建物は1棟のみの確認であるが、ピットの数からみて未確認の建物が多く存在するものと思われる。この居住域の西側・東側は生産域となっており、東側はS D 337・畦畔301を境としている。また1区西部でも約T.P.+8.3mの細粒砂混じり粘土質シルト(9層)をベースに飛鳥~平安時代の土坑・溝・ピットが検出された。水田3筆(水田301~303)、畦畔2条(畦畔301・302)、掘立柱建物1棟(S B 301)、土坑21基(S K 301~321)、溝43条(S D 301~343)、ピット129個(S P 301~3129)、瓦焼窯4箇所(S W301~304)を検出した。これらの遺構の時期は飛鳥時代~鎌倉時代に比定される。また1区中央では飛鳥時代頃の流路(N R 301・302)が部分的にではあるが検出された。この流路を埋め立てた奈良時代の整地層(整地1)が確認され、その上位では基壇状の盛土が認められた(基壇)。この基壇部分の整地については、整地1を切り込む平面方形のプランが確認でき、これを整地2とした。

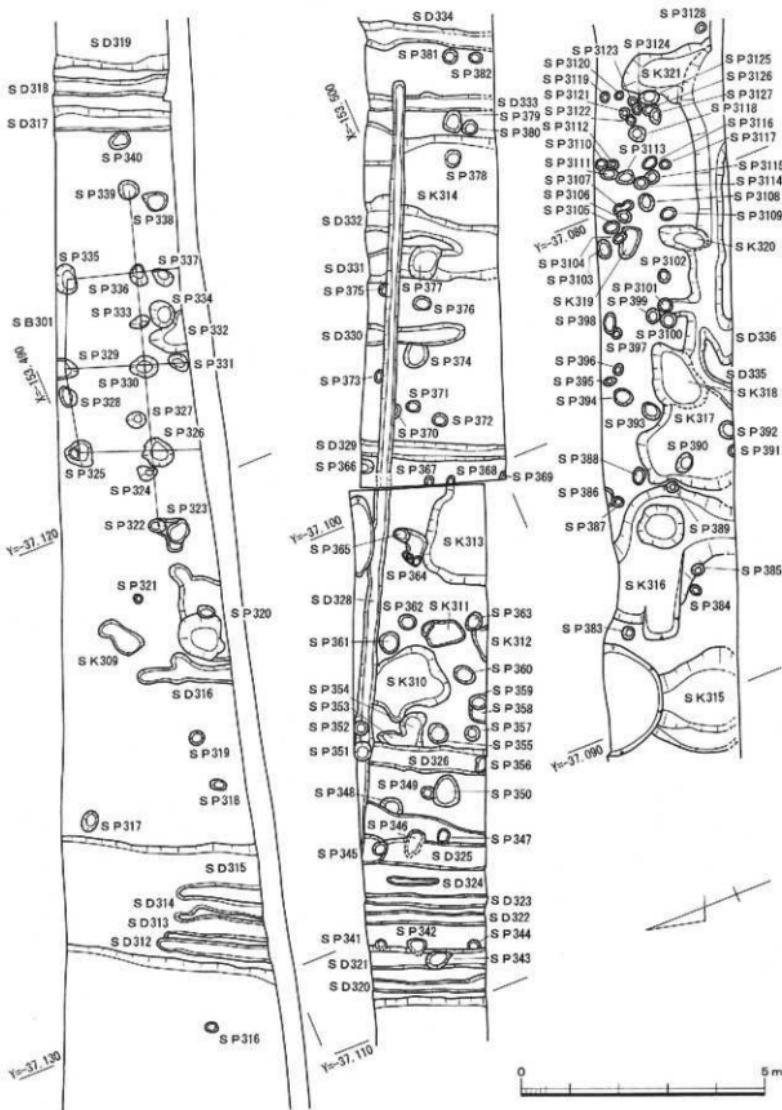
溝・ピットの法量等は、一部を除き表4・5にまとめた。

#### 水田301

2区中央、8-9 F-H区に位置し、規模は南北5.2m以上、東西約14.2mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は上層が2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂混粘土質シルト(斑鉄・マンガン斑)、下層が2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂~細粒混粘土(マンガン斑、鉄分)である。作土下面でピット1



第12図 第3・4面平面図



第13図 第3面2～3区間平面図

個（S P 316）を検出したが、東の居住域に伴う遺構であろう。埋土は上から2.5Y5/1黄灰色細礫少混細粒砂質シルト（炭・焼土含む）、2.5Y5/1黄灰色極粗粒砂～細礫混極細粒砂質シルト、2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細粒砂である。平安時代頃までの土師器、須恵器、綠釉陶器、平瓦の他、弥生土器が出土している。25・26を図化した。須恵器蓋（25）は杯蓋の可能性もあるが、扁平な形態からみて壺の蓋か、もしくは皿とも考えられる。時期は飛鳥時代以降であろう。26は綠釉陶器碗で、蛇の目高台 第14図 水田301出土遺物を有し、釉は明黄緑色で総釉である。9世紀後半頃に比定される。

#### 水田302

3区中央、14-2・3D～F区に位置し、規模は南北2.2m以上、東西約35.5mを測り、北・南は調査区外に続いている。西端は畦畔301、東端は畦畔302によって区画されている。作土は7.5Y5/1灰色極細粒砂泥粘土質シルト（上部マンガン斑多、下部斑鉄）である。作土下面で溝6条（S D 338～343）を検出した。

#### 水田303

3区中央、14-3 F・G区に位置し、畦畔302の東側に当たる。規模は南北2.2m以上、東西約7.7mを測り、北・南は調査区外に続いている。作土は10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂泥粘土（マンガン斑、斑鉄）である。

#### 畦畔301

14-1・2 C・D区に位置し、水田302の西を区画する。第10C層の上に約20cmの盛土により構築され、規模は最大幅約4.0m、長さ2.2m以上を測り、北・南は調査区外に続いている。盛土は10YR6/1褐灰色極粗粒砂少混粘土質シルト（マンガン斑、斑鉄含む）である。

#### 畦畔302

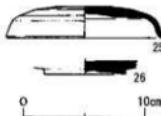
14-3 F区に位置し、水田302と水田303を区画する。第10C層の上に約20cmの盛土により構築され、規模は最大幅約1.0m、長さ2.2m以上を測り、北・南は調査区外に続いている。盛土は10YR6/1褐灰色粗粒砂泥シルト質粘土（マンガン斑、斑鉄含む）である。

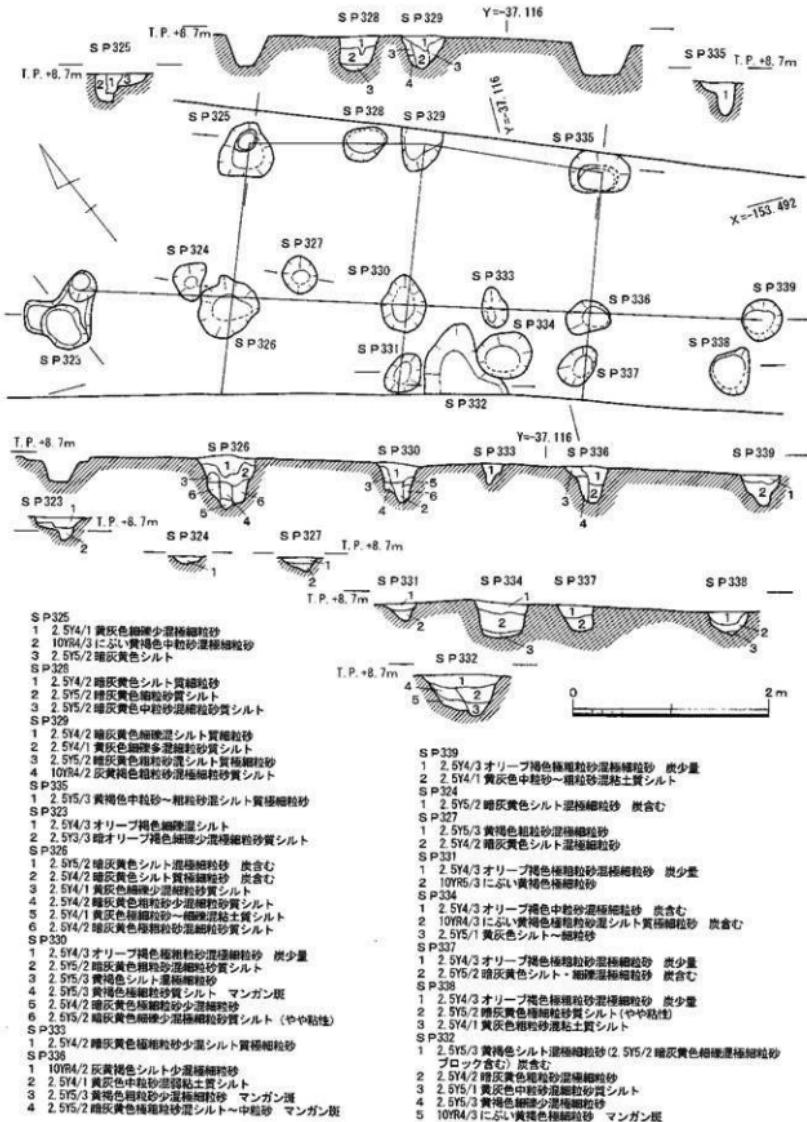
#### S B 301

2区東部、8-9 I、10H・I区で検出した縦柱の掘立柱建物で、S P 325・326・329・330・335・336で構成される。規模は東西2間、南北はおそらく2間と思われるが明確でない。中央の東・西に位置するS P 323・339は棟持柱となる可能性がある。建物の方向はN-19°-Eである。柱間距離は桁行約1.8m、梁間約1.7m、棟持柱との間隔は約1.7mを測る。各ピットは平面不定形で検出したものが多いが、本来は基本的に円形であろう。規模は直径43～63cm、深さは最大で55cmを測る。S P 325・326・330・336は断面に柱痕が確認できる。ピットからの出土遺物については後述する。

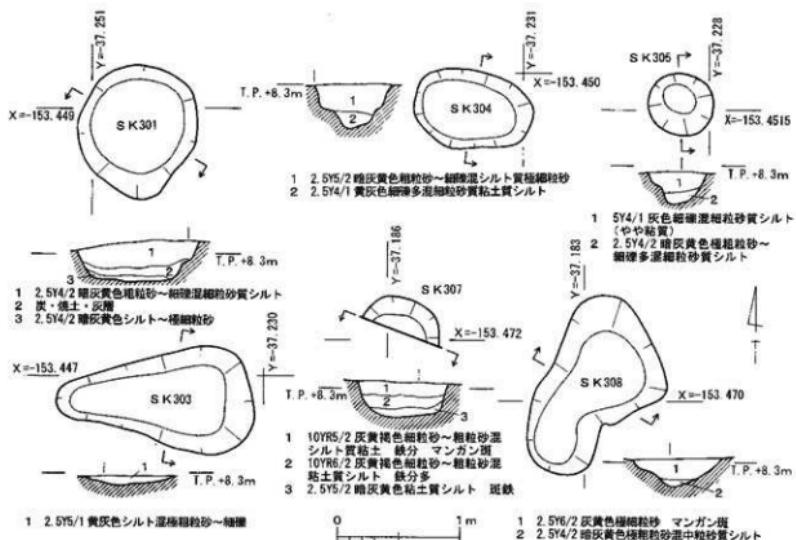
#### S K 301

1区西部、7-4 E区で検出した。平面ほぼ円形を呈する土坑で、直径約1.0mを測る。断面逆台形を呈し、深さ約34cmを測る。3層から成る埋土には炭を多く含み、特に中層は炭・焼土・灰層となっている。土師器、須恵器、黑色土器碗、丸瓦、半瓦が出土しているが、時期は明確にしえない。





第15図 S B 301平面・断面図



第16図 第3面土坑平面・断面図

### S K 302

1区西部、7-5F区で検出した。北側が試掘坑に削平されており詳細は不明であるが、検出部分の平面形は弧状を呈する。南側はS D 301とつながり埋土も同じである。遺物は出土していない。

### S K 303

1区西部、7-5G区で検出した。東西に長い平面不定形な土坑で、長辺約1.6m・短辺約0.9mを測る。断面U字形を呈し、深さ約7cmを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト混極粗粒砂～細緻である。土師器細片が少量出土しているが、時期は明確にしえない。

### S K 304

7-5G区、S K 303の南約2.4mで検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長辺約97cm・短辺約65cmを測る。断面逆凸形に近く、深さ約36cmを測る。埋土は2層から成る。奈良時代の須恵器杯蓋の他、土師器、須恵器、平瓦片が出土している。

### S K 305

7-5H区、S K 304の東約2.5mで検出した。平面形は長辺約54cm・短辺約50cmのほぼ円形を呈し、断面逆台形に近く、深さ約26cmを測る。埋土は2層から成る。奈良時代の土師器杯身の他、土師器、須恵器、丸瓦、平瓦片が出土している。

### S K 306

1区中央南壁際、7-7J区で検出した。直径約60cmの楕円形の掘方内に、底部を欠いた土師器羽釜(27)を据え付けた土坑である。掘方は断面逆台形を呈し、埋土は2層から成る。羽釜を安

定させるために鉢下には平瓦片(29~31)や礫を敷いている。羽釜内部埋土は2層から成り、上層はグライ化した5Y4/1灰色粗粒砂混細粒砂質粘土質シルトで、下層には径3cm程度の礫を充填している。埋没流路上に位置し、底が湧水層に達していることや、羽釜内部の礫層からみて、井戸の一種と考えられる。羽釜(27)は口縁部の1/2、鉢の一部が欠損している。体部外面が煤け、内面の下位が帶状に焦げる。口径24.8cm・鉢径32.5cmを測り、形態から見て奈良時代に収まるものであろう。敷かれていた瓦は3点(29~31)図化した。いずれも平瓦VIa類で、色調は灰色系である。凹面の広端部・狭端部・側縁部を削る。31は凸面の広端部・側縁部の一部を削る。30・31は凹面に糸切り痕が残る。羽釜内部上層からは平瓦(28)・(32)が出土している。28は4片に割れていたもので、長辺36.7cmを測る。VIb類で全面にナデを加えるが、ナデは雑で繩目タタキは全体的に残っている。凹面の広端部・狭端部・側縁部を削る。32は黒灰色を呈し、平面は繩目タタキ後ナデ、側面はケズリである。粘土接合面で剥がれています。

#### S K 307

1区東部南壁際、8~8B区で検出した。検出部分の平面形は直径約65cmの半円形を呈する。断面逆台形に近く、深さ約30cmを測る。埋土は3層から成る。遺物は出土していない。

#### S K 308

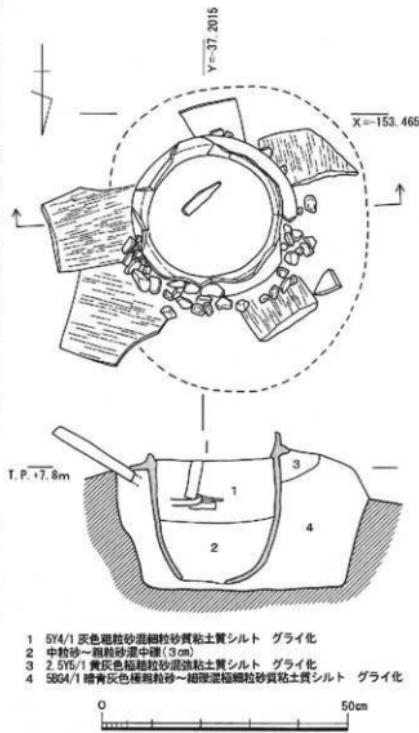
8~7~8B区、S K 307の北東約2.4mで検出した。平面形は南北に長い不定形を呈し、長辺約1.5m・短辺約0.9mを測る。断面逆台形に近く、深さ約23cmを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

#### S K 309

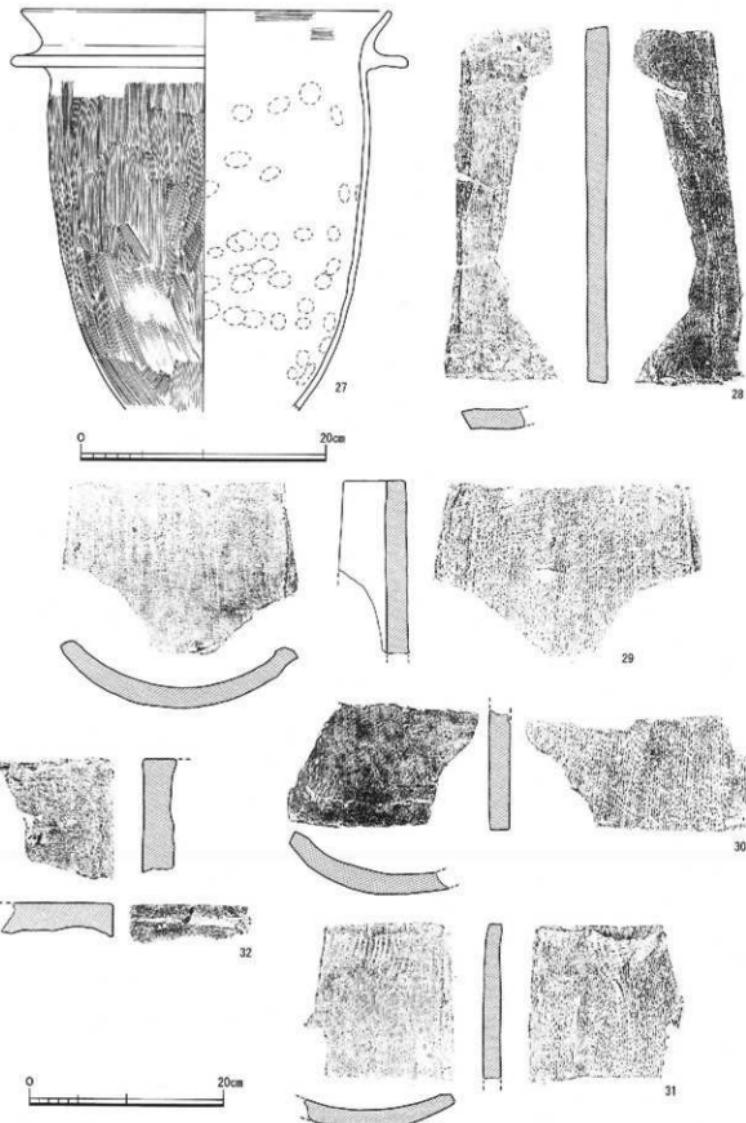
2区中央、8~9H区で検出した。平面形は隅丸平行四辺形を呈し、長辺約90cm・短辺約50cmを測る。断面逆台形に近く、深さ約13cmを測る。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細礫少混細粒砂質シルトの単層である。遺物は土師器皿、黒色土器A椀の他、土師器片が出土している。

#### S K 310

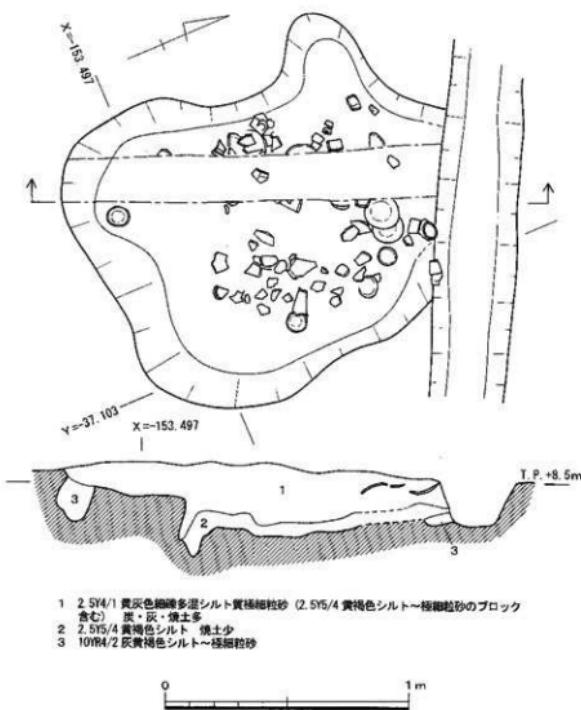
2区東部、8~10J区で検出した土坑である。平面形は隅丸方形に近い不定形を成し、方位に沿っているとも考えられる。規模は南北約1.6m・東西約1.3mを測る。断面皿状を呈し、3層か



第17図 S K 306平面・断面図

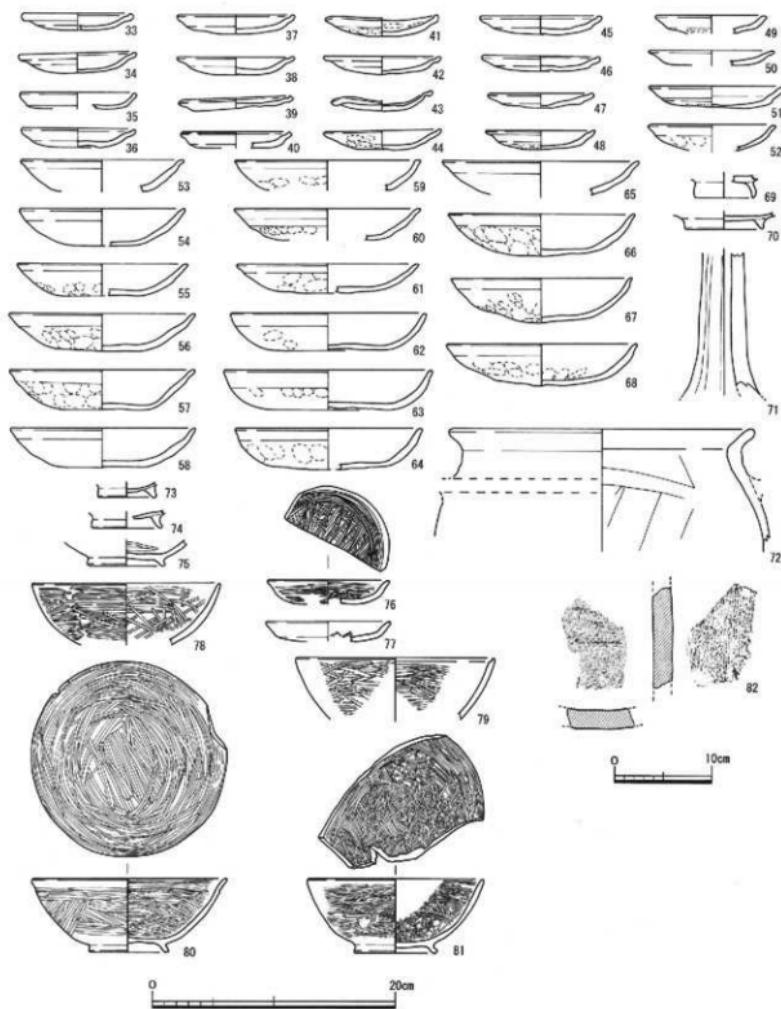


第18図 SK 306出土遺物



第19図 SK 310平面・断面図

ら成る埋土中には炭・灰・焼土が多量に含まれている。また底部には直径10cm程度のピット状の窪みが見られた。遺物は平安時代末頃の土器が多く出土しており、北部では完形の土師器大皿が重なった状況で検出された。33~82を図化した。土師器皿は口径10cm程度の小皿(33~52)と15~16cmの大皿(59~68)がある。小皿の分類は、「て」の字状口縁、及び口縁端部の巻き込みが小さくつまみ上げる程度で「て」の字状口縁が退化したと考えられる口縁のものを小皿A(33~48)、その他の口縁のものを小皿B(49~52)とした。小皿Aが多くを占める。小皿Aはやや赤味を帯びた淡灰色を呈するものが多く(33~35・37~41・43~48)、36・42は褐色系。34・41・43~46が完形で、口径9.5cm・9.4cm・8.7cm・9.4cm・9.9cm・9.7cmを測る。43は歪みが大きく、44の底部は指頭圧痕の凹凸が著しい。小皿Bでは51が褐色系、他は淡黄灰色系である。土師器大皿と杯との区別は、口径の1/2程度の平らな底部から長く伸びる口縁部を有するものを杯とした。また高台の無いものを杯A、有するものを杯Bとした。土師器大皿(59~68)は、底部が平らな大皿A(59~64)と、丸味を持つ大皿B(65~68)がある。口縁部のヨコナデは60が二段に施される以外は一段である。口縁端部は59が水平な面を成す以外は丸く收める。65が褐色系、他は淡灰黄色系。66~



第20図 S K 310出土遺物

68は完形、又はほぼ完形で、口径15.4cm・14.9cm・15.4cm、器高3.2cm・3.5cm・3.0cmを測る。68の底部外面には1.0~1.5cm間隔の平行線状の圧痕が認められるが、成形時に台に置いた際の痕跡であろうか。土師器杯(53~58)は口径13.4~15.4cmを測る。53は口縁端部が小さく外反する。55・56は褐色系、他は淡灰黄色系。土師器台付き皿(69)は褐色を呈し、高台径5.2cm・高台高1.2cmを測る。土師器碗(70)は内面灰褐色を呈するもので、黒色土器B類の可能性もある。高台内側の接合痕が明瞭に残る。71は土師器高杯脚柱部である。胎土は2mm以下の砂粒が多く含むもので、外面は14面に面取りされている。土師器羽釜(72)は口縁部が長めで、12世紀中葉に比定されるものである。黒色土器碗(73~75)は73がB類、74・75がA類である。75は2mm以下の砂粒が多く含む胎土である。瓦器皿(76・77)は、76が内外面共に密な圓線状暗文、見込みジグザグ状暗文、底部外面一方向の密な暗文を施す。77は見込みのジグザグ状暗文のみである。瓦器碗(78~81)はいずれも内外面共に密に暗文を施す。78は淡灰褐色を呈するもので和泉型とは趣が異なる。79は口縁端部内面に段を巡らせるもので大和型瓦器碗であろう。80・81は和泉型である。80はほぼ完形で、口径15.9cm・器高6.0cm・高台径6.6cm・高台高0.7cmを測る。外面は3分割暗文。81は高台が完存し、内面は圓線状暗文及び乱方向の暗文を施す。高台径6.9cmを測る。瓦器碗は11世紀末に比定される。82は平瓦Vla類で、凹面に横方向の糸切り痕が残る。土器の時期は11世紀末~12世紀中葉に比定される。

#### S K 311

2区東部、S K 310の南東に隣接する土坑である。平面形は南北に長い隅丸長方形に近く、長辺約80cm・短辺約55cmを測る。断面逆台形を呈し、深さ約7cmを測る。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂少混シルト（炭・焼土極少）である。遺物は出土していない。

#### S K 312

2区東部、S K 311の南に隣接する土坑である。南は調査区外に至り詳細は不明である。S P 363に切られる。検出部分の規模は東西約70cm・南北40cmを測る。断面逆台形を呈し、深さ約32cmを測る。埋土は10YR4/1褐色細粒砂混粘土質シルト（炭・焼土、マンガン斑）である。遺物は出土していない。

#### S K 313

2区南東角、8-10J区で検出した。南は調査区外に至り詳細は不明である。S P 364に切られる。検出部分の規模は東西約2.1m・南北約1.3mを測る。断面皿状を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y5/3黄褐色粗粒砂少混極細粒砂（ブロック状）である。遺物は土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗の他、土師器片、須恵器片が出土している。瓦器碗には和泉型・大和型が認められる。遺物の時期は12世紀前半に比定される。

#### S K 314

3区西部、9-10A、14-1A区で検出した土坑である。規模は東西約1.8m・南北2.7m以上・深さ約18cmを測り、北・南は調査区外に続く。断面皿状を呈し、底部は平坦面が広がる。2層から成る埋土中には焼土・炭を多く含む。中央部では底部を欠いた土師器羽釜(86)が伏せられた状況で出土しており、かまと等の性格が考えられよう。なお西側のS D 331・332とは切り合いが認められず、一連の構造である可能性が高い。遺物は土師器皿・羽釜・瓦器碗・皿が出土している。土師器羽釜(86)・瓦器碗(83~85)を図化した。86は上部が完存で、口径24.0cmを測る。

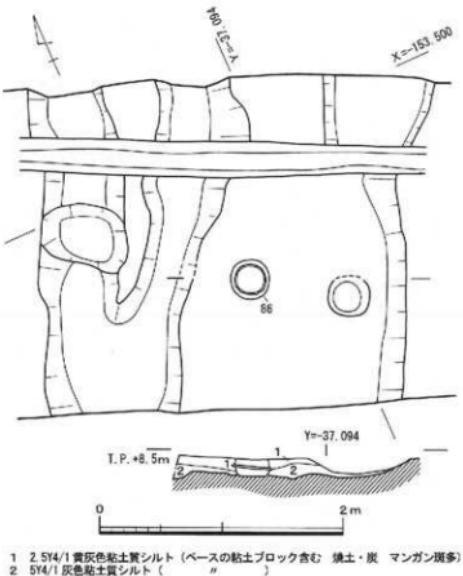
口縁部外面に工具痕が残る。外面全面、及び内面の鋸の位置以下が焼ける。83は内面にのみ粗に圓線状暗文を施す。84・85は低い高台を有するもので、見込みは平行暗文である。遺物の時期は12世紀末～13世紀前半に比定される。

#### S K 315

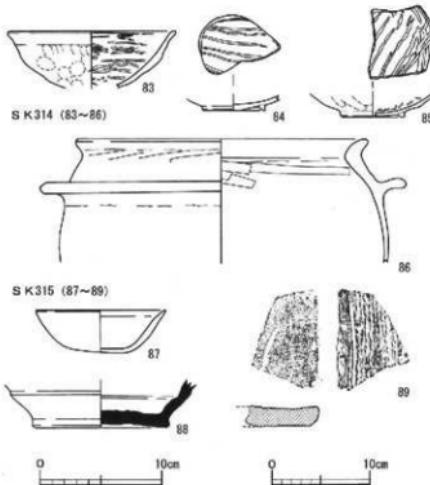
3区西部、14-1A・B区で検出した。北はS E 101に削平され、南は調査区外に至り詳細は不明であるが、南壁断面の状況から見てそれほど南には広がらない。検出部分の規模は東西約2.1m・南北約1.6mを測る。断面逆凸形を呈し、深さ約55cmを測る。埋土は6層から成り、全体にブロック状を呈する。断面の状況から見て井戸であった可能性が高い。2～4層が曲物等の井戸枠部分、5・6層が掘方埋土であろう。遺物は土師器皿・椀・羽釜・須恵器、瓦器椀・三足釜が出土しており、遺物の時期は12世紀前半～後半に比定される。87～89を図化した。土師器杯(87)は口径10.7cmを測り、胎土は1mmまでの砂粒を多く含む。88は須恵器甕底部で、砂粒を多く含む胎土である。89は平瓦Vib類である。凸面側縁部に、凹面から巻き込まれた布目痕が残っている。

#### S K 316

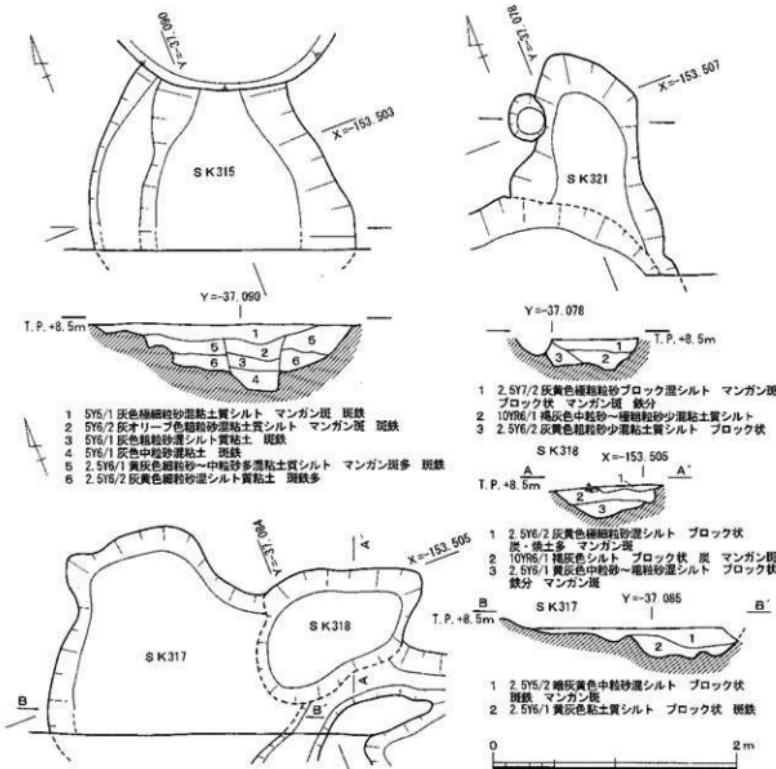
3区西部、14-1B区で検出した。北・南は調査区外に至り詳細は不明である。検出部分の規模は東西約2.8m・南北約2.5mを測る。断面逆凸形を呈し、深さ約15cmを測るが、底部の東側に直径約90cm・深さ約22cmの円形の落ち込みが見られる。埋土は2.5Y5/1黄灰色中粒砂混シルト(炭少、マンガン斑)、落ち込み部分が



第21図 S K 314・他平面・断面図



第22図 S K 314・315出土遺物

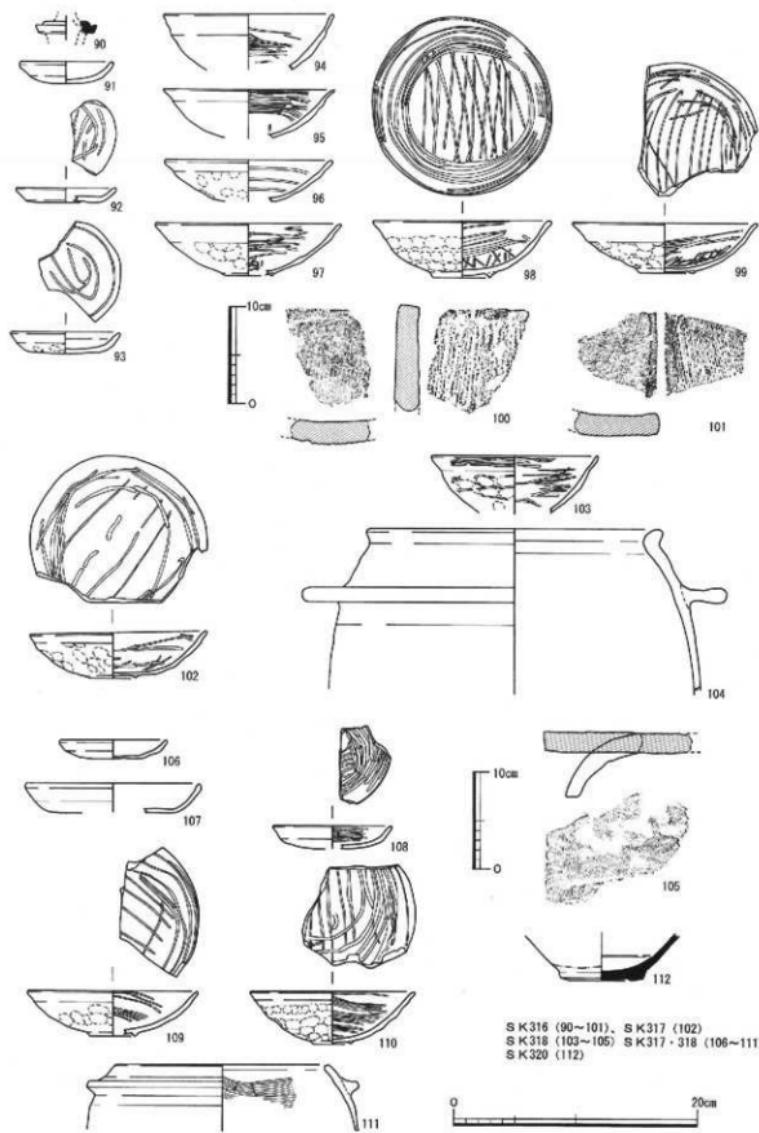


第23図 SK 315・317・318・321平面・断面図

2.5Y6/2 黄色細粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト（鉄分）である。遺物は土師器皿・甕・羽釜、須恵器、瓦器椀・皿、平瓦が出土している。90～101を図化した。90は須恵器淨瓶の頸部段部分である。主に奈良時代後半～平安時代前期に見られる仏事用の器種で、都城以外での出土は稀であろう。胎土はやや粗で焼成良好。外面全面に自然釉が掛かり、段部分の復元径5.0cmを測る。91は土師器小皿Bで、褐色を呈し、口径7.8cm・器高1.8cmを測る。92・93は瓦器皿である。内面の圓線状暗文は粗で、92の見込みは平行暗文であろう。92の外底面には掌文が認められる。94～99は和泉型瓦器椀である。暗文は内面のみで、体部圓線状、及び97は渦巻状、98は斜格子、99は平行暗文を見込みに施す。98は完形で、口径14.7cmを測る。100・101は平瓦Vib類である。100は凹面にナデを加える。101は凹・凸面側縁部を削る。遺物の時期は12世紀末～13世紀前半に比定されるが、90のみ古相を呈する。

#### S K 317

S K 316の東に隣接して検出した。南は調査区外に至る。検出部分の規模は東西約2.1m・南北



第24図 SK 316~318・320出土遺物

約2.0mを測る。断面逆台形を呈し、深さ約33cmを測る。埋土は上層が2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂混シルト（ブロック状、マンガン斑、斑鉄）、下層が2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト（ブロック状、斑鉄）である。東側のS K 318に切られていると考えられる。遺物は土師器羽釜、瓦器椀の他、土師器片が出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半に比定される。和泉型瓦器椀（102）を岡化した。高台は中心からずれ、紐状で全周しない。内面に粗な圓線状暗文、及び見込みに平行暗文を施すもので、13世紀前半に比定される。

#### S K 318

当初はS K 317との切り合が不明で、同一遺構として掘削したが、出土遺物の時期から見ると、S K 317を切っている。平面形は東西に長い楕円形で、規模は東西約1.6m・南北約1.0mを測る。断面逆台形を呈し、深さ約28cmを測る。埋土はブロック状を呈する3層から成り、上部には炭・焼土を多く含む。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器椀、中国製白磁碗、丸瓦が出上している。遺物の時期は12世紀後半～13世紀中葉に比定される。和泉型瓦器椀（103）、土師器羽釜（104）、丸瓦（105）を岡化した。103は12世紀末頃に比定される。104は体部外表面が煤け、内面全面は焦げる。13世紀中葉に比定される。105は丸瓦広端部の小片である。胎土密、焼成良好で褐色を呈する。106～111はS K 317・318の遺物が混ざっている。土師器皿B（106）・大皿A（107）、瓦器皿（108）・椀（109・110）・三足釜（111）である。106・107は褐色系である。110は内面の暗文の密度に反して外側には暗文を施していない。111は淡灰褐色を呈する。瓦器椀は110がやや古相である。

#### S K 319

3区西部、14-1B区で検出した。平面形は東西に長い楕円形に近く、規模は東西約67cm・南北約40cmを測る。断面逆台形を呈し、深さ約5cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト（炭・マンガン斑、鉄分）である。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土しているが、細片のみで時期当は不明である。

#### S K 320

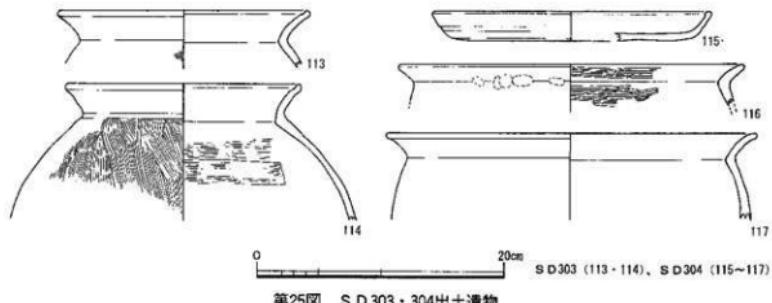
3区西部、14-1B区で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈する。規模は東西約0.5m・南北約1.0mを測る。断面逆台形を呈し、深さ約22cmを測る。埋土は上から2.5Y6/1黄灰色シルト（マンガン斑多）、10YR5/1褐色シルト（炭・焼土層、マンガン斑）、10YR6/1褐色粘土質シルト（マンガン斑）の3層から成り、全体に炭・焼土を多く含む。S D 335を切っている。遺物は土師器皿・羽釜、須恵器、瓦器椀、中国製白磁碗が出土しており、時期は12世紀代に比定される。中国製白磁碗（112）を岡化した。12世紀前半に出現するとされるタイプで、高台露胎で見込みに釉切れが認められる。

#### S K 321

3区西部、14-1C区で検出した。南はS D 335に切られている。平面形は南北に長い楕円形で、規模は東西約1.1m・南北1.9m以上を測る。断面逆台形を呈し、深さ約26cmを測る。埋土はブロック状を呈する3層から成る。遺物は土師器皿・甕、瓦器椀・羽釜が出土しており、時期は12世紀後半に比定される。

#### S D 301・302

1区西端で検出した溝で、S D 301はS D 302、及びS K 302に合流する。埋土は2.5Y4/1黄灰色極細粒砂シルトである。遺物は出土していない。



第25図 SD 303・304出土遺物

#### SD 303

1区中央で検出した東西方向の溝で、基壇南西部から西に伸びる。基壇との関係については、整地2から派生しており、有機的な関連が考えられる。埋土は10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂（鉄分、マンガン斑）である。奈良時代頃の土師器壺（113・114）が出土している。いずれもハケ調整を基調とする。114は胎土が粗で1mm以下の砂粒を多く含む。

#### SD 304

1区中央で検出した北西～南東方向の溝である。基壇南東部の整地層（第5層）を除いた段階で検出したもので、北から南に下がる状況である。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5Y5/1黄灰色細粒混細粒砂質シルト（やや粘性）、下層が2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト混粗粒砂～細粒である。奈良時代頃の土師器皿（115）・壺（116・117）の他、土師器片、須恵器壺片が出土している。115は平城皿Aに当たり、口径22.6cm・器高2.5cmを測る。明褐色を呈し、底部外面に黒斑を有する。調整等は摩滅のため不明である。116は体部内面横方向へラミガキ。117は摩滅の為調整不明。

#### SD 305

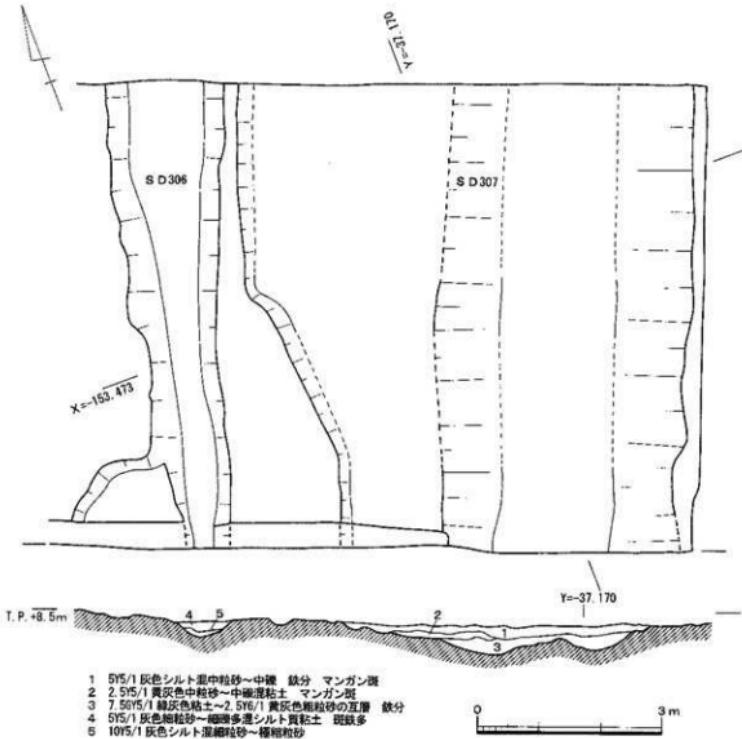
1区中央で検出した北東～南西方向の溝である。N R 301右岸から派生している。断面逆台形を呈し、埋土は上から7.5YR5/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂（鉄分多）、10YR6/1褐灰色細粒砂混シルト（斑鉄）、10YR5/1褐灰色粘土混細粒砂～中粒砂（斑鉄）の3層から成る。飛鳥時代頃の土師器高杯、古墳時代後期の須恵器杯蓋の他、時期不明の土師器片や下層からの混入である弥生土器底部が出土している。

#### SD 306

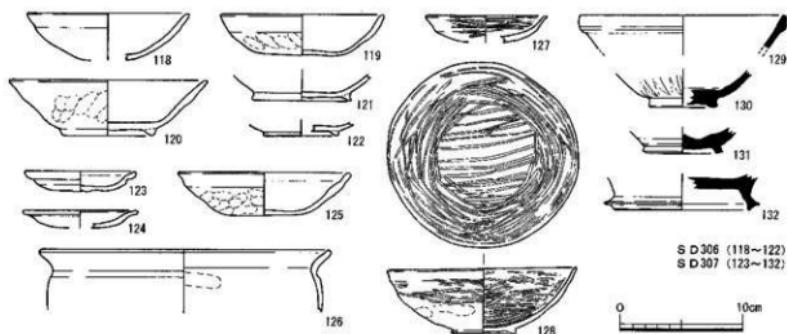
1区東部で検出した南北方向の溝で、幅1.1～1.9m・深さ約27cmを測る。断面楕円形を呈し、埋土は2層から成る。南端では幅が増している。鎌倉時代前半までの土師器・須恵器・瓦の他、石材（芝山石）が出土しており、土師器杯（118～122）を圓化した。高台を付さない杯A（118・119）と付す杯B（120～122）があり、いずれも褐色～明褐色を呈する。118・119は共に口径13.2cmで、器高は3.9cm・3.5cmを測る。120は口径16.2cm・器高4.6cmを測り、1mm以下の砂粒を多く含むやや粗な胎土である。121・122は高台内接合痕が明瞭に残る。これらの時期は9世紀後半～10世紀前半に位置付けられよう。

#### SD 307

1区東端、SD 306の東側に隣接して検出した南北方向の溝で、全体の掘削は実施していない。



第26図 S D 306・307平面・断面図



第27図 S D 306・307出土遺物

が、幅5.4~7.4m・深さ約0.5mを測る。西肩の掘方は二段掘り状を呈するため東側が深くなっています。この溝部分は幅約4.2mを測る。堆土は3層から成る。規範的に他の溝とは一線を画すものであり、集落を区画するような性格が考えられる。12世紀代を中心として13世紀初頭までの遺物が多く出土している。123~132を岡化した。123・124は淡灰黄色系の土師器小皿Aである。125は褐色の土師器杯Aで、口径14.0cm・器高3.6cmを測る。内面～口縁部ヨコナデで、底体部外縁は凹凸が著しい。10世紀初頭頃に比定され、他の遺物より古相を示す。土師器壺(126)は内面全面が焦げる。127は内外面共にヘラミガキを施す瓦器皿で、口径9.9cmを測る。和泉型瓦器碗(128)はほぼ完形で、口径15.2cm・器高5.3cm・高台径5.3cm・高台高0.5cmを測る。焼成や不良で、約半分は炭素吸着が見られず灰白色を呈する。12世紀中葉に比定される。中国製白磁碗(129)は12世紀前半以降に比定される。130は中国製鎬弁文青磁碗である。精良な胎土で、高台内～脣付露胎である。13世紀初頭に登場する器種である。131・132は須恵器壺類の底部であるが器種不明である。

#### S D 308

2区西部で検出した北東～南西方向の溝である。幅1.1~1.9m・深さ約27cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上から2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細礫混シルト質粘土(マンガン斑、鉄分)、2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト(鉄分)、2.5Y5/1黄灰色シルト混中粒砂～細礫(マンガン斑、鉄分)の3層から成る。底部の東端では肩に沿って3個のピット(S P 313~315)を検出した。護岸施設の杭痕と考えられよう。平安時代頃までの土師器、須恵器、瓦器、平瓦の他、弥生土器、布留式土器が出土している。

#### S D 309~311

2区西部、S D 308と水田301の間で検出した。北東～南西方向の溝群である。幅1.1~1.9m・深さ約27cmを測る。断面椀形～皿状を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト(マンガン斑多、鉄分)である。S D 310・311から平安時代頃までの土師器、須恵器が出土している。

#### S D 312~315

2区中央、水田301の東側で検出した北東～南西方向の平行する溝群である。北部では合流して1条の幅広の溝となっている。断面椀形～皿状を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト(鉄分)である。平安時代頃までの土師器、須恵器が出土している。

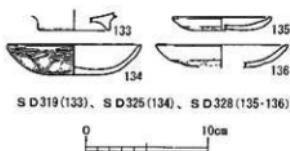
#### S D 316

2区中央、8~9・10H区で検出した北東～南西方向の溝である。断面椀形を呈し、埋土は上層が10YR4/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト(炭、マンガン斑、鉄分)、下層が10YR6/1褐灰色粘土質シルトである。平安時代頃までの土師器、須恵器が出土している。

#### S D 317~326

2区東部で検出した北東～南西方向の平行する溝群である。断面椀形～皿状を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト(菅鉄、マンガン斑多)である。

S D 318~319・322~326から平安時代頃までの土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、平瓦が出土している。S D 319からの黒色土器A碗(133)、S D 325からの黒色土器皿



第28図 S D 319・325・328出土遺物

(134)を図化した。134は1mm以下の砂粒を多く含む胎土である。外面横方向のヘラミガキで、下部に指頭圧痕が残る。

#### S D 327

2区西部で検出した北西—南東方向の溝である。S D 308に削平されている。断面楕形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト（マンガン斑多、鉄分）である。遺物は出土していない。

#### S D 328

2区東部～3区西部で検出した北西—南東方向の溝である。周辺の北東—南西方向の溝群や土坑・ピット群を削平している。断面楕形を呈し、埋土は2.5Y4/1黄灰色細礫多混細粒砂質シルト（攪拌ブロック状、マンガン斑多）である。平安時代頃までの土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、平瓦が出土している。土師器小皿B(135・136)を図化した。両方とも褐色系で、それぞれ口径8.0cm・10.6cmを測る。

#### S D 329・330・333・334

3区西部で検出した北西—南東方向の溝群である。断面形状・埋土はS D 329—逆台形・2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト（炭少、マンガン斑）、S D 330—楕形・2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（マンガン斑多）、S D 333—皿状・2.5Y6/2灰黄色極細粒砂少混粘土質シルト（マンガン斑、管鉄）、S D 334—逆台形・10YR5/1褐灰色シルト質粘土（マンガン斑極多）である。平安時代末頃までの土師器、須恵器、瓦器の他、S D 329・330からは黒色土器、S D 333からは平瓦が出土している。S D 333出土

の土師器小皿A(137)、

平瓦(138)、S D 334出

土の土師器小皿B

(139)・大皿A(140)、

瓦器皿(141)を図化し

た。137は灰褐色を呈し

口径9.8cmを測る。138

は平瓦VIa類である。

139・140は褐色系であ

る。140はほぼ完形に接

合されたもので、口径

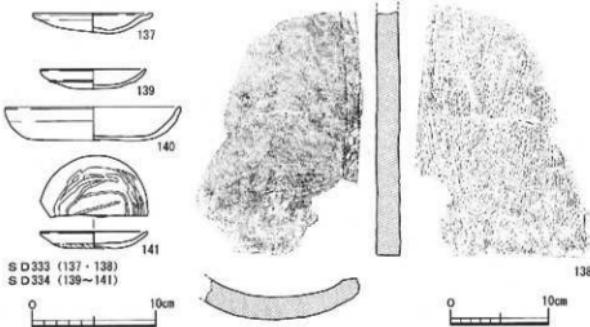
14.4cm・器高2.6cmを測

る。141は内面に圓線状

暗文を施す。

#### S D 331・332

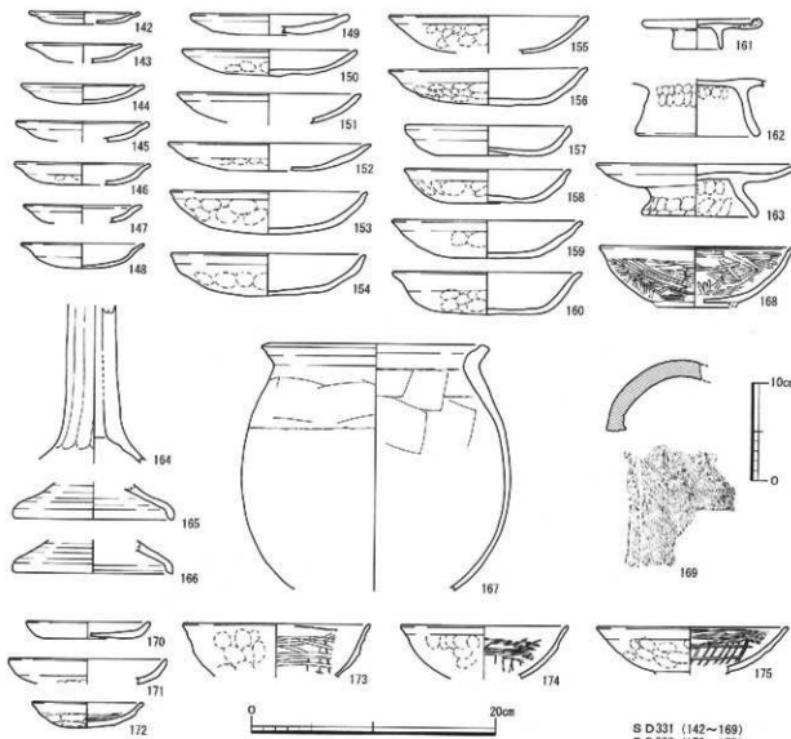
3区西部、S K 314の西側で検出した北西—南東方向の溝である。S K 314底部で東肩を検出したもので、一連の遺構の可能性がある。付近の溝の形状が直線的に伸びるのに比してやや蛇行が見られ、規模も大きい。両溝は南部では合流して1条の溝になっている。断面形状は逆台形を呈し、S D 331の底は北半部で一段下がっている。埋土はS D 331—2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土



第29図 S D 333・334出土遺物

(炭多、マンガン斑、斑鉄)、S D 332-10YR5/1褐色シルト質粘土(ベースの粘土ブロック含む、炭多、マンガン斑)である。

遺物はS D 331から12世紀代までの土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、丸瓦、平瓦が出土している。142~169を図化した。142~146は土師器小皿Aで、口径9.0~11.2cmを測る。142・144~146は褐色、143は白赤色。142は焼成良好で非常に硬質である。147・148は土師器小皿Bで、口径9.6・10.1cmを測り、いずれも口縁端部が外反する。147は淡黄灰色、148・149は褐色。149・150は土師器中皿で口径13.0・14.3cmを測る。151~156は土師器大皿Bで、口径15.2~16.6cmを測る。151・152・154は淡灰黄色、153・155・156は褐色。156は完形で、口径15.8cmを測りやや歪む。157~160は土師器杯Aすべて褐色系である。160は0.5mm以下の砂粒を多く含む。161~163は土師器台付き皿すべて褐色系である。162は脚径10.2cm・脚高4.1cmを測る。163は脚部ユビオサエで凹凸があり歪みが大きく、内面に貼り付け痕を明瞭に残す。脚径9.0cm・脚高3.2~2.4cmを測る。164~166は土師器高杯で、灰白色を呈し胎土は2mm以下の砂粒を多く含む。底脚部(165・166)のどちらかが脚柱部(164)と同一個体と思われるが、底脚部は端部の形状がわずかに異なる。



第30図 S D 331・332出土遺物

のみで、全て同一個体の可能性もある。164は11面に面取りしている。167は土師器壺である。内外板ナデで、外面の全面に煤が付着する。168は瓦器椀で、外面分割ヘラミガキを施し、口縁端部内面に沈線を巡らす。口径15.8cmを測り、高台は欠落しているが器高5.0cm程度であろう。169は丸瓦小片で、凸面はナデ、凹面は斜め方向の糸切り痕が残る。側縁の凹面側に粘土バリが生じている。なお図化しえる資料は無かったが、大和型瓦器椀が含まれている。

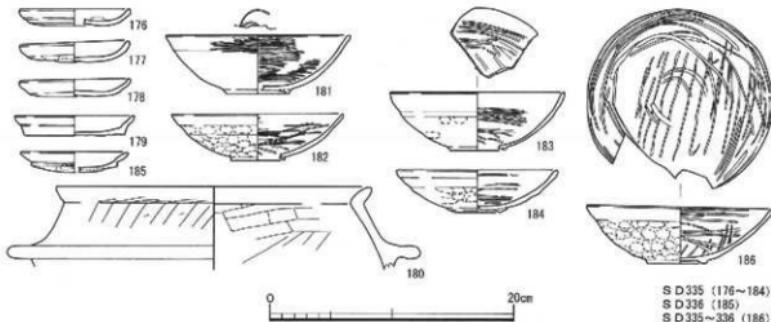
S D 332からは13世紀初頭頃までの土師器、須恵器、瓦器、平瓦が多く出土している。土師器小皿B(170)・中皿(171)、瓦器皿(172)・椀(173～175)を図化した。170・171は褐色系である。172は内面に圓線状暗文を施し、底部外面には花草文が認められる。瓦器椀は器形に差は認められるものの、暗文は内面のみで、圓線状暗文及び見込みに格子(173)、平行(174・175)暗文を施す。

#### S D 335

3区西部で検出した溝で、平面形は調査区南壁に沿う北西—南東方向の溝両端が南に屈曲するものである。東部でS K 321を切っている。断面逆台形～椀形を呈し、埋土は上層が2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト(マンガン斑)、下層が2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土(マンガン斑)である。12世紀末～13世紀中葉の土師器、須恵器、瓦器、平瓦が出土している。土師器小皿B(176～179)・羽釜(180)、瓦器椀(181～184)を図化した。土師器小皿Bはいずれも褐色系である。179は口径9.8cm・器高1.6cmを測り、平坦な底部と口縁部との境に稜を成す特異な形態を呈する。180は口縁部外面横方向のヘラケズリである。181は口縁端部内面に段を有する大和型瓦器椀で、見込みの暗文は螺旋状と思われる。12世紀末に比定される。182～184は和泉型である。暗文は内面のみで、182・183は圓線状暗文と平行、184は圓線状暗文と見込みは不明である。13世紀前半～中葉に比定されるものである。



写真5 S D 335・336遺物出土状況(西から)



第31図 S D 335・336出土遺物

### S D 336

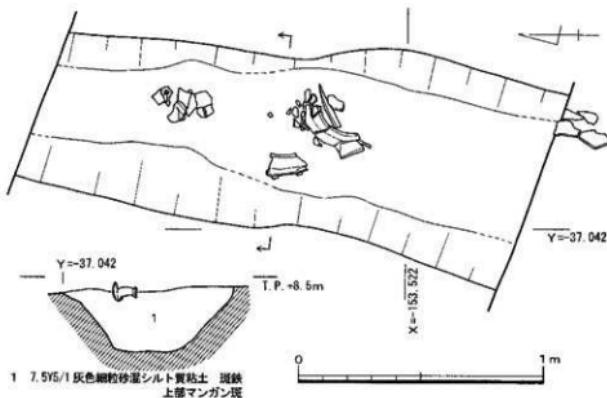
S D 335に直交する溝で、切り合は不明である。断面逆台形を呈し、埋土は10YR6/1褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土（マンガン斑多）である。12世紀末～13世紀前半の土師器、須恵器、瓦器が出土している。瓦器皿（185）を図化した。口径8.8cm・器高1.7cmを測り、底部と口縁部との境に段を成す形態を呈し、外底面は凹凸がある。なお和泉型瓦器碗（186）はS D 335との交点から出土したものである。口径は15.2cm、器高は3.9～5.3cmで歪みが大きい。13世紀初頭に比定される。

### S D 337

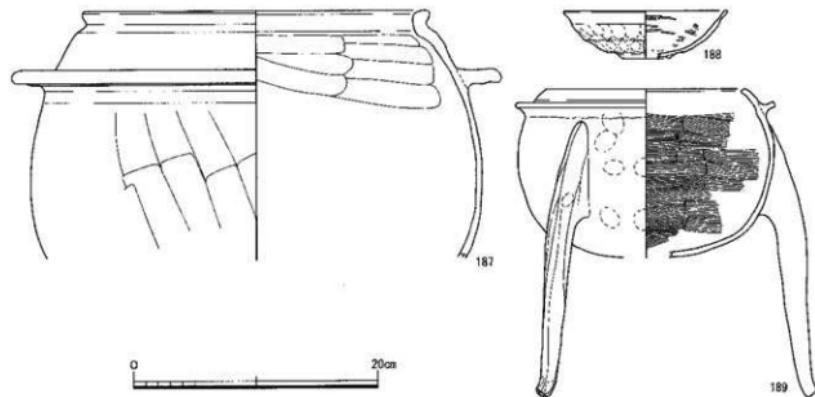
3区畦畔301の西側に平行する溝である。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト（マンガン斑）、下層が10YR6/1褐色細粒砂混シルト質粘土（マンガン斑多）である。13世紀初頭までの土師器、須恵器、瓦器、丸瓦が出土している。

### S D 338～343

3区中央、水田302内で検出した溝群である。埋土はS D 338～341が10YR6/1褐色細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土（斑鉄多、マンガン斑）、S D 342が5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土（斑鉄）、S D 343が7.5Y5/1灰色細粒砂混シルト質粘土（斑鉄、上部マンガン斑）である。S D 342は南に直線的に伸びて4区でも検出しており、延長18.0mを測る。S D 343は畦畔302西側に平行する溝で、断面逆台形を呈し、検出長約2.1m・幅約70cm・深さ28cmを測る。遺物はS D 343上層から12世紀末～13世紀中葉の土師器、瓦器が出土しており、187～189を図化した。土師器羽釜（187）は内面ヨコナデ、体部外面タテナデで、外面錆以下が焼け、内面底部が焦げる。口縁部が短く屈曲するもので、13世紀中葉に比定される。和泉型瓦器碗（188）は見込み暗文が不明である。12世紀末～13世紀初頭に比定される。瓦器三足釜（189）の脚部は2本出土している。図上で復元したもので、口径16.2cm・錆径21.4cm・器高25.2cmを測る。



第32図 S D 343平面・断面図



第33図 S D 343出土遺物

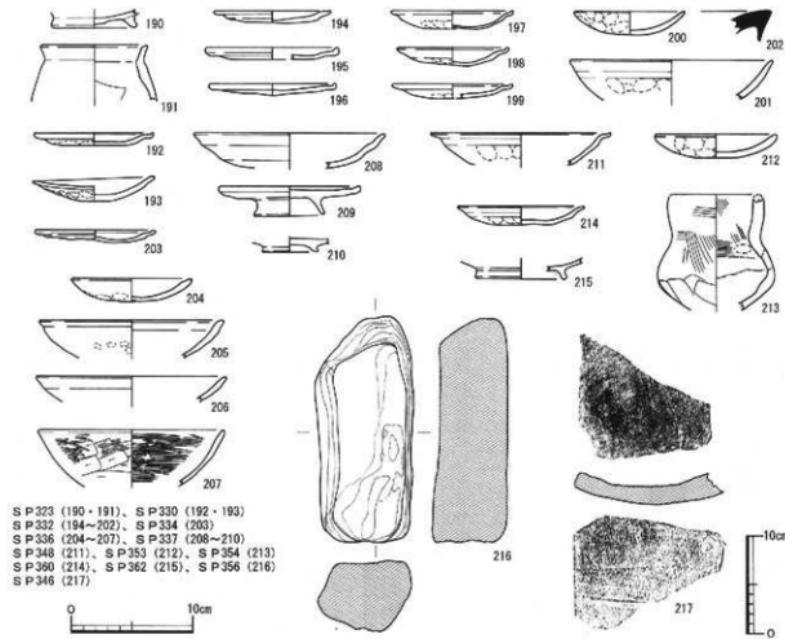
表4 第3面溝 (S D 301~343) 法量表

遺構名	地区	棟出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	出 土 遺 物
S D 301	7-5F	0.6	103	34	
S D 302	“	1.9	36	34	
S D 303	7-6H	4.0	93	21	
S D 304	7-6・7I・J	5.7	80	14	
S D 305	7-6・7J, 8-6・7A	4.7	116	18	弦生・土師器・須恵器
S D 306	8-7・8C	7.7	190	18	土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・石材(芝山石)
S D 307	8-7・8C・D	7.5	740	50	土師器・須恵器・瓦器・丸瓦・平瓦・中國製青磁・白磁
S D 308	8-8・9E・F	6.5	260	18	弦生・布留・土師器・須恵器・瓦器・平瓦
S D 309	8-9E・F	1.6	76	21	
S D 310	8-8・9F	3.3	109	7	土師器・須恵器
S D 311	8-9F	2.5	57	7	土師器・須恵器
S D 312	8-9H	2.3	70	6	
S D 313	“	4.1	42	5	
S D 314	“	4.0	398	5	土師器・須恵器
S D 315	8-9・10H	4.0	88	9	
S D 316	“	1.9	61	25	土師器・須恵器
S D 317	8-10I	2.4	48	13	
S D 318	“	2.3	37	9	土師器・須恵器
S D 319	8-10I・J	2.3	196	14	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器・平瓦
S D 320	8-10J	2.3	11	13	
S D 321	“	2.5	40	8	
S D 322	“	2.4	27	6	土師器・須恵器・瓦器
S D 323	“	2.5	26	7	土師器・須恵器・黑色土器
S D 324	“	1.1	15	3	土師器
S D 325	“	2.1	55	4	土師器・須恵器・瓦器
S D 326	“	2.3	55	5	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器
S D 327	8-8・9E・F	5.5	40	11	
S D 328	8-10J, 9-10A, 14-1A	14.7	27	11	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器(12C)・陶器・平瓦
S D 329	9-10A, 14-1A	2.6	41	14	土師器・須恵器・黑色土器
S D 330	“	2.0	46	9	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器
S D 331	“	2.3	65	31	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器(12C)・丸瓦・平瓦
S D 332	“	2.7	74	24	土師器・須恵器・瓦器(12C)
S D 333	14-1A	2.5	42	4	土師器・須恵器・瓦器(12C末~13C)・平瓦
S D 334	“	2.6	48	20	土師器・須恵器・瓦器(12C後半・大和型含む)
S D 335	14-1B・C	10.6	60	30	土師器・須恵器・瓦器(12C末~13C)・平瓦
S D 336	14-1B	1.9	93	30	土師器・須恵器・瓦器(12C末~13C)
S D 337	14-1・2C	2.3	250	37	土師器・須恵器・瓦器(12C末~13C)・丸瓦
S D 338	14-2D	2.0	21	10	

S D 339	14-2E	1.1	35	6	
S D 340	*	2.1	189	10	
S D 341	*	2.0	26	15	
S D 342	*	18.0	81	12	
S D 343	14-3F	2.1	70	28	土師器・瓦器〔13C前半〕

S P 301~3129

ピットは総数129個検出されたが、2~3区間で密集して検出された他は、1区西端・中央で数個ずつ、3区東部で1個という状況である。2~3区間のものは柱穴と考えられるものが多くを占め、柱痕が確認できるものも多い。このうちS P 325・326・329・330・335・336・323・339がS B 301を構成する。法量・出土遺物等は表5にまとめた。出土遺物で固化したものは、S P 323-190・191、S P 330-192・193、S P 332-194~202、S P 334-203、S P 336-204~207、S P 337-208~210、S P 346-217、S P 348-211、S P 353-212、S P 354-213、S P 356-216、S P 360-214、S P 362-215である。190は黒色土器A椀である。191は小型の土師器甕で、色調は明褐色。192は灰黄色の土師器小皿A、193は褐色の土師器小皿Bである。193はほぼ完形で、口径10.0cmを測る。胎土は2mm以下の砂粒を多く含む。194~199は土師器小皿Aで口径9.2cm~11.0cmを測る。196は口縁端部をつまみ上げるのみで、形状は円盤状を成す。197は器壁が2mm以下で非常に薄作りである。194・195・197・198は淡灰黄色系、196・199は褐色系。200は口径9.2cm・器高2.0cmを測る土師器小皿である。黄褐色で胎土は3mm以下の砂粒を極めて多く含む。



第34図 第3面ピット出土遺物

手づくね成形による粗製品で底部～口縁部の境が不明瞭であり、小皿Cとする。201は灰黄色で、土師器大皿であろう。202は須恵器壺で9世紀代に類例がある。203は灰黄色の土師器小皿Aで口径10.0cmを測る。204は明褐色の土師器小皿Cである。205は灰黄色、206は褐色の土師器大皿である。207は黒色土器B椀で、外面のヘラケズリが顕著に認められる。208は灰黄色の土師器大皿B。209は土師器台付き皿で、皿部は円盤状を成す。3mm以下の砂粒を含む胎土で、口径11.5cm・高台径5.8cm・高台高1.4cmを測る。210は土師器杯Bである。211は灰黄色の土師器大皿で、器壁は小皿並みに薄い。11世紀前半のものか。212は200・204に類似する明褐色の土師器小皿C。213は褐色の土師器壺で、上部ハケ、底部外面ヘラケズリで、内面は接合痕が明瞭に残る。時期は不明である。214は褐色の土師器小皿B。215は黒色土器B椀。216は角柱状を成す砥石で、材質は片麻構造の砂岩質である。使用面は1面で火を受けている。217は平瓦Vib2類。凹面はタテナデを加え、側縁部には成形台の角の痕跡である段が生じている。以上ピットからの出土遺物の時期は、202等の古相を示すものもあるが、おおむね11世紀後半を中心とする。



写真6 SP 356 (南東から)



写真7 SP 360 (北東から)

表5 第3面ピット (SP 301～3129) 法量表

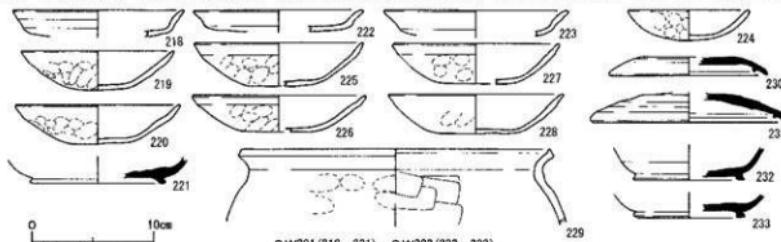
遺構名	地区	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	出 土 遺 物 ・ 他
SP 301	7-5E	25	23	8	
SP 302	7-4E	51		4	
SP 303	7-4F	47	42	20	土師器・須恵器・平瓦
SP 304	7-5F	69	35	8	土師器・須恵器・丸瓦・平瓦
SP 305	*	27	26	8	平瓦
SP 306	7-5I	39	21	31	土師器・須恵器・平瓦
SP 307	*	38	27	19	土師器・丸瓦・平瓦
SP 308	*	33	31	33	土師器・丸瓦・平瓦
SP 309	7-6I	45	45	26	
SP 310	*	65	46	50	
SP 311	*	72	45	6	平瓦
SP 312	*	48	—	—	
SP 313	8-8E	33	29	33	土師器
SP 314	8-9E	33	29	9	
SP 315	*	35	27	17	
SP 316	8-9G	26	22	17	土師器
SP 317	8-9H	42	33	13	土師器・瓦器(12C)
SP 318	8-9・10H	33	22	13	
SP 319	*	32	29	20	
SP 320	8-10H	171	90	24	土師器・須恵器
SP 321	8-9・10H	20	18	17	土師器
SP 322	8-10H	55	53	22	土師器・黒色土器(A)
SP 323	*	57	36	24	土師器・黒色土器(A)
					190・191

S P 324	8-10I	38	27	7	土師器・須恵器		
S P 325	8-9・10I	56	55	27	土師器・須恵器		柱窓
S P 326	8-10I	63	63	54	土師器・須恵器		柱窓
S P 327	8-	36	36	14	須恵器		
S P 328	8-	43	34	35	土師器・黒色土器・輪入陶磁器		
S P 329	8-	43	43	33	土師器・須恵器		柱窓
S P 330	8-	56	47	43	土師器・須恵器	192・193	柱窓
S P 331	8-	46	40	20	土師器		
S P 332	8-	83	61	42	土師器・須恵器・黒色土器	194~202	柱窓
S P 333	8-	41	24	21	土師器・黒色土器・瓦器		
S P 334	8-	57	53	38	土師器・黒色土器・瓦器	203	
S P 335	8-	62	39	33	土師器		
S P 336	8-	45	34	39	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	204~207	柱窓
S P 337	8-	43	35	23	土師器・須恵器	208~210	
S P 338	8-	49	41	26	土師器・黒色土器・瓦器		
S P 339	8-	42	42	31	土師器・黒色土器(B)・瓦器		
S P 340	8-	42	33	5	土師器		
S P 341	8-10J	23	23	9	土師器・黒色土器		
S P 342	8-	37	36	10	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器		柱窓
S P 343	8-	52	35	21			
S P 344	8-	27	27	12			
S P 345	8-	62	50	20	土師器・須恵器・黒色土器		
S P 346	8-	60	30	33	平瓦	217	
S P 347	8-	27	24	10			
S P 348	8-	36	33	34	土師器・須恵器	211	
S P 349	8-	26	24	14	土師器・黒色土器		
S P 350	8-	64	53	35	土師器・須恵器・黒色土器		柱窓
S P 351	8-	38	35	19			
S P 352	8-	30	28	14			
S P 353	8-	88	28	56	土師器・黒色土器	212	
S P 354	8-	50	47	33	土師器・須恵器・黒色土器(A)	213	
S P 355	8-	42	39	8	土師器		
S P 356	8-	38	18	12	石材	216	柱窓
S P 357	8-	32	32	10	土師器・須恵器・黒色土器(B)		柱窓
S P 358	8-	34	26	28	土師器		
S P 359	8-	34	31	7	土師器・須恵器		
S P 360	8-	45	36	16	土師器・須恵器・黒色土器・石材	214	
S P 361	8-	55	41	7	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器		
S P 362	8-	35	31	35	土師器・須恵器・黒色土器・平瓦	215	
S P 363	8-	41	33	25	土師器・須恵器		柱窓
S P 364	8-	50	35	34	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器(12C)		柱窓
S P 365	8-	50	35	32	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器(12C)		柱窓
S P 366	9-10A	38	25	7	土師器		
S P 367	8-	19	18	13			
S P 368	8-10J, 9-10A	19	15	11			
S P 369	8-10J, 13-1J	18	15	8			
S P 370	9-10A	19	13	6	土師器・瓦器		
S P 371	8-	29	22	5			
S P 372	8-	31	27	14	土師器・須恵器・瓦器(12C後半~13C)		
S P 373	8-	28	11	4			
S P 374	8-	48	42	25	土師器・瓦器		
S P 375	8-	26	18	7			
S P 376	8-	35	29	20	土師器		
S P 377	9-10A, 14-1A	63	47	26			
S P 378	14-1A	35	30	26	土師器		
S P 379	8-	45	42	12	土師器		
S P 380	8-	31	30	6			
S P 381	8-	30	29	11			
S P 382	8-	29	24	8	土師器		
S P 383	14-1B	28	24	7	土師器		
S P 384	8-	26	21	5			
S P 385	8-	25	24	7			
S P 386	8-	43	15	8			
S P 387	8-	22	22	7	土師器・黒色土器		

S P388	+	35	28	17	土師器・瓦器 (12C後半～13C、大和型含む)・丸瓦
S P389	+	35	23	14	
S P390	+	45	32	33	土師器・瓦器 (12C後半)
S P391	+	25	15	6	土師器・須恵器
S P392	+	36	30	7	土師器・瓦器
S P393	+	46	33	24	土師器・瓦器
S P394	+	39	36	32	土師器・瓦器
S P395	+	25	20	11	土師器
S P396	+	22	20	18	
S P397	+	22	21	6	
S P398	+	44	35	11	土師器・瓦器
S P399	+	31	28	16	土師器・瓦器
S P3100	+	35	32	12	
S P3101	+	30	28	19	瓦器
S P3102	+	29	25	3	土師器・須恵器
S P3103	+	39	30	7	
S P3104	+	31	20	12	
S P3105	+	34	28	6	
S P3106	+	27	27	9	土師器・瓦器
S P3107	14-1B・C	61	15	7	土師器・瓦器
S P3108	+	35	33	5	
S P3109	14-1B	33	27	23	土師器・瓦器 (13C前半)
S P3110	14-1C	25	23	16	
S P3111	+	39	25	16	
S P3112	+	22	22	8	
S P3113	+	39	29	15	瓦器
S P3114	+	29	26	9	土師器・瓦器 (13C前半)
S P3115	+	30	30	5	土師器・瓦器
S P3116	+	33	25	15	須恵器
S P3117	+	23	20	5	
S P3118	+	30	24	31	土師器・黒色土器・瓦器
S P3119	+	22	20	17	
S P3120	+	21	17	10	
S P3121	+	25	20	12	土師器
S P3122	+	19	18	6	
S P3123	+	21	20	4	
S P3124	+	25	22	10	
S P3125	+	41	30	12	
S P3126	+	35	25	5	瓦器 (12C末～13C)
S P3127	+	32	25	8	
S P3128	+	25	18	5	土師器
S P3129	14-3H	45	42	18	

### S W301

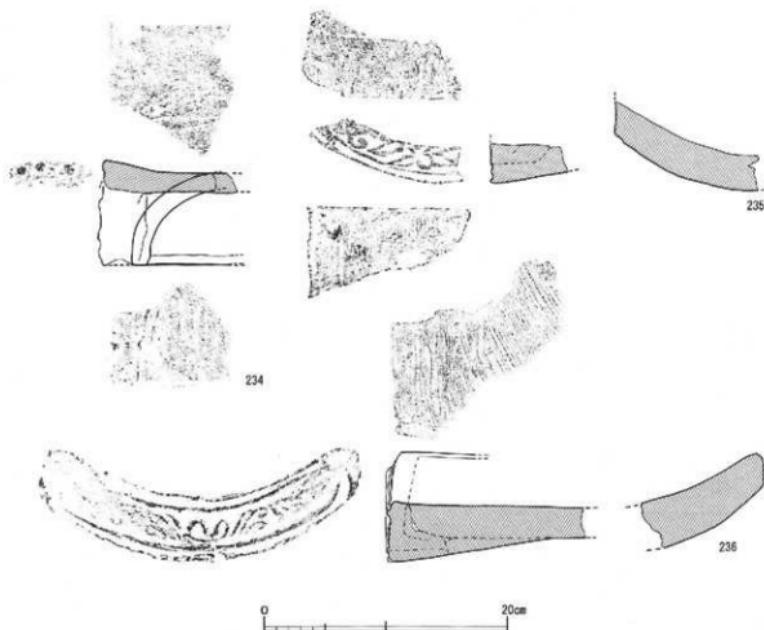
1区西端、7-4E区で検出した瓦集積地で、範囲は東西3.4m以上×南北約4.0mを測る。掘方は無く、第2面の耕作地造成に伴い廃棄されたものと考えられる。飛鳥時代～奈良時代末の瓦の他、平安時代前半までの土師器・須恵器を少量含んでおり、ほとんどが細片である。出土瓦の内



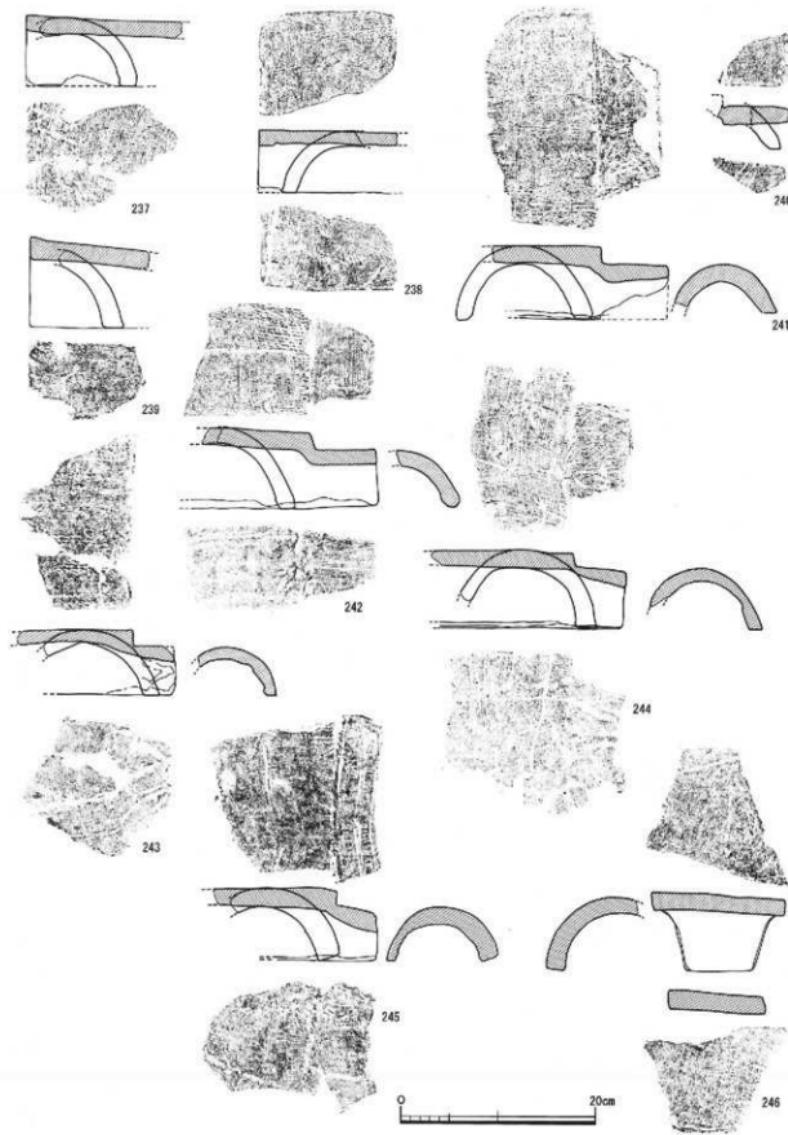
SW301 (218～221), SW302 (222～233)

第35図 SW301・302出土遺物

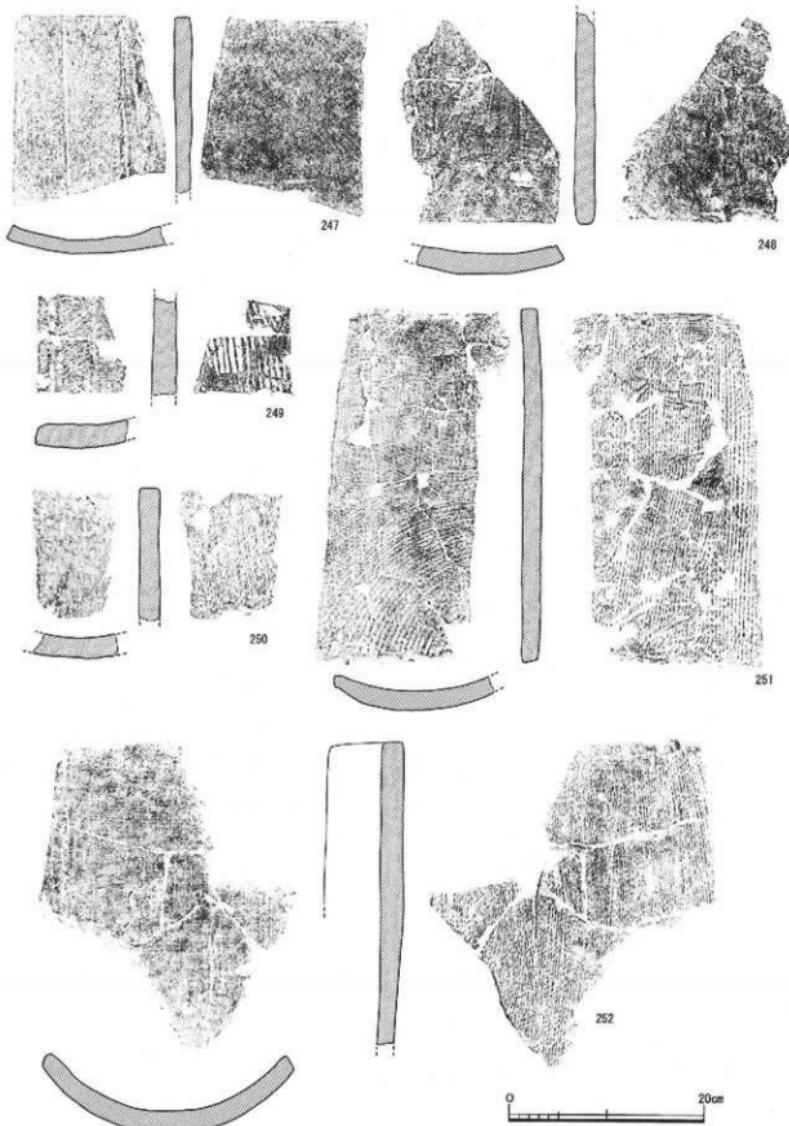
訳（破片数）は軒丸瓦 1 点・軒平瓦 2 点・丸瓦約220点・平瓦約1110点・面戸瓦 1 点を数える。土器類（218～221）、瓦類（234～259）を図化した。218は土師器皿で口径14.0cmを測る。口縁部に灯芯痕が残る灯明皿である。平坦な底部に外湾する短い口縁部をもつもので、平安時代前期に見られるタイプである。219・220は褐色系の土師器杯Aで、口径12.6cm・13.6cmを測る。皿と同時期のものであろう。221は須恵器杯身で、高台の位置から見て飛鳥時代のものと思われる。234は軒丸瓦Ⅲ型式で、瓦当は欠落し、周縁の珠文のみ遺存している。235は軒平瓦Ⅳ型式で、平瓦部から欠落した瓦当左部分である。236は軒平瓦Ⅲ型式である。渋川廃寺では当資料 1 点のみが確認されている。237～239は丸瓦の広端部である。237は凹面に糸切り痕が明瞭に残る。凸面広端部 1 cm を削り、側縁の凹面側角を面取りする。238は凹面広端部に布端の痕跡である溝がある。側縁両側に粘土バリが生じている。240～245は丸瓦狭端部である。240・241は丸瓦Ⅱ b類である。240は暗褐色を呈する。玉縁凸面の布目は、側端・狭端の 1 cm を削ることにより中央にのみ残る。玉縁凹面も側端の 1 cm 、狭端の 2 cm を削る。241は灰黒色を呈する。凹面は糸切り痕が残り、側端を削る。玉縁凸面は凸凹で、布目を残して未調整である。玉縁凹面狭端をナデる。242は丸瓦Ⅱ a類で、黒褐色を呈する。凹面は糸切り痕を残し、側端 1 cm を削る。玉縁側端は 3 面に削る。243は丸瓦Ⅱ a類で凹面は糸切り痕、布の織じ目痕を残す。玉縁凸面ヨコナデで、凹面側端角を面



第36図 SW301出土軒瓦

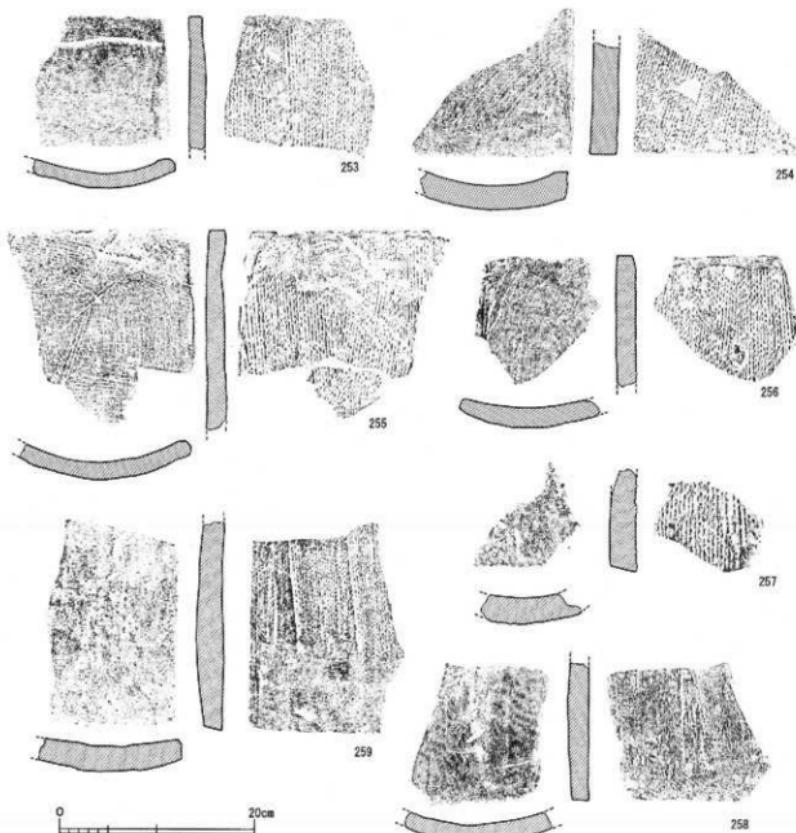


第37図 SW301出土丸瓦・面戸瓦



第38図 SW301出土平瓦(①)

取りする。244・245は丸瓦Ⅱe類である。244の凸面は縄目タタキを完全にナデ消す。凹面は糸切り痕、布の綴じ目痕を残す。245は凹面側端 1 cm を削り、側端面外側を面取りする。玉縁凸面ヨコナデで、狭端部 1 ~ 3 cm を削り、狭端面にバリが生じる。246は平面台形を成す面戸瓦である。褐灰色を呈し、胎土密で 5 mm 以下の砂粒を少量含み、焼成良好。凸面ヨコナデ、凹面は切断部角を面取りする。247・248は平瓦 I 類である。247は淡灰色を呈し、胎土密で 3 mm 以下の砂粒を含み、焼成良好である。凸面狭端部 4 cm をヨコナデ、凹面中央をタテナデする。凹面には模骨痕が階段状に残り、側端面は分割破面のままである。248は暗灰色～黒褐色を呈し、胎土やや粗で 2 mm までの砂粒を多く含み、焼成やや不良である。側端面に分割の際残った粘土をそのまま残している。広端面中央は断面が丸くなる。249は平瓦 IV 類である。凹面は糸切り痕を残し、側端を削

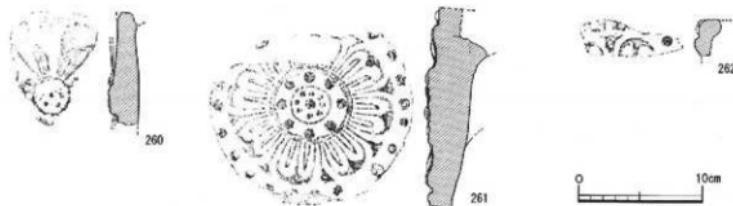


第39図 SW301出土平瓦②

る。250～258は平瓦VI類で、250～256はVIIb類である。251は長辺36.3cmを測り、色調は褐灰色である。凸面狭端部3cmをヨコハケし、側端面は2～3面に削る。253は狭端部に布端の痕跡の溝を残す。255は凸・凹面の狭端部にヨコハケを加える。側端面は2面に削る。257はVIIc類である。258は凸面全面をナデているが、縄目タタキは残っている。広端部にはハケ状工具痕が見られる。凹面には一部にタテナデを加える。259はVIIIa類で、縄目タタキの原体幅6cm以上が確認できる。凸面の縄目タタキは広端部7cmを完全にナデ消している。

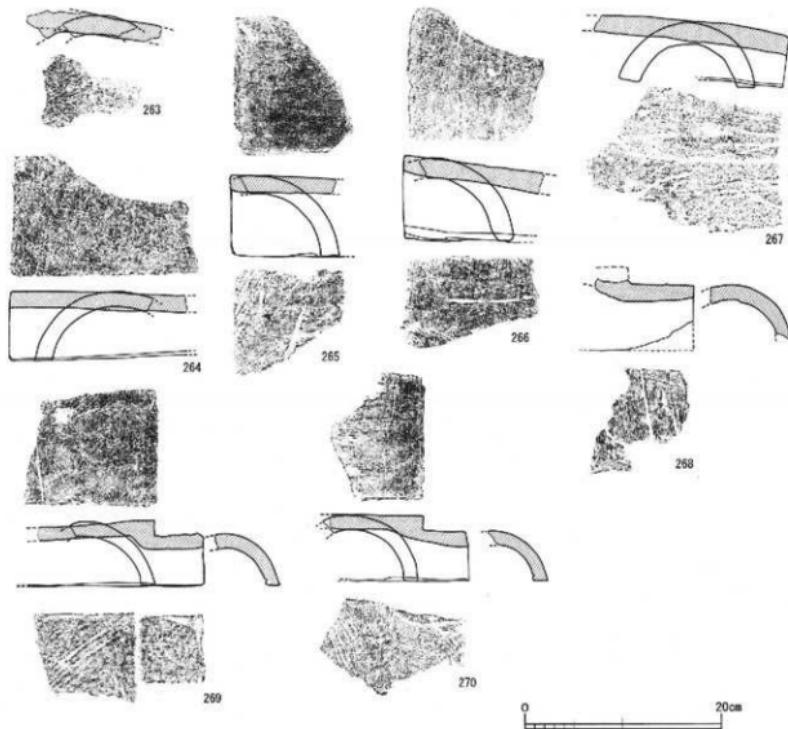
#### S W302

S W301の南東約1.5m、7～5E・F区で検出した瓦集積で、範囲は東西約6.0m×南北約3.3mを測る。S W301と同様に掘方は無く、同じ性格と考えられる。出土遺物もほぼ共通するもので、瓦では接合関係が認められることからも、同時期に形成されたのであろう。出土瓦の内訳(破片数)は軒丸瓦3点・軒平瓦1点・丸瓦約280点・平瓦約480点を数える。土器類(222～233)、瓦類(260～283)を図化した。222・223は土師器皿で、淡褐色・明褐色を呈し、222は2mm以下の砂粒を含む胎土である。土師器小皿C(224)は口径10.0cm・器高2.5cmを測る。手づくね成形で、褐色を呈し2mm以下の砂粒を含む胎土である。11世紀後半頃と考えられるピット出土の204・212等よりも器形が深く、奈良時代中頃(平城III)の資料に類例がある。225～228は土師器杯Aで、口径13.8～14.2cm・器高3.0～3.5cmを測る。225・226は淡褐色で2mm以下の砂粒を多く含む胎土、227・228は明褐色で胎土密である。225に3箇所、227に1箇所の灯芯痕が有る。土師器皿(222・223)・杯(225～228)については、S W301と同時期と捉えて大過なからう。土師器壺(229)は内面が焦げる。8～9世紀に比定されよう。230・231は須恵器杯蓋である。230は口縁部内面、231は天井部外面に灰が被る。飛鳥時代後半に比定される。232・233は須恵器杯身で、232は内底面中央にナデを加える。232は飛鳥～奈良時代、233は飛鳥時代に比定される。260は軒丸瓦Ic型式で、瓦当の1/4程度の破片である。摩滅が著しい。261・262は軒丸瓦III型式である。261は中房外縁の凸線が摩滅して完全に消滅し、外傾する面を成している。瓦当裏面下部の縁辺がやや盛り上がっている。263は瓦当の欠落した軒丸瓦で、胎土等から勘案しておそらく軒丸瓦III型式であろう。264～270は丸瓦で、264～266は広端部である。264は横方向、265は斜め方向の糸切り痕を残す。265は側端面の凹面側に粘土バリが残り、分削は外からである。266は褐色を呈するやや粗な胎土である。267は丸瓦Ia類、268は丸瓦IIc類、269は丸瓦IId類、270は丸瓦IIe類の狭端部である。269・270は凹面に斜め方向の糸切り痕を残す。269は凸面横方向のケズリで、玉縁凹面の布目をナデ消す。胎土は264に似る。271は軒平瓦I型式の瓦当小片である。272・273は平瓦II類である。

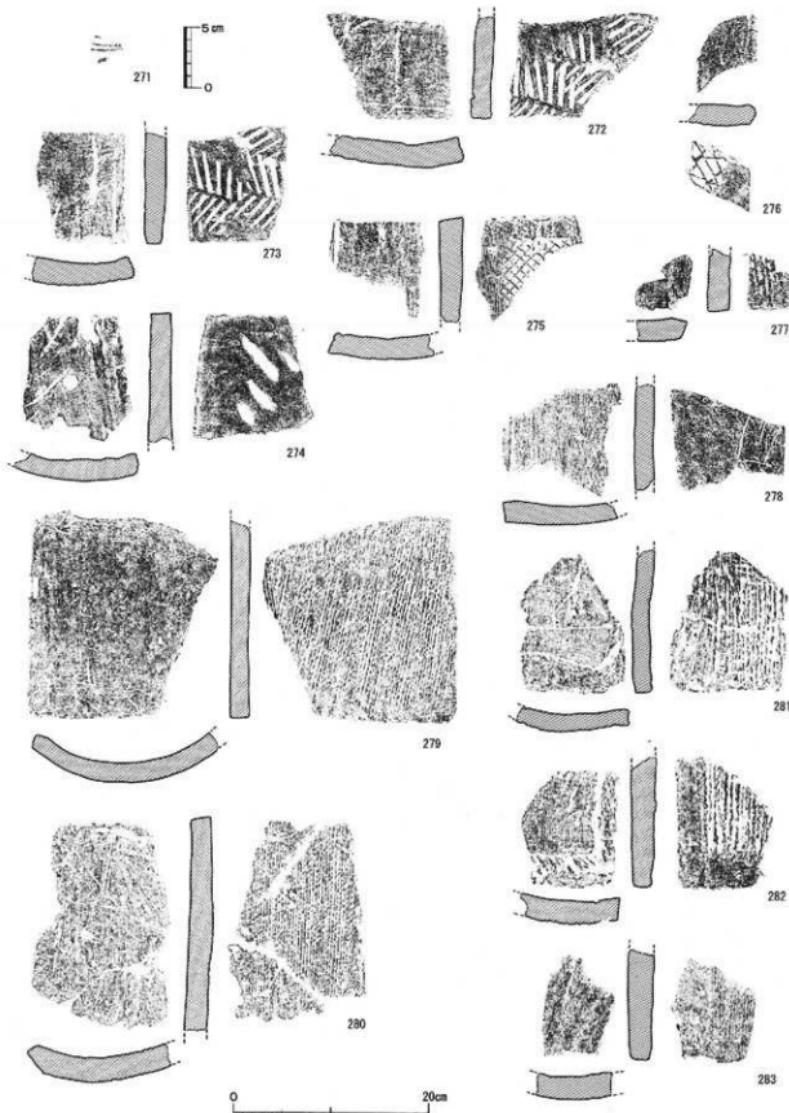


第40図 S W302出土軒瓦

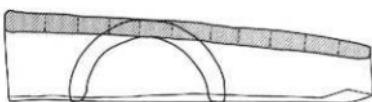
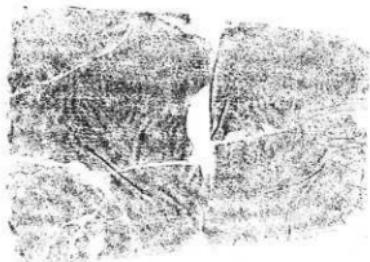
凹面に模骨痕、側端面は分割破面を残し、272は一部削る。273には分割界線が見られ、広端面にわずかに布目が認められる。274は平瓦VI類である。凸面は縄目タタキがかすかに残るがヨコナデで、指ナデを加える。側端面は2面に面取りする。275は平瓦IIIb類で、凹面側端部に分割界線が残る。276は平瓦V類で、側端面は3面に面取りする。277は平瓦IV類で、凹面側端部を削る。278・279は平瓦VIb類である。278は凸面に縄目タタキがかすかに認められるが、ナデ消しているものか摩滅によるものか不明である。またヘラ記号?が認められる。凹面側端に溝を成し、分割界線の可能性がある。279は凹面に横方向の糸切り痕を残す。280は平瓦VIIb類で、胎土中に2cm大の石を含んでいる。凸面側端部にハケ状工具痕が見られ、凹面には横方向の糸切り痕を残す。281～283は平瓦VIIc類である。凸面は、281は側端部5cmを削り、282は広端部・側端部3cmをナデ、283は広端部2.5cmをナデる。283には離れ砂が付着するが、離れ砂が確認されたのは全体でこの1点のみである。凹面は281が広端部に、282は広端部・側端部に布端の痕跡である溝を残す。281・282は歪みが大きく、胎土等も類似する。



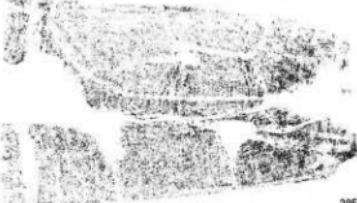
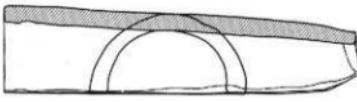
第41図 SW302出土軒丸瓦・丸瓦



第42図 SW302出土軒平瓦・平瓦



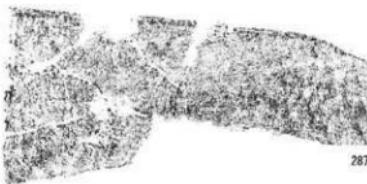
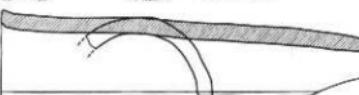
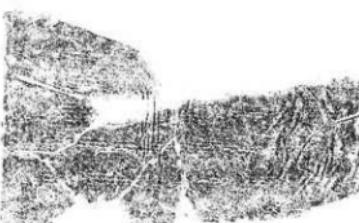
284



285



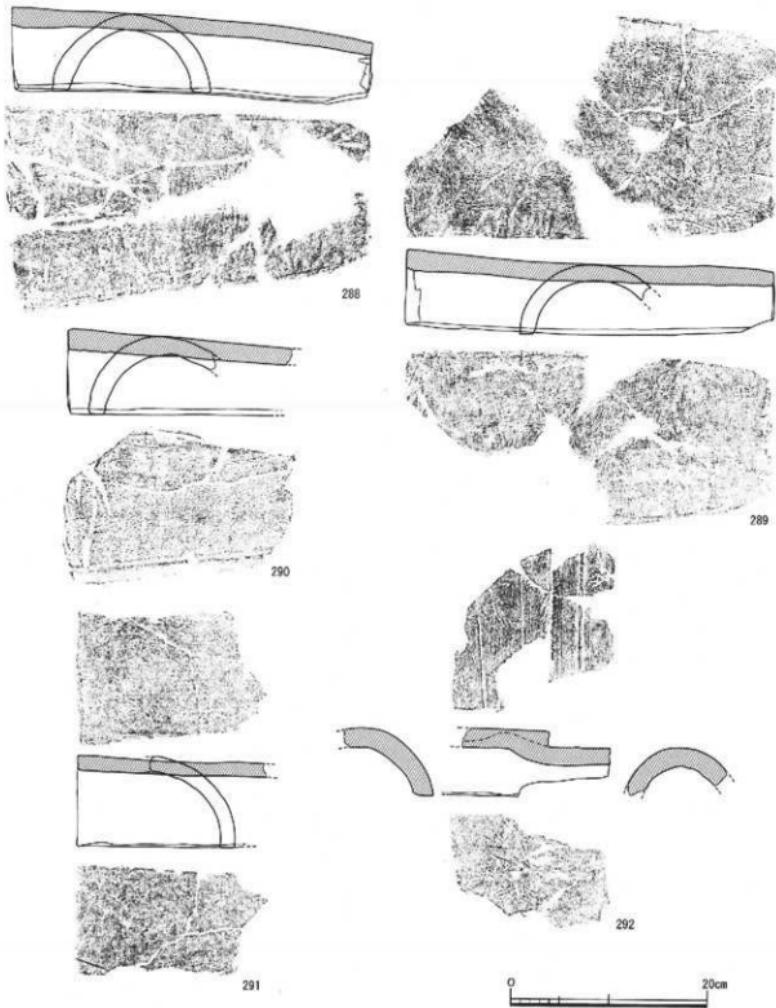
286



287



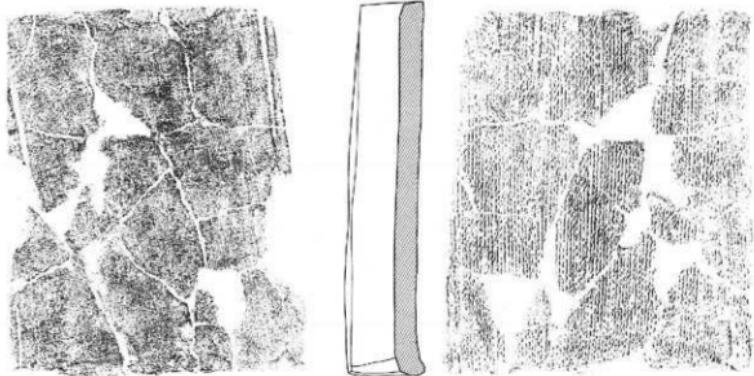
第43図 S W303出土丸瓦①



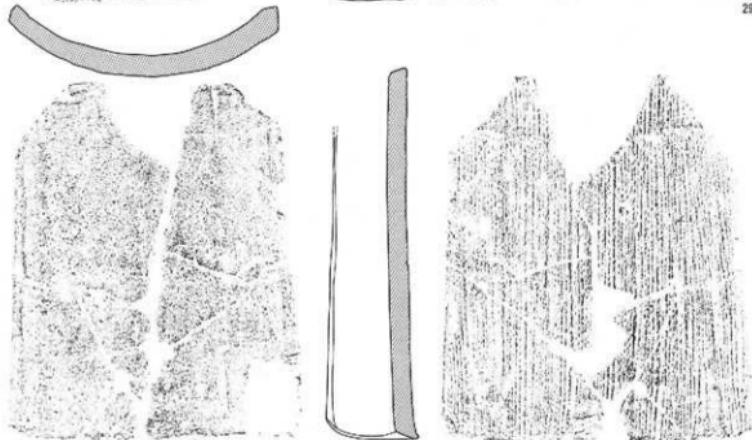
第44図 SW303出土丸瓦②

S W303

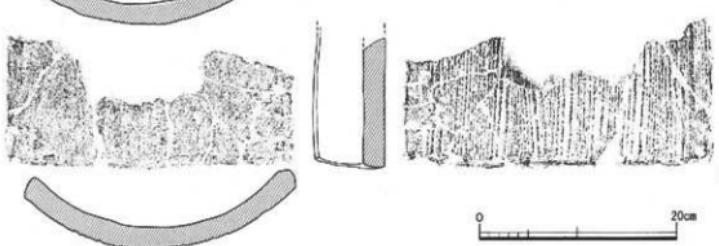
1区拡張部北部、7-5H・I区で検出した瓦集積で、北は調査区外に続いている。範囲は東西5.5m以上×南北1.5m以上を測る。瓦はT.P.+8.5~8.7m間から重層的に出土しており一括性の



293



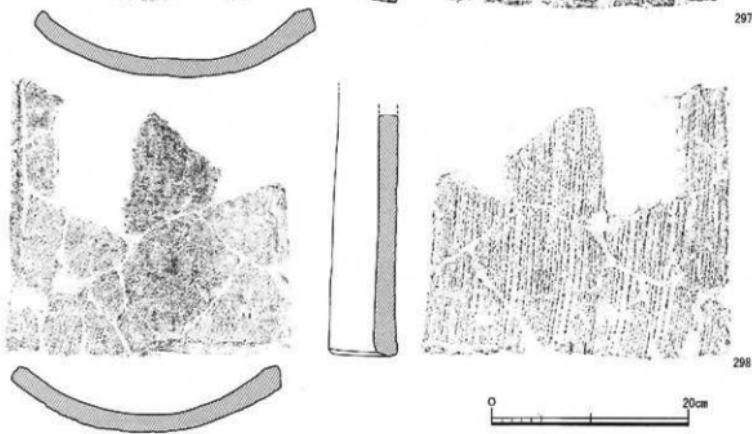
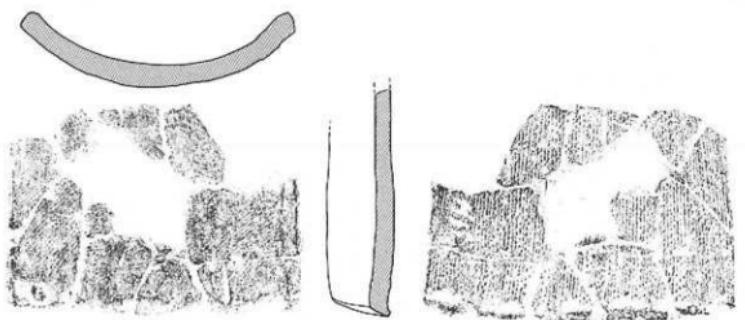
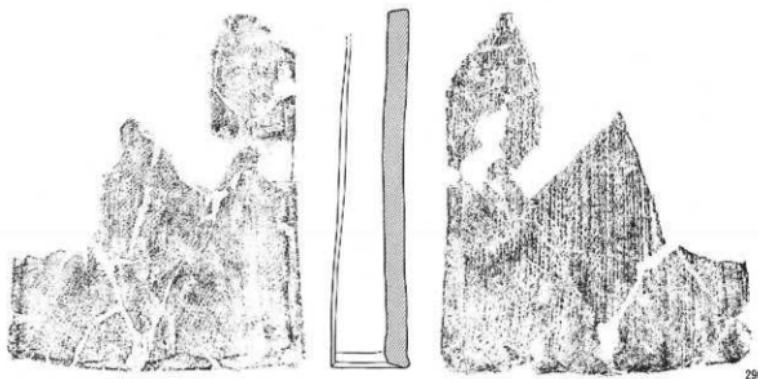
294



295

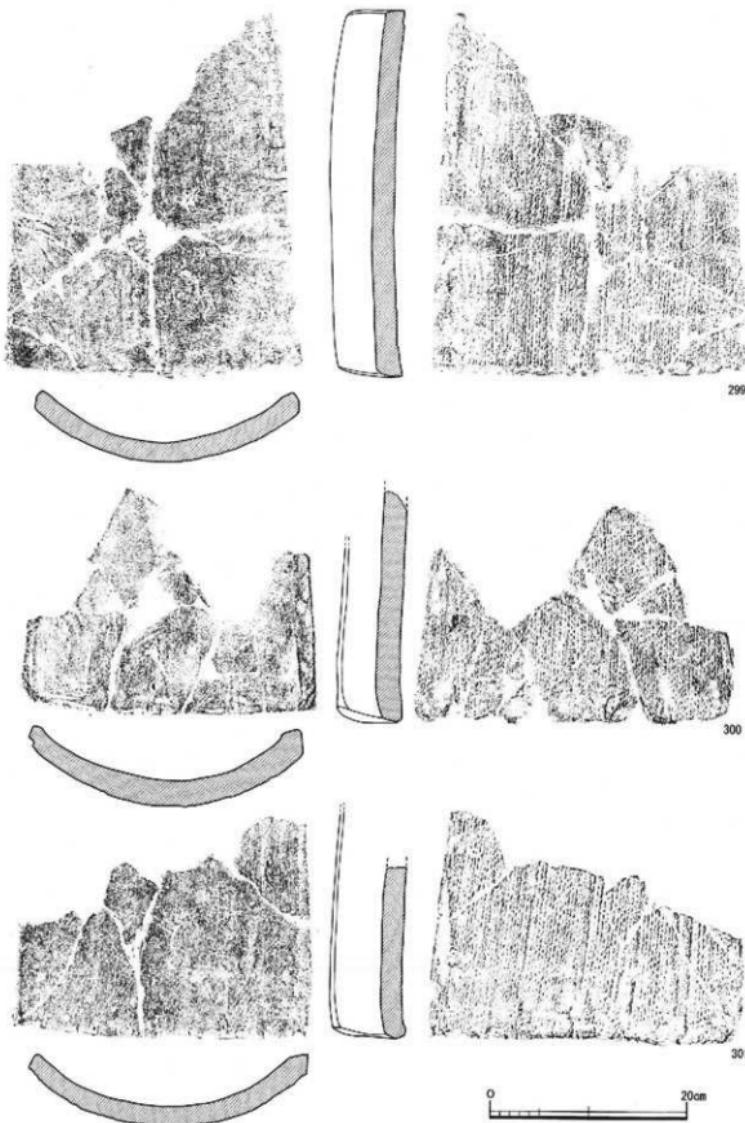
第45図 SW303出土平瓦①



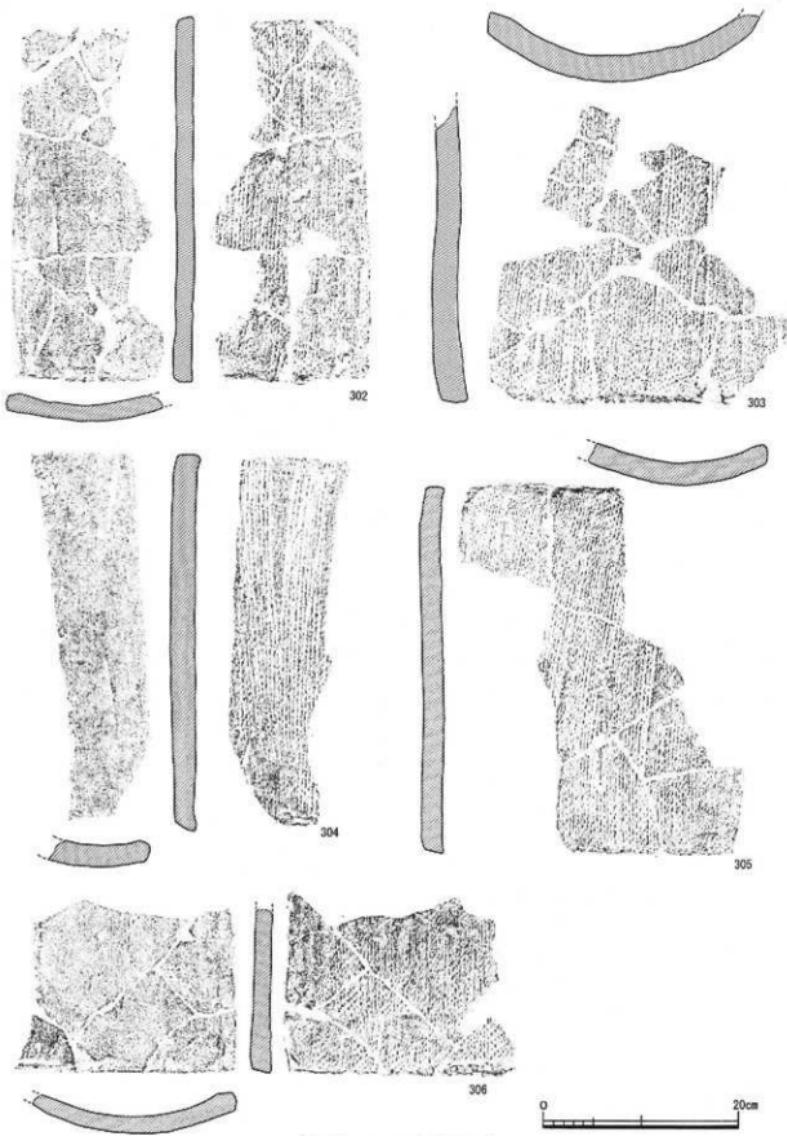


0 20cm

第46図 S W303出土平瓦②

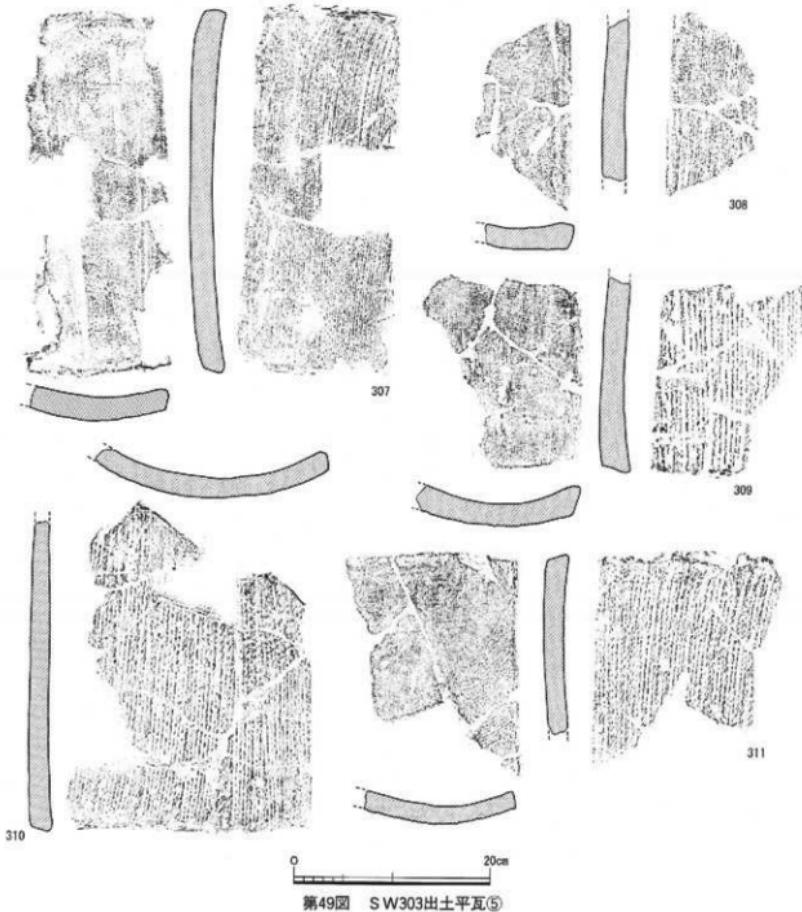


第47図 SW303出土平瓦③

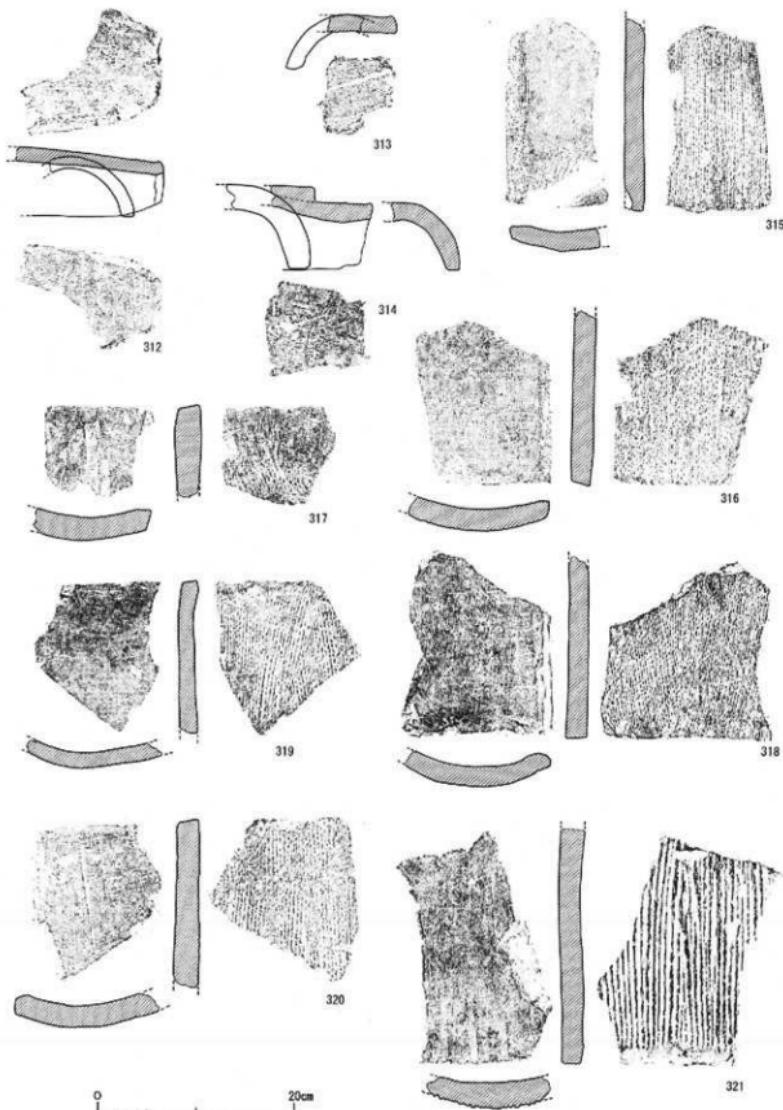


第48図 SW303出土平瓦④

高い資料であるが、建物から転落したまま元位置を保っているのではなく、基壇北斜面に廃棄されたものである。出土遺物は飛鳥時代～奈良時代末の瓦の他、平安時代前半までの土師器、須恵器片を少量含んでいる。出土瓦の内訳（破片数）は丸瓦約190点・平瓦約520点を数える。土器には固化しえるものは無かった。瓦では瓦当部は出土していない。瓦(284～311)を固化した。284～292は丸瓦である。284～289は丸瓦 I b類である。284は狭端部側縁を2.7～4.0cm切り取る。凹面では粘土帯が確認でき、広端部端から4.2・7.5・10.7・13.8・17.0・21.0・23.8・27.0・30.5・34.0cmの部位に粘土接合痕が見られる。285は凹面広端部に幅1.2cmの浅い溝があり、この中にも布目が残る。287は狭端部側縁の切り取り5.7cmで長い。289は凹面側端部に縦方向の粘土接合痕が



第49図 SW303出土平瓦(5)



第50図 S W304出土瓦

認められる。284・286が焼成やや不良。290・291は広端部で、290は灰黄色、291は黒褐色を呈し、共に焼成やや不良である。291はI b類であろう。292は丸瓦 II c類である。凹面は粘土接合痕が認められ、側端部角を面取りする。凸面は肩部に段を成す。293~311は平瓦 VII類である。293~306がVII b類、307・308がVII a類、309~311がVII c類である。色調は293・306が褐色、304が黒褐色、305・310が灰黄褐色、他は灰色系を呈する。焼成は299・301~303・305・306・310がやや不良で、他は良好。293は平面が台形にならず、広端辺と左側辺が直角を成す。296・297・306は成形時にはみ出した粘土を凸面広端部になで付けている。300は凹面右側端部に製作台角の痕跡と思われる段、広端部には布端部の痕跡と思われる溝が認められる。301は側端面の凹面側角を面取りする。303は胎土中に1.0×2.5cmの石が含まれる。302・304・307は分割された熨斗瓦の可能性がある。

丸瓦 II c類は1点のみの出土で、後述する基壇版築層のものが混入したと考えられ、SW303は丸瓦 I b類+平瓦 VII類で構成されると捉えてよからう。

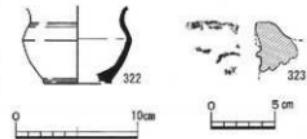
#### SW304

1区中央、7-6・7 I・J区で検出した瓦集積である。基本層序第5層中にあたり、第4層が盛土された後、その東側斜面に廃棄されたような状況で検出された。出土遺物は時期不明の須恵器、土器片少量、及び瓦である。瓦はほとんどが細片で、摩滅したが多い。出土瓦の内訳(破片数)は丸瓦約130点・平瓦約270点を数える。土器には図化しえるものは無かった。瓦(312~321)を図化した。312~314は丸瓦で、312・313が丸瓦 I b類、314が丸瓦 II c類の、それぞれ狭端部である。314は玉縁凹面狭端部を削り、基部から2.8cmに位置する水切り凸帯は断面台形を成す。315~321は平瓦である。315・318は平瓦 VI b類、319・321はVI c類で、318・319は褐灰色を呈し、胎土等も類似する。321は黒褐色を呈し、胎土密で2mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好。凸面は繩目タタキが9本/5cmと非常に粗く、広端部をナデる。凹面の布目密度は10本/cmで細かい。316は平瓦 VII b類、320はVII c類である。317は平瓦 VI b類で、凸面ナデを加えるが繩目タタキは全体に残る。321は平瓦 IV c類である。図化しえなかつたが、瓦当の欠落した軒平瓦が1点、また平瓦 II類も2点出土している。

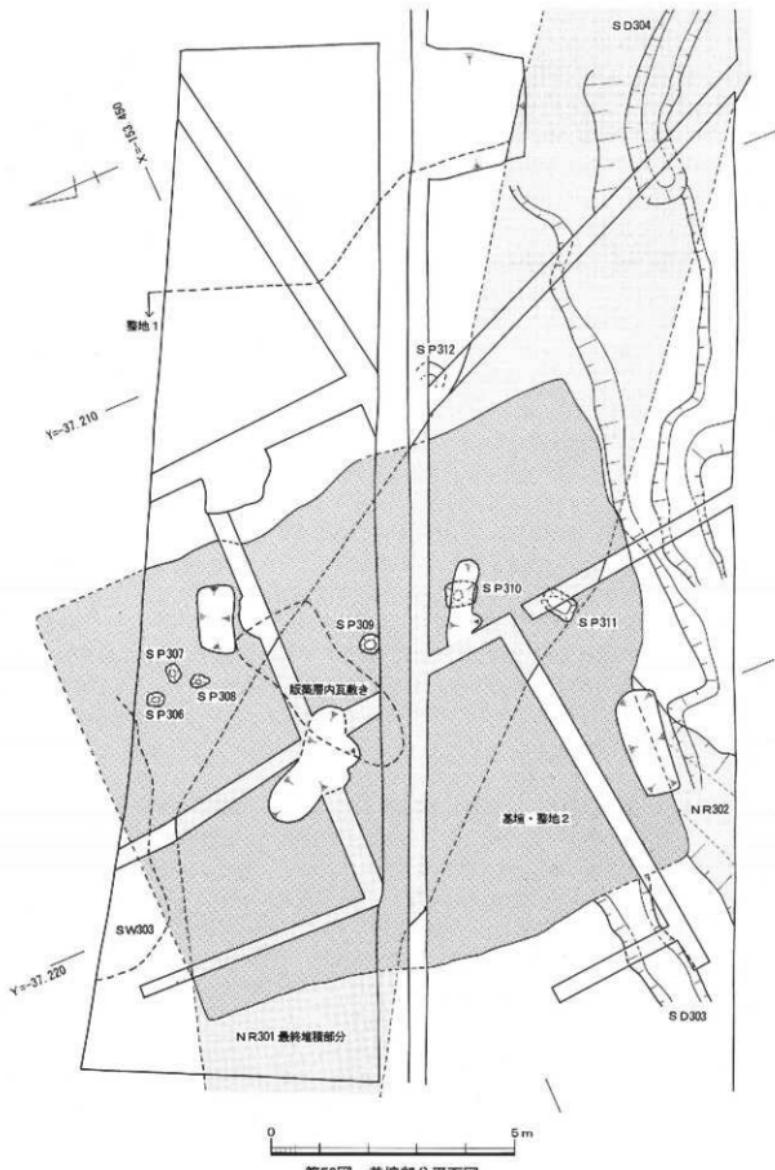
#### 基壇

7-5・6 H・I区で検出した。整地2の範囲の上部に盛土して構築されており、高さは最大で約30cm、上面の標高は約T.P.+8.7mを測る。盛土方法では層厚5~10cmを測る粘土・砂礫の互層による版築技法が見られ、非常に固く締まる(第54図1~16層)。層中には瓦片が散見され、中央部では東西3.8m・南北1.5mの範囲に瓦片を敷き詰めた状況も見られる。上面及び東側ではピット7個(S P 306~312)が検出されたが、時期不明で、規則性は認められず、基壇に伴うものではない。S P 311は断面で柱痕が確認できる。礎石等も検出されていない。本来、あと数十cmは高さがあったものと考えられるが削平されているのである。なお出土瓦の特徴として、陶磁器の貫入風に細かくひび割れた破片が多い。基壇構築の際に土をつき固めたことに起因するものと思われ、また推測ではあるが後述する塔心礎の重みによるとも考えられる。基壇の高まりは後世には鳥畠104となって近世まで利用されている。

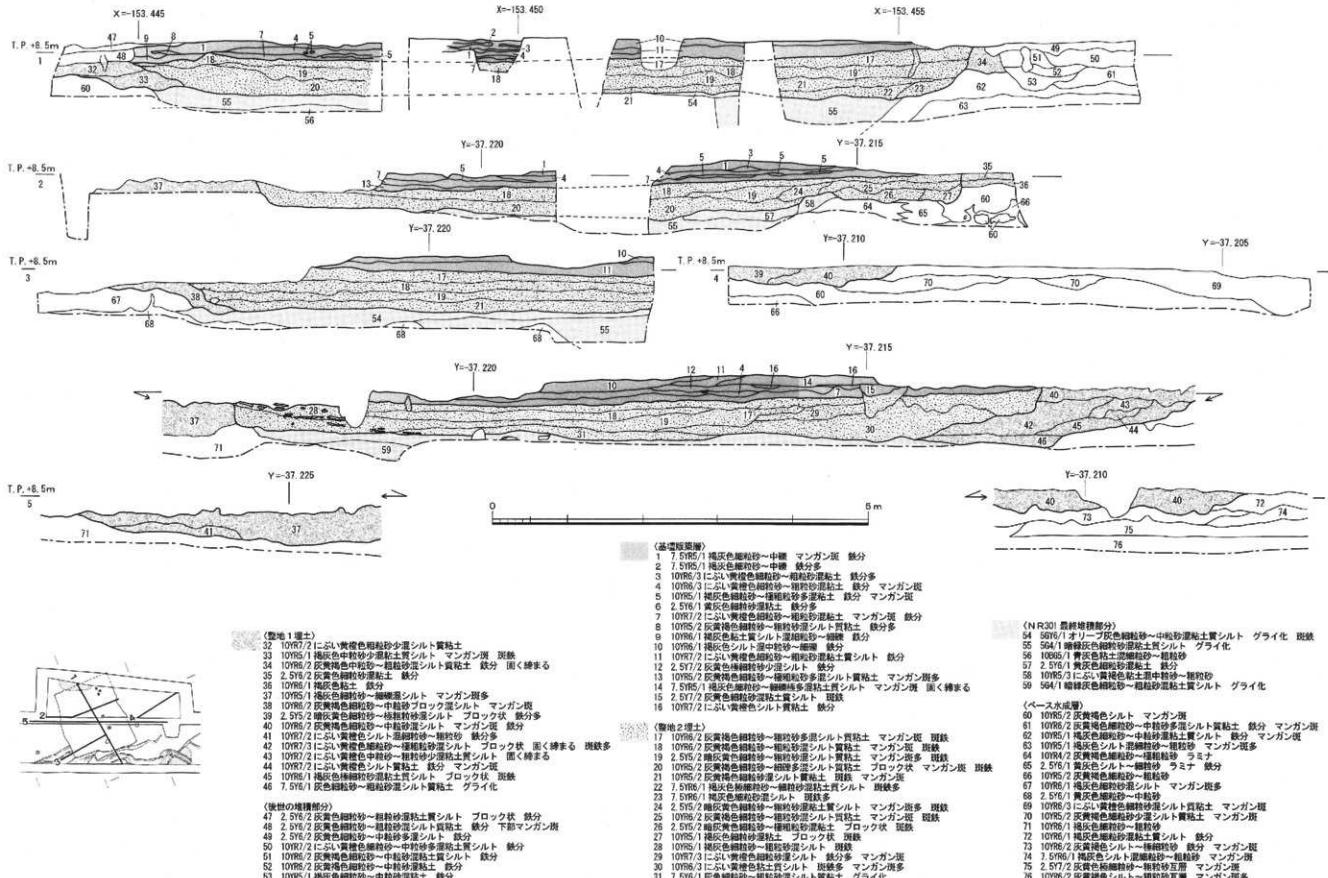
版築層内からの出土遺物は、瓦の他奈良時代頃までの土



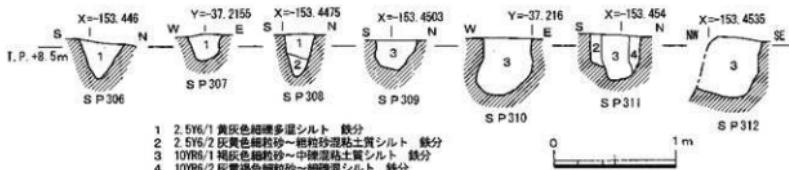
第51図 基壇版築層出土遺物 第52図 基壇版築層出土軒瓦



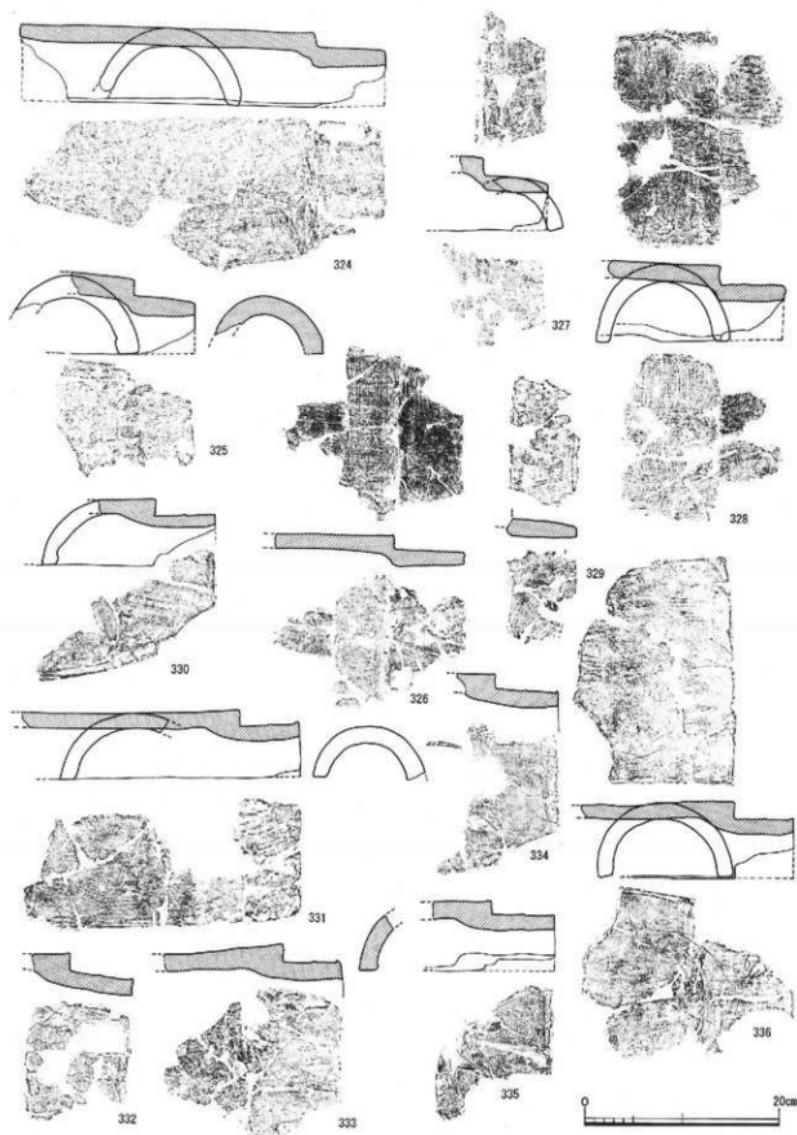
第53図 基壇部分平面図



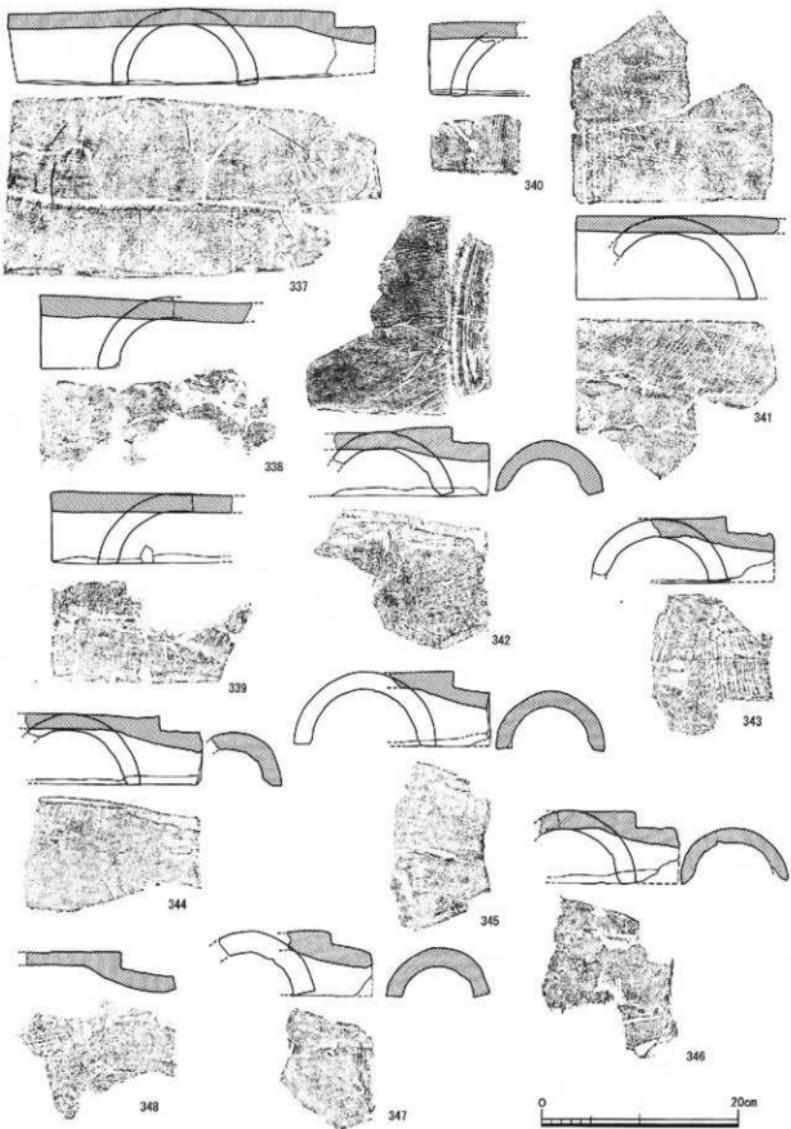
師器、須恵器片がある。瓦の内訳（破片数）は軒丸瓦1点・丸瓦約70点・半瓦約80点を数える。土器では唯一須恵器壺（322）が団化した。平城壺Hに当たり、肩の張りは弱く丸味がある。肩には灰が被る。奈良時代後半のものであろう。瓦は323～359を団化した。323は軒丸瓦V型式の瓦当小片である。色調は明褐色を呈する。軒丸瓦では、瓦当の欠落した軒丸瓦片がもう1点出土している。324～349は丸瓦である。324・325は丸瓦IIa類である。324は全長37.3cmを測り、色調は淡灰褐色。325は灰色を呈する。326～329は丸瓦IIb類である。326は明褐色を呈し、玉縁凸面の布目はナデ消されかすかに認められる程度である。327の玉縁凹面の布目は、狭端から4.1cmの粘土接合部を境に方向が異なる。凹面の布目は連続しており成形技法が注目される。328の玉縁凸面の布目は連結面にもわずかに続いている。329は玉縁凸面狭端部に凸線が生じている。330～336は丸瓦IIc類である。水切り突帯は330～332が断面台形、他は三角形である。333以外は玉縁凹面狭端部を削り、332・333・336は玉縁凹面にナデを加える。337・342～348は丸瓦IIe類である。337は全長38.0cm・広端部幅14.5cm・狭端部幅12.3cm・広端部高7.3cm・玉縁長4.1cm・玉縁狭端部高6.0cmを測る。淡褐色を呈し、胎土密で3mm以下の砂粒を含み、焼成やや不良である。凹面に糸切り痕を残し、玉縁狭端面はナデである。342は凹面側縁部にナデを加え、側縁部は削る。343は凹面にハケ状工具痕が見られ、側端部は削る。344は凹面・凸面の側端部を削り、また肩部に粘土バリが生じている。玉縁凹面狭端部はナデである。345は凹面側端部を削り、玉縁狭端面は削る。346は凹面側端部を削り、玉縁狭端面はナデである。347は凹面に縦方向の粘土接合痕が残る。肩部は丸味がある。348は凹面にナデを加え、玉縁凹面狭端部はナデである。346・348は、色調・胎土・焼成等がIIc類に酷似する。338～341は丸瓦の広端部である。338～340は褐色を呈するもので調整等も類似する。凹面の布目密度は8本/cmで、横方向の糸切り痕を残し、広端部・側縁部を削る。340は側端面を細かい単位で削る。341は淡灰色を呈し、胎土やや粗である。凸面タテナデで、広端部はヨコナデ。凹面の布目密度は10本/cmと細かく、布の綴じ目痕の溝が見られ、斜め方向の糸切り痕を残す。広端部には雑なナデを加える。丸瓦ではI類（行基葺き）と確認できる狭端部は出土していない。349～358は平瓦。349・350は平瓦II類である。349は暗褐色を呈し、胎土密で焼成良好で固い。分割界線が見られ、側端面は分割破面を残し一部削る。350は胎土やや粗で焼成やや不良。凸面広端部角を面取りする。凹面広端部に布端の痕跡と思われる溝が見られる。351～358は平瓦VI類で、351がVIa類、353～356がVIb類、357・358がVIc類、352がVIIa類である。351・353～357は灰色を呈し、胎土密で2mm以下の砂粒を含み、焼成良好で硬いものが多い。凸面は広端・狭端部を削るものがある。凹面は広端・狭端部を削る。側端面の凹面側角を面取りするものが多い。352は暗灰色を呈し、胎土粗で5mm以下の砂粒を多く含み、焼成良好で硬い。358は淡褐色を呈し、胎土密で焼成良好。厚さ2.5cmと分厚い。凹面はナデである。



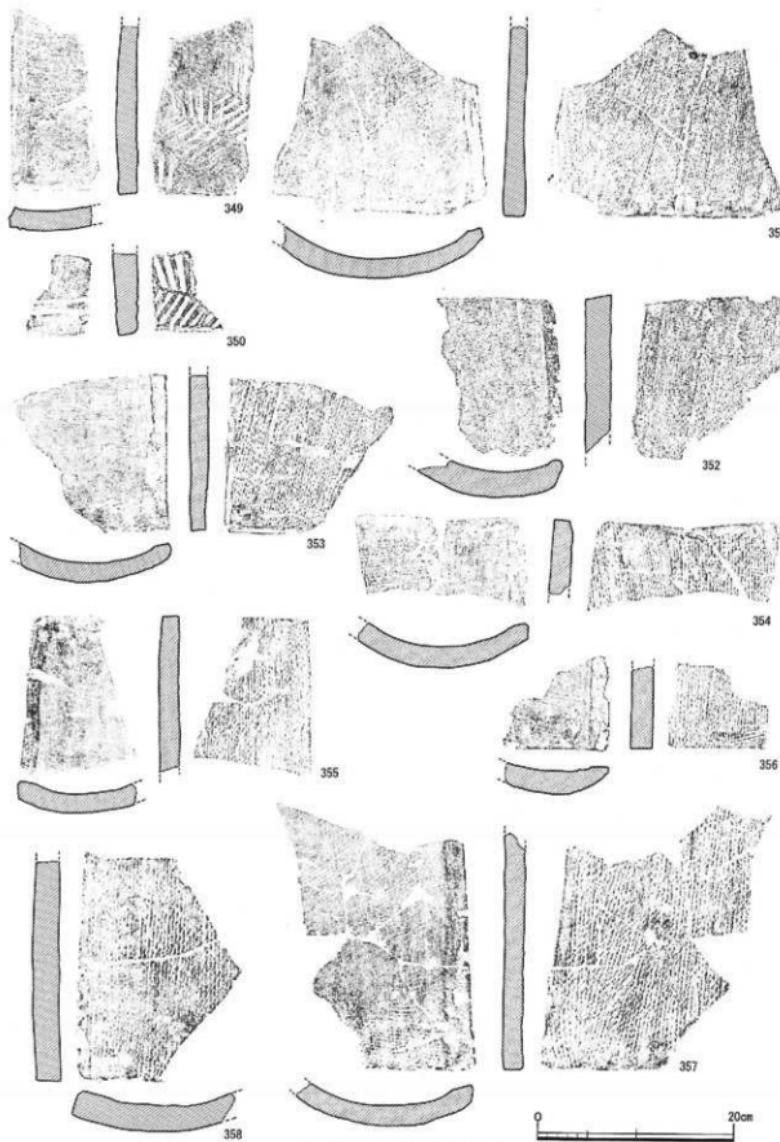
第55図 S P 306～312断面図



第56図 基壇版築層出土丸瓦①



第57図 基壇版築層出土丸瓦②



第58図 基壇版塗層出土平瓦

## 整地 2

基壇下位に当たり、平面的にはほぼ方位に沿った南北10.5~11.5m・東西9.0~10.0mの長方形の範囲で、深さは最大で約0.7mを測る。いわゆる掘り込み地業と思われ、整地1により整地された地表面を方形に掘りくぼめ、再度土を充填して整地している。掘方は南辺・東辺ではほぼ垂直に近く、北辺・西辺では緩やかな傾斜を成している。埋土はおおまかに3~4層程度に分層できるもので、基壇盛土に見られた版築構造は認められないが、水平堆積で固く締まる層相を呈している（第54図17~31層）。なお埋土は整地1埋土の層相に類似しており、掘り込みの底はN R 301に達している。西辺中央部の肩～底部には奈良時代後半までの瓦、土器が多量に廃棄された状況が見られ、石材も数点出土している。土器類は土師器、須恵器があり359~387を同化した。359は上師器皿Bで口径10.2cm・器高2.0cmを測る。明褐色で胎土密。口縁部2箇所に灯芯痕があり灯明皿である。360は土師器皿Aである。共に口縁部に灯芯痕が残り灯明皿である。361・362は平城土師器杯Aである。361は底部外面に木の葉痕が認められ凹凸がある。暗文は不明で、明褐色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を多く含む。362は内面が焼けて黒褐色を呈する。363は平城土師器皿Bに当たり、口径31.4cm・器高3.2cm・高台径26.2cmを測る。明褐色で精良な胎土である。底部外面へラケズリで、底部～体部間の外面にやや稜を成し、底面は高台より下がる。364は口径8.4cm・器高6.5cmを測る土師器高杯で、手づくね成形の小型品である。明褐色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を多く含みやや粗である。365は口径25.0cmを測る土師器鉢で口縁端部が煤ける。調整は外側へラケズリ、内面ナデである。淡褐色を呈し、胎土は3mm以下の砂粒を多く含みやや粗である。366~368は土師器甕である。366は口径19.8cm・器高18.3cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を多く含みやや粗である。体部外面の二箇所に黒斑を有する。367は内面全面が煤ける。368は明褐色で胎土密。369は土師器鉢で、胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。370は須恵器杯蓋である。371~382は須恵器杯身で、371~380が平城杯身A、381・382は平城杯身Bである。371~375・377は口縁部が外反、378・379は屈曲する形態である。375はやや焼成不良。372・374・375・380は口縁部に灯芯痕があり灯明皿である。376は内面の所々に煤が付着する。380はほぼ完形で、口径10.8cm・器高3.6cmを測る底部へラ切り未調整である。381は器高3.7cm・高台径8.2cmを測る。382は胎土密で精製品である。383は須恵器鉢で、382と同様に精製品で、外面は幅2~3mmのヘラミガキ調整である。384は須恵器壺で、平城壺Hに当たる。口縁の一部を欠くのみで、口径6.9cm・器高5.8cm・高台径5.4cm・高台高0.4cmを測る。外底面を除き灰が被る。385は須恵器平瓶で、口縁部が欠損する以外は完存する。肩部径11.5cm・頸部径3.6cmを測る。全面ナデ調整で、上面に灰が被る。386・387は須恵器壺で、386は平城壺A、387は平城壺Cに当たる。386は全体に灰が被り、頸部外面に直線のヘラ記号を施している。387は淡灰色を呈し、胎土やや粗、焼成やや不良である。内面の同心円タタキは非常に径の大きな円弧で構成されている。瓦類の内訳（破片数）は軒丸瓦9点・丸瓦約290点・半瓦約830点を数える。388~446を同化した。388~393は軒丸瓦である。388~392はI型式で、388・389・391がI b型式、390がI a型式、392がI c型式である。390の瓦当取り付け部凹面は、前面から向かって左が縱方向、右が門弧に沿ったナデ。丸瓦側縁部は端面へラケズリで、内面をナデにより面取りする。丸瓦部は凹面にナデを加えるが布目は残る。厚さは1.7cmを測る。393はIII型式である。瓦当が欠落し、周縁の珠文のみ確認できる。394~396は瓦当が欠損するが、胎土や接合部の状況からI型式で、394・396がI a型式、395がI b